



小品集 (2)



悠空冥海

死ねと言ったのは君。(1)

あたしはボストンバックに最低限の荷物を詰め込み、静かに部屋のドアを開けた。

大丈夫、母親は寝ている。帰ってきた時だって起きなかった。あたしは音をたてないようにゆっくりと階段を降りる。

ごめんね、パパ。それから、お母さん。

最後の段がぎい、と軋んで、少しだけ焦った。大丈夫、誰も起きてくる気配はない。

あたしは一番お気に入りの靴を履く。玄関を出たら、あたしは泣くんだろう。そうなるって分っているのに、どこか片隅ですごく高揚しているんだ、この心は。

時計を見る。午前四時五十分。ドアの取っ手を掴んだ。一度だけ振り返った。

「　　、　　。」

ありがと、さよなら。そう言おうと思っていたのに、言ってしまったら外に出られなくなりそうで、あたしは声に出さずに、喉の奥でその塊を飲み込んだ。

「行ってきます。」

だからその代わりに、いつもみたいに、そんなありふれた言葉だけを残して、あたしはとうとう家の外に出た。

寒い。

口までマフラーにうずめて、あたしは白のコートごと自分の体を抱いた。

*

小林玲人は根暗な少年だったと思う。ぶっきらぼうでコミュニケーションのとりにくい冷淡な異端児。高校時代に知ってから三年間、何の因果かずっと同じクラスだったけど、まったく話したこともなかったのだ。そもそも彼は友達付き合いを避けているような節さえ見えて、誰かと話したりたとえば一緒に帰ったりする友人もいないようだった。周りの男子たちがバカみたいに週刊誌を回し読みする中で（そんなあたしも人のことは言えない。女の子だって男子には見せられないような漫画本を回し読んでキャーキャー言っていたのだ。もちろんあたしもその中の一人）、彼だけは始めっから興味もないのか小難しそうな本ばかり読んでいた。正直に言えば、苦手というより嫌いなタイプの男子だった。容姿だって平々凡々で、つまり二回続くということは平均より心なしか悪いくらいなのだ。そのアウトローな雰囲気がいい、なんて夢見がちな乙女も少しはいたけど、たいていは漫画の中に格好良い王子様を見つけて眠り姫を気取っていった。夢見るだけに。

まあそんな程度の低い冗談は置いておくとしても、ともかくあんなやつと話したりするなんてあたしにとっては考えられなかった。いや、話さざるをえなかったわけなんだけど。

そんなこんなで、じゃあ何で結局彼と話すようになったかっていうと、まあありふれた話といえばありふれた話だ。高校生っていうのは変なもので、三年にもなると最後の、とかって接頭語をつけてみんな異様にやる気を出したりする。そうやって客観視してみたあたしももちろんそ

の輪っかの中の一人なわけなんだけど。その中でも一際気合いが入るのが文化祭、ってやつだ。だからあたしたちの話は、そこが始まりでいいんだと思う。高校三年の七月、夏休み前の話し合い。文化祭で何をやるか。

体育祭で団長を務めた麻上っていう男子が喫茶店、と言い（女の子目当てだ。馬鹿）、女子のうちでも頭取的な存在だった三上さんが演劇、なんていうものだからクラスは騒然、当然の如く話し合いなんかで決まるわけもなく多数決となり、喫茶店十八票演劇十九票無効投票っていうか無投票一で演劇になった。いわずもがな無投票は小林玲人なんていう非協力的な細目だったわけだけど。

無記名だったけど、みんな誰が出してないかは分かっていた。ただ、女子は女子でせっかく決まったものを平行線とするのをよしとせず、男子は男子でめんどくさがっていただけだ。もっともあたしは、本人から厭味ったらしい口調で知らされることになるだけど。

まあそれはそれ、とりあえず辛うじて演劇に決まったあたしたちのクラスは特に障害もなく場所も時間もとれ（その辺は三上さんがうまくやったらしい）、演目は同じく女子賛成多数でロミオとジュリエットに決まった。別にあたしは演劇だってロミオとジュリエットだって特別やりたかったわけじゃない。ただ、女子というのは結束するもので、つまりもし反対でもしようものなら大変なのだ。

そんな微妙な力関係はともかくとして、あたしに無理難題が降りかかったのは配役を決めるときだった。ロミオとジュリエットはすんなり決まった。当然、男子の頭と女子の頭だ。つまりそこには麻上君と三上さんをあわよくばこれを機会にくっつけてやろうという暗黙の了解があったわけだけど。この二人は時に対立するけれど、本当は仲がいいのだ。そして彼らが互いに思いあっているなんてことは周りからすればばればれだった。最も、本人たちは柄にもなく恥ずかしいのか気づくことも伝えることもこれまでなかったわけだけど。だからまあ、二人が主役に決まったときの表情といたらなかった。恥ずかしがってる三上さんなんてレアだ。というか、三上さんという人がいるにも関わらず女子目当てで喫茶店とか言うんだから男ってやつは馬鹿な生き物だ。まあそれはそれ、楽しいことになりそうだ、なんてほくそ笑んでいたのが運のつき。そのあとの三上さんの一言は衝撃だった。

「んじゃ、シナリオは佐藤さんね。」

佐藤さんって誰だろう。そんなバカバカしい疑問が一瞬浮かんだ。あたしだ。こんなにありふれた名字なのに、このクラスに佐藤さんは一人しかいないのだ。

「それと、小林君。」

クラス中がびくっとしたのが分かった。今、誰って。まさか。そんな声にならないどよめき。こんなにありふれた名字なのに、このクラスに小林君は一人しかいないのだ。

「佐藤さんは少女漫画たっくさん持ってるし、小林君はいつも本読んでるから、できるでしょ、ね？」

なんて軽く流してにっこり笑う女王を、あたしはあっけにとられて見るしかなかったのだ。

「そんな訳で、不本意ながらシナリオ担当になった訳だけど。」

放課後。私は無表情でなんだかよくわからない本を読んでいる彼の前に立っている。あたしだってすぐ帰りたところだが仕方がない。教室の端の方では三上さんとその取り巻きが見ていないふりをしながらこちらに神経を向けている。問題の男は耳栓でもしてるんじゃないかってくらい見事にあたしの発言を無視。聞けよ、あんただよ、あたしの話を聞くべきは。

「あのね、聞ってる、小林君。」

ぺら、とページを捲り、彼の眼は文字を追うばかり。こっちを見ようともしやしない。

「ねえ、話しかけているんだけど。」

あたしはちょっといらいらして彼の机の脚を軽く蹴った。それでもまったく反応なし。まったく、シナリオ書かなきゃならないってだけで面倒くさいのに。なんであたしがこんなやつといっしょにやらなくちゃいけないんだらう。ホント、貧乏くじだ。最後の最後でこんな役割。

「あーあ、まったく、やってらんないわよ。」

これみよがしに呟いてみても、彼は次のページへ進むだけ。

仕方がないので彼の目の前でずっと立っていてやることにした。こうなったら徹底抗戦だ。集中できなくしてやる。いっそ変な顔でもして笑わせてやろうかと思ったけど流石にバカバカしいのでやめた。それにだいたい、そんなことまでしても無反応だったら寂しすぎる。あたしはそんな切ない人間じゃない。切ないっていうか、可哀想だけど。

仕方ない、借りた漫画でも読もう。そういえばロミオとジュリエットも一応読んでおかないといけないんだ。シナリオ書くってことは、読んでおかなきゃならないんだらう。

あーあ、面倒臭い。彼に聞こえる程度に呟いて、あたしは教室を出た。無反応。まったく。

図書館へ行こうと北校舎へ足を向けたあたしの後ろで教室のドアが開いた。そうしてぞろぞろと足音。

「ねえ、佐藤さん。」

背中にかけられた声に振り向くと三上さんが取り巻きの引き連れて立っていた。ちょっと嫌な感じだ。

「何。」

今の言い方は少しぶっきらぼうだったかな。だけどあたしのせいじゃない。あの細目が悪いんだ。

「うまくやれそう？」

「そう見える？」

あんたのせいよ、そう言ってやりたいところだけど、流石に我慢した。先に行ってて、三上さんが女の子たちの方へ振り向いた。女の子三人は頷いて、校門で待ってるね、ばいばい佐藤さん、なんて手を振って階段の方へ行ってしまった。ばいばい、とあたしも返す。

「ごめんね。やっぱり、失敗だったかな。」

それを見届けてから三上さんは逆方向へ歩き出した。あたしは黙って着いていく。あつたりまえ

でしょ、喉まで出かかった科白を自分の中だけで消化した。やっぱりって。分かっててなんで指名したんだろうか。

「小林君ってさ、」

教室から十分離れると、三上さんは渡り廊下の窓を背に立ち止まった。ああ、そうか。つまりはあの男に聞かれない話をしたいわけだ。

「行事とか、参加してたことないよね。」

何であたしに訊くんだろうか。あんなやつと全然関係ないって言うのに。

「多分ね。」

だから返事は曖昧にとどめた。

「三年間同じクラスなんじゃないの？」

だから、曖昧にとどめたのに。

「そうだけど。」

ああもう、つまりはそれだけであたしと組ませたわけだ、この女王様は。絶対権力者ではなく、どうやら啓蒙君主らしい。そんなことに気を使ってわざわざ彼を参加させようとしているわけか。ご苦労なことだ。

「やっぱりさ、最後の文化祭じゃない。もう受験だしさ、これを逃したらクラスみんなで作ることなんかなくなっちゃうわけでしょ。」

「そうだけど。」

窓枠に顎をのせてとりあえず頷いた。夕焼けはまだだ。三上さんとは反対の窓を向いて、あたしは気付かれないように溜息をついた。幸せが逃げてゆく。

「みんなでやりたいのよ、私は。うん。わがままだって、分かってるんだけどね。」

自分でやればいいじゃん、と言おうとして、三上さんと麻上君を担ぎあげたことを思い至った。なんというか、自業自得、というやつなんだろうか。それなら代わりに佐藤さんがジュリエットね、とか言われても困るしなあ。

「そういうのってさ、迷惑なのかな、やっぱり。」

「どうだか。あたしには迷惑だけど。」

あの男の心境があたしに分かってたまるか。

「でも、佐藤さんは真面目にやってくれるしね。」

「はあ。」

今度は聞こえるように溜息をついた。いきなり何だ。

「やっぱり、正解だったかな。佐藤さんに頼んで。」

「やめてよ、そういうの。」

「どうして？」

三上さんがこっちを向いた。あーもう。

「なんか、ちゃんとやらなきゃいけないでしょ。」

「だから言ったんだけど。」

クスッと笑うな、コノヤロウ。言ったこっちが恥ずかしいったら。

「その代り、私もちゃんとジュリエットやるわよ。」

まったく、卑怯だ。

「キスシーンあるよね、確か。」

「だいじょぶ、うまくごまかすから。」

「しちゃっていいよ。ほら、麻上君も嬉しいんじゃない？」

ぱっと三上さんが顔をそらした。意外と初心なんだ。どうやらあたしは随分彼女を誤解していたらしい。彼女はもっと、なんというか高慢な人間だと思っていた。もちろん自然にグループの中心にいるようなカリスマも、物事にはっきり白黒つけるような性格のことも分かってはいたけれど。でもちゃんと話したことはそういえばなかった。こうして二人きりで話してみると、見えていなかった部分が出てくる。

「三上さんってさ、」

な、なにかしら、なんて動揺しちゃってまあ。何訊かれると思っているんだか。

「もっと怖い人かと思ってた。」

「そう？」

それは心外、とでも言うような表情だ。彼女は自分が周りからどう見られているかとか、そういうことをいちいち気にしない性質らしい。まあだからこそ毅然としていられるのだろうけど。だから彼女が麻上君のことを好きなんだってことが、彼女が何を言わなくても周りには分かっただけでも気にならないし気付かないのだ。それはある種の鈍感で、彼女が彼女らしく、生きたいように生きていくには必要な能力なんだろう。少しだけ羨ましいと一瞬思った。だけどあたしは、自分が誰かを好きなことを他の誰かに見破られるのは嫌だ。まあそれでいて分かっただけのものなんだろうけど。恋愛感情なんてものは。ちょっとした目線の違いとか、少しだけ短くなったスカートとか、男子が気付かないほどに乗せられたお化粧品とか。つまりは三上さんの爪にコートがかかっていることとか、ほんの一ミリ上方修正された眉毛とか。そんなもんだ。

「でも、結構可愛いんだね。」

「なによ。おだてても何も出ないわよ。」

「麻上君も幸せね。」

な、やめてよ、もう。何言ってるんだか、だいたいね、なんで麻上君を、と顔赤くしながらうろたえている三上さんを放ってあたしは図書館に足を向けた。だからさ、ばればれだってば。

「ねえ、三上さん。」

「な、なによ。」

その前に、もう一つだけ言いたくなった。

「あとで何か奢ってね。」

あーあ、ほんっと、損な役回り。

図書館に入ると、真美ちゃんが貸し出し処理をするパソコンの前で本を読みながら唸っていた。うーんとか、あーとか、うわーこれはとか。耳まで赤くしていったい何を読んでいるんだろう。あたしはカウンターの後ろを回って真美ちゃんの背後を取る。気付いた様子はない。静かな図

書館では息遣いだって聞こえてきそうな近距離なのに。

真美ちゃんは真面目な文学少女といった感じで、他の女子が猥談していても恥ずかしがって自分の席で顔を赤くしているような生徒だ。どうにも耐性がないらしい。一度冗談半分で、好きな男の子とかいないの、と振ってみたら、わ、わたしは、その、そういうひとは、と本の中に顔を埋めてしまった。だけどあれだ。彼女だって人間の女の子なんだし、そういう話や感情に興味がないわけがない。だって他の女子がそういう話をしているときには本なんかを読んでたりするくせに顔が赤くなっているっていうのは、しっかりちゃっかり聞いているってことだからだ。ということは、ははあ、もしかして。ちょっと意地悪な発想が浮かんだ。ちなみに、さっきあの男に感じさせられた鬱憤とは全く無関係である。

後ろから真美ちゃんの読んでいる本を確認する。漫画だ。少女漫画だ。珍しい。回し読みしている少女漫画は貸してあげようか、と勧めても読もうとしないのに、実は図書館で読んでいたんだ。というわけで、

「何読んでいるの、真美ちゃん。」

ひゃわ、と漫画みたいな驚き様で真美ちゃんは椅子から三センチほど飛び上った。読んでいた漫画をぱたっと閉じて反対を向きながら背中にかくして一言。

「あのその、これは、」

かくした漫画本を無理やりあっさり奪い取る。

「へえ。『シフォンケーキを食べた後』。なんか妙な題名ね。どういう話？」
予想外のタイトルだ。あたしの知らない漫画だし。

「そんな大きい声で題名言わないで下さいよう。」

「なになに、『好きだよ...』そう囁くと彼は耳たぶに口づけた。あ、だめ、そんなことされたらあたしまた.....」

「なんで音読するんですかあわわ返して下さいよう」

なんでかこういう娘っていじめたくなるよね。どうもあたしはいじめっ子体質らしい。三上さんといい真美ちゃんといい苛めがいがある。

「我慢、できない。」

「何で続き読むんですかそして何で無駄に上手いんですかあ。」

そう言われても。

「結構恥ずかしい内容ね、これ。えー、『甘いのは、嫌.....?』彼はブラウザのボタンに手をかけるとそのまま私の.....」

「もうやめて下さいってばあ。」

真美ちゃんが本を取りかえそうと手を伸ばす。あたしはそれに甘んじながら、

「『嫌なわけっ『なら、さ.....』つつつ』、でもダメ、そんなとこ、触った、ら.....」

「書いてませんよう。もう。佐藤さん、酷いです。」

かわいそうになったので離してあげた。真美ちゃんは漫画をかばんの中に入れてしまった。

「よく覚えてるね。」

仕方ない。別の手でいこう。

「さ、さっき読んだところですよ。」

「へえ。あの真美ちゃんがね。」

全く、けしからんやつじゃ。あたしに教えてくれないとは。

「ううう。佐藤さん意地悪ですよ。」

「興味があるなら言ってくれば貸してあげたのに。」

顔を真っ赤にした真美ちゃんは上を見、下を見、右を見た後に左を見て観念したのか、

「もう駄目です私もう死ぬしかないんですもういいですどうせあたしなんてええあたしなんてそうですよねわかってますわかってますよわーたーしーがー悪いんですよもういっそ消えてなくなるしか」

などとまくし立てている。自分自身に。

「その前に一回くらい経験したら？」

面倒くさくなったのでそんな捨て台詞を吐いて「え、経験って、はわわ～」とかよくわからない鳥の蒸し焼きみたいな顔をしている真美ちゃんを放ってあたしは図書館の奥へ進んだ。

自慢ではないけれど、あたしは一切小説を読まない。だから図書館なんてものには用がないわけなんだけど、やたらと古臭い紙の匂いがする辞書の棚を過ぎたところに世界の名作なんてコーナーがご都合主義の少年漫画みたいな優しさに並んでいた。隅っこの方でなんだつまんないの、などと呟きながらとりあえず左上から題名を流し見していく。知らない本ばかりだ。あーあー、いーいーうーえーえーおー、まで見て探している本の最初の一文字が「口」であることに気づいた。馬鹿みたい、というかおバカだ。誰も見ていないのに少し恥ずかしくなって右下から探していくことにした。わ、ろ、ろ、ろ、ろー、れ、れ？

「ないよ？」

いやいや多分きつと見落とすだけなんだと思う。そういうわけでもう一回だ。

「ないよ？」

何度見直したって見つからないものは見つからない。

「え、何、うわ、」

どうしてこうやってタイミングが悪いんだろう。

「何で？」

返ってくるはずのない答えを求めてあたしの声はちょっと涙ぐんでいた。

「真美ちゃん真美ちゃんっ」

「な、なんですか今度はっ」

ぱっと飛びはねて警戒されてしまった。

「ちょっと聞いてよ」

「聞きますけど」

まだちょっとのけぞったままの真美ちゃんは、辛いものを一口おそるおそる口にはこぶ時のような顔をした。つまりは駅前カフェのハバネロパフェである。辛さを無理やりクリームで押さえつ

けて食べるけどやっぱり喉の奥が辛くなるってわかってるのに、他人が食べてると一口もらいたくなるようなものだ。

「図書館のことですか？」

あたしは勢いよく首肯する。高まりつつあったのに削がれてしまったやる気は殺意めいた気分に変っていた。誰だこのタイミングで普段読むはずもないロミオとジュリエットなんか借りた奴は。絞首刑若しくはナイフか毒で。作品にあやかる感じで。

「ロミオとジュリエットなんだけど、まさかこの図書館にないなんてことはないでしょうね。」

「あったはずですよ。私、一年の時に読みましたから。」

いたよ読むような奴。ロミオとジュリエットって、みんな何となく話の筋は知ってるけど読んだことがない類の話だと思ってたのに。

「じゃあ真美ちゃんやってよ脚本。」

「ヤです。」

至極当然の申し出だと思ったのにきっぱり断られてしまった。

「私衣装と演出ですから。それに図書委員会の方もあるんですよ、無理です。頑張ってください、佐藤さんと小林君で。」

「だってさあ、」

「それにさっきのこと、私一生忘れませんから。」

何気に酷い気がする。それは。いやまあ自業自得だろうけど。

「小林と一緒にるのがまず嫌だしね。」

もういいやと溜息を吐いて図書館を出ていこうとしたあたしの背中に、真美ちゃんが一言投げかけた。

「大丈夫ですよ、小林君、悪い人じゃありませんから。」

どうしてそうなるのよ、まったく。

*

教室に戻ると、男子一人を除いて誰もいなかった。

「なにアンタ、まだ本読んでたの。」

もちろん、あたしの話なんて聞きやしないそいつは、小林玲人だ。どうせ帰ってこない返事を少しだけ待っていた自分がなんだかものすごく馬鹿らしくなってきた。あたし何やってんだらう。こんな奴の相手してないで、ああでもそれってつまりあたし一人ってことになるけど、与えられた仕事をそれなりにこなせばいいだけなのだ。話のあらすじは知ってるんだし、読まない方が面白いものができるような気もする。流れだけ書けばセリフなんて役の人が上手いこと作ってくれるだろうし。もういいや、一人でやろう。そうと決めればとっとと帰って家でやった方がいい。なにせこいつの顔を見ないでいいんだし。

「あたしもう帰るね、小林君。」

小林玲人は何も言わない。目線を寄越そうともしない。

「じゃ、あ、ね。小林君。」

だからあたしは出来るだけこの苛立ちが伝わるように一文字一文字に強勢を置いて、思いっきりドアを開けて、廊下に出した体の後ろで力いっぱいドアを閉めようとして、

「あー、佐藤さん、だっけ？」

突然空耳がした。おかしい。

「これ、返しといて。」

みょうちきりんなひよろ長い物体が、なんかあたしに向かって話しかけているのが見える。夢っぽい気もしないのに。

「んじゃ、また。」

あたしは言われた意味が分からずに、目の前をずかずかと無神経に通り過ぎてゆく小林玲人のみょうちきりんなひよろ長い背中を、豆鉄砲喰った鳩がついでに息を詰まらせたみたい顔よりいくばく緊張感のない顔をして、進行形の驚きが止まらなかった。I'm surprising. どう考えてもおかしい。

*

「あたしにどうしろと言うんだあの男は。」

そんなわけで机に置いた本の題名は、

「『ロミオとジュリエット』、ねえ……。」

なのである。わけのわからないまま家に着いてしまった。あの男のやりたいことが分からない。あんだけさんざん人のことを無視していたのに最後の最後でこれですか。真美ちゃんだってさ、知っているなら教えてくれればいいのになーにがいい人だと思います、よ。まったく。

「あー、こうして目の前にあると読む気が失せるわあ。」

なんかもう佐藤さんは無気力状態ですよ。

「ま、でも、読まなきゃ、だよねえ。」

観念したあたしは砂糖たっぷりのカフェオレをお供にシェイクスピアに手を出した。開けると古い本に特有のあのにおいがする。あんまりなじみはないけれど、このにおいはきれいじゃない。まあ腐ってるようなのは嫌だけど。

時刻は午後七時。今日中には読み終わるだろうか。無駄に気合いを入れてみる。覚悟しろ、シェイクスピア。

*

最後のページまで読んでしまうと、あたしは悲しいやら切ないやらで泣きそうだった。どうしてか涙がこぼれることはなかったけれど。カフェオレはすっかり冷めてしまった。悲しいお話。一目ぼれしてここまでになるっていうのがあたしにはよく分からないけれど。愛にさえなっていないように思うのに。まだ恋だよって、盲目なだけなんだって、そう言いたい気持ちもあるのに

、それでもやっぱり泣きそうなんだ。こぼれおちる気配はないけれど、女の子なんてのはそんなものだ。この二人は馬鹿だと思うのに、それでもジュリエットの気持ちがあたしにはわからなくもないのだ。ああそれでも、死んでしまうことなんてしなくたっていいのに。そう思うのは、あたしが何か読み落としているからなのだろうか。それとも、何か。

冷めきったカフェオレはそれでも甘い。眼尻にたまった涙を袖で拭いて、あたしは顔を洗いにリビングへ降りた。今日も多分、母親は帰ってこない。

「もう、三日目、か。」

そういえば。小林玲人はこの話を、どんな顔でどんな気持ちで読んだのだろうか。あたしみたいに感じたのだろうか。少しは感動したのだろうか。もしかして、あたしよりももっと、ジュリエットの気持ちが分かるのだろうか。ロミオのバカさ加減も。あの、本ばかり読んでる読書オタクには、やっぱり読んでいるなりにあたしとは違った感動があったのだろうか。少しだけ、ほんの少しだけ小林玲人に興味がわいた。協調性も社会性もない読書オタクだけど、あんなに他人と話をしないのには何か理由があるのだろうか。何を考えているのやら、まったく。

*

次の日学校に行くと小林玲人はまた本を読んでいた。新書本だ。ホントに、好きなやつだ。周りが昨日のテレビの話とか、誰とかいうドラマに出ていた芸能人がかっこいいとか、今週のこの漫画はあんまり面白くないとか言っている間で黙々とページをめくっている。読むのがやたら早い。ホントに読んでるのかこっちが不安になるくらいに。何を読んでいるのやら。

あたしが自分の席につくと、三上さんが近付いてきた。

「おはよ、佐藤さん。」

「おはよ、三上さん。」

あいさつされたのなんて初めてかもしれない。なんとなくグループが違ったので、あんまり話したことはなかったけど。

「調子はどう。」

「あんまり。」

「それはお気の毒に。」

何が言いたいやらだ。

「日本語で英語のあいさつみたいにあいさつするのは初めてよ。」

「それもよくわかんない文章ね。ロミオとジュリエットは読んだ？」

こらそこ、勝手に前の人の席に座らない。

「読んだよ。」

「マンガで？」

「ちゃんと小説よ。」

少しむくれて答えると、三上さんは何が楽しいのかくすりと笑った。

「ごめんごめん、何か佐藤さんってマンガたくさん読んでるイメージがあるから。」

「む。」

確かに間違っていない。間違っていないけど、何かそれはそれで心外だ。

「人をオタクみたいに。」

「だって、いろんなマンガ読んでるから。」

少女漫画だけだとフツウノオンナノコで、少年漫画に手を出すとオタクなんだろうか。どっちかっていうとあたしはただの雑食なんだけど。

「もう、少女マンガ回さないよ。」

「あ、それは困るわね。せっかくの楽しみなんだから。」

なーにが。結局似たようなものじゃない。

「それで、小林君と話はした？」

どうやらそれが聞いたかったらしい。

「向こうに聞けばいいじゃない。」

「それは麻上君にお任せ。」

まったく、この女王様ときたら。面倒はオトコノコ任せですか。いつの間に麻上君と小林玲人についての話なんてしたんだか。

「少しね、会話ともいえない程度には。」

「へえ、すごいじゃない。」

三上さんは本気でびっくりした顔で、

「奇跡みたいなものね。」

なんて零した。おいおい。

「そんな低い確率にかけたの自分じゃない。」

「そうだけどねー。」

そうだけどじゃないでしょうに。

「ま、これでもうシナリオは安心だわ。」

「覚悟してよ、すっっごく甘いセリフ言わせてやるから。」

そのくらいやらなきゃ腹の虫がおさまらない。さしあたっては真美ちゃんが昨日読んでいたマンガでも参考にしよう。

「期待してる。」

なのに三上さんは余裕も余裕であっさり返すと、登校してきたとりまきの仲の良い女の子たちのところへ悠然と去って行った。

「麻上君に言わせよう、三上さんじゃなくて。」

多分そっちの方が効果的だ。何言わせようか思案していると珍しく真美ちゃんが遅めの時間に教室に入ってきた。あたしがいるのを認めると、悪意はないわりにちょっと魔女っ子的な笑みを浮かべて寄ってきた。

「おはようございます。」

「おはよ、真美ちゃん。」

真美ちゃんはあたしの前の席に腰かける。今度は正真正銘席の持ち主だ。

「小林君と話しましたか？」

あんたもか。何で二人揃ってそういうこと訊くんだか。

「話したって言うか声聞いたって言うか。」

事実会話にはなっていない。あれは事務連絡にも劣るんじゃないだろうか。一方的に本を押しつけられただけのよう。

「急にボール投げられた感じですか。」

「そんなかんじね、確かに。」

こいつ、見てたんじゃなかろうか。ふてくされたあたしとは正反対に真美ちゃんはくすりと笑った。真美ちゃんってこんな風に笑う子だったろうか。

「何が面白いわけ。」

あたしはなんだか気に食わない。人の苦勞をなんだ。

「いいえ、別に。」

あたしはやっぱり気に食わない。今日のこの子はいじわるだ。

「あのさ、真美ちゃん。」

「何ですか、改まって。」

だからあたしはまだ微笑んだままの真美ちゃんに向かってちょっと仕返ししたくなった。

「小林君と付き合いあるの？」

「ありますよ。よく図書館で会いますから。」

コノヤロウ。いけしゃあしゃあと付き合いありますとか言いやがった。仕返しになりゃしない。

「で、昨日あんなこと言った訳？」

「悪い人じゃありません？」

「そう、それ。」

ロミオとジュリエットを小林玲人が借りたと知っておきながら知らんぷりをした上に意味深なことを言った罪は重いよ。あたし的には。

「悪い人だったですか？」

それなのに真美ちゃん今日はホントに悪い娘だ。

「違うけど、まあ。」

確かに、悪い人間でなかったのは認めるけど。

「じゃあいいじゃないですか、それで。うまくいきますよ。頑張ってください。」

そんな捨て台詞を残して真美ちゃんは前を向いてしまった。時計を見ればもう授業が始まる時間だ。あーあ、もう。なんだか釈然としない。それもこれもあの細長い奴のせいだ。あたしは一分ほどまばたきもしないで、呪い殺せるんじゃないかっていうくらいの眼光（これは後で友人に言われた）で小林玲人を見つめていた。あいにく恋する乙女の視線は演技でも出来そうにない。ま、それはどうでもいいか。演技しなきゃいけないこともないんだし。

放課後、あたしはまた図書館に行った。なにしろ本を返さなきゃならない。ロミオとジュリエットの話自体は短い。あらすじだけ覚えていて、セリフ回しは自分たちでつくった方が多分面白くなるだろう。確か最初もそんな風に考えていたはずだ。まあまたみたくなったら借りればいだけなんだし。

今日の貸出当番は真美ちゃんじゃない。真美ちゃんは私今日部活ですと言って帰ってしまった。帰宅部め。なにが部活です、よ。まったく、おとなしいだけかと思っていたら思いのほかつわものだ。意外と芯がしっかりぶつとい。

気が向いて図書館の奥の方へ行くと、三上さんと麻上君がそれぞれ机の反対側に座ってにらめっこでもするように見つめあっていた。つまり、ロマンチックな感じが一切しない。むしろ喧嘩一歩手前みたいな雰囲気はどこことなく漂っていて、それを三上さんの取り巻きの女子たちが遠くからひそひそしゃべりながらまさに取り巻いていた。どうしたんだろう。三上さんと麻上君はあれで結構仲がいいように見えたのに、今は険悪ムードだ。取り巻きの子たちは直接言葉をかけられないで、三上さんと麻上君も何か怒ったようにそれぞれ腕組みして沈黙を保っていた。「あ、佐藤さん。」

取り巻きの一人があたしに気づいた。たしか、穂波さんだ。

「どうしたの、何か険悪だけど。」

特に気を使わずに返答した。むしろ緩んでいたのかもしれない。言った直後、まずったと後悔した。んな不用心に核心つかなくてもいいのにあたし。わざわざ関わりに入った格好じゃないこれじゃあ。

「それがね、三上さんが、」

穂波さんの話だと、こういうことらしい。三上さんが麻上君を、文化祭の話があると呼び出した。三上さんとしては、演劇になってしまったこと、その主役たるロミオが麻上君になってしまったことを謝りついでに焚きつけたかった。だけど麻上君が、今さらになって俺はロミオなんかやらないと言いだしたらしい。理由は明かしてくれないが、三上さんが何を言っても聞く耳もたずなのでお互い意地を張りだしたというのだ。

「なにそれ。」

後悔したのもつかの間、なんだかとっても力が抜けた。

「男の子ってバツカねえ。」

まったく何でそう恥ずかしがっているんだか何だかしらないけど女の子の勇気を足蹴にするんだか。

穂波さんら取り巻きの女の子たちも口々にそうでしょなどと賛同する。何か、言いたいことが伝わっていない気もするけれど。

「三上さん、ちょっと聞きたいことあるんだけど。」

馬鹿馬鹿しいのでさっさとこの重たい空気を壊させてもらうことにした。

「何。」

うっわ重すぎる。いつもの気高い感じがむしろもう怖いだけの鬼の角みたいにこっちへ向けら

れる。あーもう、そんなに眉毛釣り上げちゃってまあ。プライドが高いのか馬鹿なだけか。

「俺、部活あるから。じゃあな。」

男の方は男の方でいいタイミングだとばかりに乱暴に蹴って席を立つ。むやみやたらに大きく振りかぶって担いだバックが取り巻きの女の子たちのすぐそばでひゅっと唸って一人が驚いて座り込む。はいはい、もうどうでもいいからどっかいったいなさいよ、まったく馬鹿って奴は。

「逃げるの。」

あーもう、それなのになんでそうやってわざわざ焚きつけるんだろうこの女王様は。目を閉じて、静かな重圧をかけようとでもしているんだろう。無駄なのに。

「逃げてねえ。部活だって言ってんだろ。」

麻上君は吐くように捨て置いた。まったくバカバカしいぜ、こんなのを為に時間使っちゃった、とか何とか。わざわざ大きい声でなにいきがってるんだろう。馬鹿だな、ホントに。

「逃げてるじゃない。」

三上さんはすっと立ち上がる。座りこんでしまった取り巻きの一人に手を差し伸べて立たせると、そのまま後ろに携えて麻上君の方へ歩む。そのくせ全く歩み寄る気は見えない。

「うるせえな、いい加減。」

「理由くらい言いなさいよ。」

「だから嫌だってんだろーが。」

喧嘩再開。高校も三年になって口喧嘩なんて見るとは思わなかった。どっちも意地っ張りだ。

「ロミオはそんなに嫌？」

「嫌。」

一蹴する。された方は少しだけ、ほんの少しだけ寂しそうな表情を見せた。しかしすぐ険しい顔つきになる。させた方はその表情の変化に気付きもしない。男の子ってこれだから。いやまあ、この男だけなのかもしれないけど。

「ロミオなんて柄じゃねーだろ俺は。」

だからこの男は、三上さんが話しかけるときに本当はすごく勇気が必要だったなんてことも気付かないのだ。

「それが理由？」

勇気とプライドと何やらいろいろなものを足蹴にされた恋する乙女はそれでも立ち向かう。正面からぶつかることが、まるでたった一つしかない解決策のように。そして、それは正しい。

「そうだよ。もういいだろ、誰かやりたい奴探せ。」

「ふーん。ただ単に、恥ずかしいって事？」

こうしてお互いに意見をぶつけ合って、それで説得したり何か妥協点を見いだせれば、きっと雨降って地固まるとかいう諺みたいに仲直りできると信じているのだろう、三上さんは。

「お前、ホントうるせえ女だな。」

「恥ずかしいんだ。図体ばっかでかくて、心の方はおこちゃまですか？」

だから、傷付けられても、どんなに酷い事を言われても、やり返して会話を続けて必至に耐えて糸口を探しているんだ。まあやりすぎだとは思うけど。いくらなんでも挑発しすぎ。言い過ぎや

りすぎ仕返しすぎ。でも三上さんにとっては、今できる唯一の方法なんだろう。ここで逃がしてしまえばもう後がないくらいの気迫で。失敗したら、もしこのまま険悪な空気だったら。終わってしまうのを恐れて、だからこそ後には引けない。

「あーはいはい、好きなように言ってるよ。」

麻上君はもう自棄気味だ。授業中とか休み時間とかそれとなく三上さんの方を見つめてるやつが何言ってるんだか。

「文化祭、失敗したら麻上君のせいだからね。」

「わあったわあった。」

聞く耳持たず。それでいて無視して去ったりしないのは、誠意なんだろうか。それともただ単に気が弱いのか。

「あのさ、」

「何だよ。」

三上さんが急にしおらしくなった。躊躇っているような。今までずけずけ言いたい放題だった人が。

「私と、恋人役やるのは嫌？」

瞳に溜まった涙は、偽りだか本物だかあたしにはわからない。三上さんが麻上君を好きだってことを考えればここで泣くのだって理解できる。というか今までよく我慢したと思う。だけど、公的な立場で相対しているとしたら、この涙だってただの演技かもしれない。急に語勢が弱ったり、怒りを灯さない真摯な瞳でも、さっきまでの激情は洗い流されたりはしないのだろう。公私混同しない性格だ、偽りの涙ってことの方が、可能性は高い気がした。

「別に。そんなんじゃないって。」

麻上君もそんな三上さんにうろたえたのかびっくりしたのか、さっきまでの冷たさはもう消えていた。

「じゃあ、私と恋人役をやるのを見られるのが嫌？」

だけどあたしには、三上さんの言葉と態度が、恋に破れそうな乙女の必死の叫び声に聞こえた。

「そうだな。大勢の人間の前でやりたくはないわな。」

もう、麻上君も正直だ。女の涙はすごい。卑怯だ。自分の好きな女子が泣きそうだったら尚更なんだろう、男の子としては。

「私と一緒に、嫌？」

「やじゃ、ねーよ。」

だからこそ、本気で訊けば正直に答えてくれるからこそ、三上さんは麻上君を好きになったのだろう。

「ねえ、麻上君。」

「何だよ。」

三上さんは泣きそうになりながら、笑った。

「私、あなたのこと好きよ。」

ほら、だからあの涙も笑顔も、本物だったんだ。

*

その後三上さんと麻上君は小一時間も話していたらしい。伝聞調なのは、あたしがこの二人はもう大丈夫だと思って最後まで見届けなくて去ったからだ。穂波さんたちはびくびくしながら聞き耳をたてていたらしい。

それにしても、三上さんには驚いた。あんなところで、あんなタイミングで、邪魔者だって多かったのに、告白してしまうなんて。勇気があるんだか考えなしなんだか。もうきっと、隠しておけないくらい昂ぶっていたんだろう。麻上君は麻上君で、散々うろたえた挙句に俺も、その、好き、だ、とか何とか言っただけ。丸くおさまって良かったと言えば良かったんだけど、何か得した気分じゃない。まああんなの見れたのは確かにオトクだったんだけど。

あたしには、あいにく三上さんの気持ちがよくわからなかった。推測して分析して恋する乙女ってやつの気持ちを理解しようとしたけれど、でもあんな風に綺麗に笑って気持ちを言えるなんてことが。

少女漫画を読んでいても、そうだった。いつもカッコいい男の子がいて、主人公の女の子はその男に惚れたり惚れられたりする。まあ、そこまではいくらあたしだってわかる。きっとそんなこともあるんだろうという程度には。たまには男の子の方が一方的に主人公の女の子を好きで、告白したり襲ったりやたら強気に攻めまくるタイプの話もあるけれど、最後には結局女の子の方もその男の子を好きになるんだ。それで、振り向いてもらえるようにとか、好きでい続けてもらえるようにとかって頑張って頑張る。恋愛ってそういうものなんだろうか。あたしだって年頃の女の子なんだし、まあ大量の少女漫画も読んでるから、付き合ったりキスしたりその先まで、ってのに興味はあるけれど、どこことなくそんなもの全部嘘くさくて、やっぱりただのマンガ、という感じにしか感じられない。漫画だからいいのよとかいう友人もいるけれど、移り気なままに次から次へと好きな人が変わってたりする。つまりところ良くわかんないのだ、恋愛が。好きだって気持ちなら分かる。あたしだって抱いたことある。だけどだからって一緒にいたいとか、体を触れ合わせたりするのは理解できない。恋に対しても恋心を抱けない。あたしはなんかおかしいのだろうか。

だから三上さんと麻上君が不器用ながらに寄り添っていく過程が、あたしには耐えられなかったのだから。もう大丈夫だと思ったなんてごまかしで、本当は見えていられなかっただけだ。

でも、どうしてなんだろう。ジュリエットを読んでいる時もそうだった。分かるような気はした。どこまでが恋で、どこからが愛なのかって。泣きそうにはなった。なんで死んじゃうの、でもその選択こそが、って。逃げだした。あんな風に純粹に、それまで言い争っていたのが嘘みたいに想いを告げた三上さんから。愛に生きるなんてこと、あたしには絶対にできない。まして死ぬなんて尚更って思うのに。どうしてなんだろう。そう思う心の別の場所に、羨望が湧いてくるのは。

*

教室に戻ると、小林玲人が今まさに帰ろうとしているところだった。奴はあたしに一瞥をくれるなり、ふ、と鼻で笑った。

「返してきたけど、本。」

答えもしない。まったくホントにイラつく男だ。

「ねえ、あのさ。」

無反応。だけど昨日とは違って、少なくとも視線はあたしを捉えている。鞆に教科書を入れようとしたまま、あたしの二の句を待っているのだろう。

ねえあのさ、なんて声をかけたものの、何を言おうかあたしは悩んでいた。あんた態度悪いよ、っていってもいいんだけど、それはそれで面倒で、コンマ一秒悩んだ挙句出てきたのはホントにどうでもいいことだった。

「真美ちゃんとはよく話すの。」

小林玲人は顔にはてなを浮かべた。ようにあたしには見えた。まったくこいつは、いつも話しているであろう女の子の名前も知らないのだ。

「綾音ちゃんよ。綾音真美。」

ああ、あの子、といった表情だ。で、という声が聞こえてきそうである。というか言えよ。しゃべれよまったく。あたしとは話すつもりないってか。

「話しするの？」

小林玲人はもう一度、ふ、と鼻で笑った。ヤロウ。それからやたらきざっぽい動作で顔を上げた。

「話すよ。多少ね。」

「ふーん。あたしとは必要性があっても話さないってのに？」

今度はにやっと不敵に笑んだ。何なんだ、こいつ。

「必要性があったとは思えないね。綾音さんのことは。」

ほんっとイラっとくるわ、こいつ。わざわざ笑うな。いつも無表情な奴が。

「それに、」

小林玲人は鞆を閉めて、左手で肩に担いで扉に手をかけた。

「君には関係ないだろう、そんなこと。」

そのまま細長いのは出て行ってしまった。どうしろっての、まったく。

*

靴箱へ行くと、穂波さんたちがちょうど帰るところだった。彼女たち四人はいつも一緒に行動している。最も、大抵はそこに三上さんが加わるんだけど。

「あ、佐藤さん。」

穂波さんがあたしに気付いた。他の三人とはあまり話したりしないけど、穂波さんは別だ。よくマンガを貸したり借りたりする。一緒に遊びにいったこともある。そのくらいには仲の良い友

人だ。

「ああ、穂波さん。」

穂波さんは靴を履いたところで、他の三人はもう外に出ている。

「あれ、三上さんは？」

気になったので訊いてみた。

「彼氏と一緒に先に帰った。」

「あ、そう。」

あたしがあの男と話している間に仲良く二人で下校ですか。

「佐藤さん、何かありがとね。」

「へ？」

感謝されてしまった。あたしなんかしたっけか。

「おかげでいらめっこが終わったよ。」

ああ、確かに。そういえば不用心に横槍突き刺したんだった。

「まさかあんな風になるとはおもわなかったけどね。」

「そうね。」

穂波さんは外の三人に言って先に帰らせた。一緒に駅まで帰るつもりらしい。

「でも、遅いくらいなのよ、本当は。」

「へえ。」

「三上さんの性格考えればね。」

確かに。怖気づくことなく言いそうではある。

「そういえば、いつから好きだったの、三上さんは。」

「去年の五月あたりかな。」

それは確かに長いかもしれない。あの自信に満ち溢れている三上さんにしては。まあ、恋愛事は別なのだろう。あんな性格だって女の子なんだから、言おうと決めたりそれでも言えなかったり、っていう聞いているだけで赤面するような乙女っぷりが実は隠されているのかもしれない。

「私もね、」

穂波さんが、少し声の調子を変えた。意識はしていないかもしれない。でも、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ、寂しさと恨めしさと、そんなマイナスの感情がにじんでしまうような。

「一時期、彼のことが好きだったわ。」

初耳だ。それは確かに、そんなこともあるのかもしれないけれど。

「いいの？」

三上さんと、付き合うことになっちゃって。

「うん。いいんだ、もう。」

今度はさっきのほんの少しだけ、嬉しさが入ったような濡れ方だった。そう、泣いた後の声みたいに。

「三上さんにね、」

それきり言葉に詰まるように、穂波さんは口を嚙む。ああ、もしかしたらそれは、詰まるようにではなく、詰めるようになるのかもしれないのだ。

校門を出た大通りの信号が変わる頃、穂波さんは口を開いた。

「告白しなよってすすめたの、私なの。」

あたしは黙って聞いていることにした。たぶんそうすることが、今の穂波さんに必要なことなんだろうと思ったから。

「分かるのよ、見ていれば。」

一步一步の歩みは遅い。あたしはそれに付きあってゆっくりと隣をついていく。決してぬかさぬように。そして、決して顔を覗き見ないように。

「彼が三上さんを好きだって気付いたのは、多分私が一番早かったと思うわ。見ていたからね。見つめてた。ずっと。授業中だって、休み時間だって。廊下ですれ違って、彼と三上さんが話していた時だって。」

「だからね、すぐ分かっちゃった。」

手押し式の信号で立ち止まったところで、穂波さんは悲しそうに呟いた。

「彼が、私じゃなくて、三上さんを見ているんだってことに。」

「多分、彼自身が気づく前からね。」

信号が青に変わった。穂波さんは確認もせずに歩き出す。

「まあ、二人ともだんだんわかりやすくなっていったんだけど。」

ああ、確かに。今年に入ってから彼女たちは、何で付き合っていないんだろう、何でお互い気付かないんだろうって周りなら思える程度に相思相愛だった。

「だからさ、」

「うん。」

「だから、」

ぐす、と鼻を嚙りながら穂波さんは笑顔を浮かべてこっちを向いた。

「いいの。彼がそれで、幸せなら。」

その気持ちは、どうやってらでてるんだろうか。自分の幸せじゃなくって、相手の幸せだけを考えられるなんて。

でもそれは、愛情っていうんだろうか。それは愛なんだろうか。恋とはどう違うんだろうか。下心だとか真心だとかの話じゃない。だれかを想うことには変わらないのに、やっぱり恋と愛には違いがあるんだろうか。あたしは、多分違うと思う。ただの勘だけど。恋をしたことなんてないようなものだけど。

だから多分、あたしはジュリエットの最後に納得がいけないんだ。ロミオだって。馬鹿だ。相手の幸せだけを願うなら、自分は身を引けばいいのに。死んだふりなんて危険なことはしないで。

でも、それなら何で、あたしはあの話を読んで泣きそうになったんだろう。

穂波さんはそれきり黙っている。もう話すことなんてないかのように。あとは一人できつと、枕を浮かべるのだろう。月の海を涙で満たしながら。

「もっと、似あう人がいるよ、きっと。」

「うん。ありがと、佐藤さん。」

とりあえず、慰めの言葉だけは掛けておいた。

*

駅に着くと、あたしたちはそれぞれ反対のホームへ降りた。穂波さんとは方向が逆だ。彼女は人ごみに紛れて、悲しみとか思いまで紛らわせていくのだろう。そうやってすりきらせた恋心が、いつか再び来る彗星の光になるのだ。

沈んでいた彼女の顔が、ホームに滑り込む電車の向こうでほんの少しだけ晴れたように笑った後、すぐに照れ笑いになった。もう彼女は大丈夫だ。もっとも、初めからあんまり心配はしていないけど。

きっと強くなるんだろう。麦でもなんでもいいけれど、失恋は、踏まれた心は、きっと。次はもう大丈夫。

だからあたしは、たぶん一番弱いのだ。大した恋の経験もない。だから失ったこともない。壊れたことを知らないのは、綺麗にもならないってことだ。宝石は削ってこそ光を返す。採掘されない原石は、あるかどうかもわからない真っ黒なだけの石ころだ。痛みを知らないままでいて、傷もつかないままでいて、ないかもしれないあたしの愛は、それでも誰かを想えるのか。

そんなこと考えてもしょうがないか。あたしはあたしでいつかきっと王子様でも見つけるのだろう。夢見ているわけじゃないけど、そう思えるならそれでいい。思えるかどうか疑問だけど。

電車を待っていると、階段を下りてきたのは件のカップルだった。もちろん三上さんと麻上君のことだ。仲良く手なんかつかないでいて、でもまだくっつくのは恥ずかしい、みたいな。

「あ、佐藤さん。」

先に声をかけられてしまった。なんだ、せっかくからかおうと思ったのに。

「良かったね、三上さん。」

「ありがと。」

あ、照れた。あたしに見られたからって別に手を離す必要ないのに。

「これでキスシーン入れられるね。」

「もう。やらないわよ。」

「クラスの劇がファーストキス、か。」

「おまえ、ぜってえやんねえぞ、俺は。」

流石に黙っていられなくなったのか麻上君も会話に入ってきた。初めてだ、麻上君と口きくのは。

「あ、それならいいかも。」

「何で乗り気なんだよ。」

「だって、散々酷いこと言われたし。」

「ぐ、それはお前、お、お前だって言い返したじゃんか。」

「なかなか好きって言ってくれなし。」

ほんと三上さんは女王様体質だなあ。相手が嫌がると分かったとたんいじめにかかったよ。

「じゃあ、その方向でセリフ立てるから。」

「うん、お願いね。」

「お、おい、佐藤！ 三上も、何か言えよ！」

「楽しみにしてるわ。」

「おいっ！」

かわいそうな麻上君。でも幸せなんだろう、そんなやりとりが、きっと。あーあたしお邪魔虫だ。

「じゃあ、お邪魔虫は消えるね、また明日。三上さん、麻上君。」

「じゃあね、佐藤さん。」

麻上君も手だけはあげる。じゃ、みたいな感じで。

「お幸せに。」

あたしは最後に一言だけ贈ってちょうどきた電車の一つむこうの車両に乗った。

*

幸せなカップルを後ろにあたしは電車に揺られる。あの二人はもう恥ずかしさも薄れたようで、まあ麻上君の方はそっけなくしていたけれど、隣に座って話していた。まあ仲の宜しいことで。

周りを見回してみるとけっこう制服を着たカップルがいる。やたら騒いでいるのとか、互いに寄り添って眠っているのとか、カップルには見えるのに妙に間隔が開いていたりとか。その中でも三上さんと麻上君の二人は微笑ましかった。まさかこんなバカップルになるとはね。あの女王様の三上さんが大人しく並んで、他の誰にもしたことがないような笑顔を向けているのだ。麻上君は麻上君でしじゅう三上さんの顔を見ていないふりをして気にしている。まったく、何やってんだか。あたし。結局ずっと見てるじゃないか。わざわざ違う車両に乗ったって言うのに。

二駅行けばあたしは降りる。三上さんたちはどこまでいくんだろう。そういえば同じ電車に居合わせたのは初めてだ。三上さんも麻上君も本当は部活があるはずなのだ。二人とも無断欠席だろうか。

電車が減速していく。ぼうっと入っていく電車を見つめているホーム上の人と目が合ったような気がしたけど、多分そんなことはない。開いたドアからあたしは体を汗ばむ空気の中へ降ろす。閉まるドアを後目に、いややっぱり後ろを振り返った。

三上さんと麻上君はこちらに気付かない。お互い以外は気にかからないのだろう。二人の世界。それで完全な世界。満ち足りた、いるだけで幸せな空間を二人は作れるのだ。

それはもう恋じゃない気がした。恋はもっと違うもののような気がした。あのまま老夫婦になって縁側でお茶でも飲めそうな雰囲気は、愛と呼んでもいいのだろうか。若い二人には失礼だ

けど。

あーあ、いいなあ、やっぱり。どうしたってあたしは女の子なんだろう。というか人間なんだ、恋や愛に憧れてあたり前。百年の恋じゃなくていいから、ときめきなり切なさなり誰か感じさせてくれないかなあ。

とりあえず、ロミオとジュリエットには切なくなったけど。

死ねと言ったのは君。(2)

*

次の日。クラスではもう三上さんと麻上君は公認のカップルだ。夏休みなんかにはどこかに二人で出掛けるのだろう。周りは冷やかしているけれど、それだってきっと二人にとっては幸せなんだろう。ゴチソウサマ。

「佐藤さん？」

三上さんが話しかけてきた。

「脚本は順調？」

あ。

「何も、してない。」

「あらら。」

考えてもいなかった。昨日はあれから少女漫画乱読して眠っちゃったもんだから。

「一応、夏休み明けの日曜日が文化祭なんだけど。」

「夏休み四十日ある、し。」

「いつ脚本読んで練習すれば？」

うう、困った。たしかに早くしないといろんな人に迷惑だ。そもそもあたしになった時点であたしに迷惑だけど。

「話しする、わよ。」

「頼んだわ。」

くそう、あっちの男に言ってくれよ。

「小林君には洋介から言ってもらってるから。」

あ、ほんとだ。全く口きいたこともなさそうな麻上君と小林玲人が話してる。

あれ、洋介？

「な、なによ。」

見つめる視線に耐えられなくなったのか三上さんがうろたえる。

「ようすけ、ね。名前で呼ぶようになったんだ。」

「悪い？」

「いや、全然。」

それでも視線を集中させていると、

「だって、名前で呼んだ方が、付き合ってる感じがするでしょう。」

別に恥ずかしがらなくてもいいのに。

「ゴチソウサマ。」

「う、うるさいわね。形からよ、形。大事なことでしょ。」

ホントもうあわあわしてるとかわいらしいなあ。

「オナカイッパイデス。」

「もう。とにかく、脚本は頼んだからね。夏休みまであと一週間しかないんだから。」

「ガンバリマス。」

「その妙に片言な喋り方やめなさい。」

「ワカリマシタ。」

ああもう、楽しいったら。

*

放課後。あたしは仕方なしに小林玲人に声をかけた。

「あのさ、小林君。」

「何。」

ちょっとびっくりした。こんなすぐに反応が返ってくるなんて思っていなかったから。

「あー、用がないならもういいかな。」

いやいやあんた、今日麻上君（洋介君！）に言われてたのに何だその対応は。

「文化祭の脚本のことだけど。」

「ああ、そうだと思ってたよ。」

あ、やばいムカツク。

「とりあえず、どの場面やるかぐらい決めましょ。」

「まあ、いいよ。」

いちいちいらっとさせる男だ。

「とりあえず、最初はどうしよう。パーティか。」

「そんな人数いないけどね。」

我慢だ、あたし。頑張れ。耐えろ。

「んじゃどーすんのよ。」

小林玲人は顎に手を当てんと唸った。

「庭とかの設定でいいんじゃないの、そんなの。」

「庭？」

何を言ってるんだろう。ていうか何が言いたいんだろう。

「だから、パーティが詰まなくて逃げ出したんだよ、庭に。」

ああ、なるほど。

「そこでロミオがジュリエットに会うわけね。」

うん。それでいいんじゃないの。小林玲人はやる気のない返事をした。まあいい。期待はしていない。いや、していなかったと言うべきか。

実のところあたしは驚いていたのだ。まさかこの男からこんなに意見が出てくるなんて思っていなかったから。とりあえず話はするけど、結局あたしがやんなきゃならないんだろうなと思っていた。面倒くさいけどこの男と話しても本当は無駄だろうって。

「んで、どうしよう。」

「家に帰って、お互い相手を好きになったと観客に。」

「ああ、独白が始まるわけね。お互い。『なんて素敵な人だったんだろう……』と。」

作業はなかなか順調だった。小林君は私が訊いたことを演劇のステージで実現可能なレベルで、しかも要領を抑えてプロットを組む。細かいセリフはあたしが考えて、おかしいと感じたら小林君が直す。心外存外脚本はすぐに仕上がってしまった。せいぜい一時間ほどで、まだ完全下校時間にもなっていない。

「ふう、これで、一応完成ね。」

言葉は何も返ってこない。それでもあたしは全然頭にこなかった。

「ありがと、小林君。」

そんな言葉が素直に出てきた。

「いや、別に。」

小林玲人はほんの少し照れたように笑った。

「あ。」

「え？」

びっくりした。憎たらしい笑みなら見たことあったけど、それはすっごくイライラしたけど、素直に笑うとかわいいんだ。男の子にかわいいなんていう形容詞を使うのははばかりされたけど、何というかしっくりきてしまったのだ。うん、なんかかわいい。

「ん、別に何も。」

いやあ何というかレアだなあ。この厭味ったらしい皮肉屋が、あんな笑顔をできるなんて。

「佐藤さんさ、」

その厭味ったらしい皮肉屋が、ちょっとためらうようにしながら言った。

「結構、笑うね。」

へ。

「もっとキツイ奴かと思ってた。」

ふあ。

「誤解してた。ごめんね。」

え。どゆ、こと。

「え、その、小林、君？」

あたしにどう反応しろっていうんだ。

「何。」

「いや、その、」

うわどうしよう。なんて言えばいいんだろう。こういう時ってなんて返すべきなんだろう。

「はっ。」

混乱する頭を抱えたあたしの向こうで、小林玲人は楽しそうに笑みをこぼした。

「やっぱり、変には変わらないけどね。」

だからなんで、そんなにくっきりとした笑い方をするんだろう。

*

それからあたしと小林君は駅まで一緒に歩いて行った。どういう風の吹きまわしだか、自然とこうなってしまったのだ。そりゃそうだ、当然とも言える。何せお互い他にやるべきことはない。共同作業が終わったら、駅まで至る道は同じなのだから、もちろん一緒に行く格好になってしまうは必然、なんだけど。

なんというか、妙、なのだ。小林玲人はもっとう、人付き合いをしない、さっさと早足で歩いて言葉も掛けない、そんなイメージだったのだ。それが今となっては普通に会話も続くし、むしろ他の男子にはないユーモアがあって、嫌みなくユニークな、つまりは特殊な人間なんじゃないかとさえ思えてきたのだ。

それはまあ、彼がこんな話をしたことにもよる。なんで演劇でしかもロミオとジュリエットなんだろうね、という話の流れで彼が、俺はどっちにも票入れなかったけどね、と嫌味たっぷりと言ったのだ。もう分り切っていたことだけど。

「どっちも嫌だったから、それも意思表示になると思って。」

らしい。だからといって普通は妥協してどちらかに入れるんじゃないだろうか。

「そうすれば何にもやらなくてすむと思ったのに、三上さんにしてやられたね。」

まあ、そのへんはあたしも似たようなものだ。

「いいけどね、別に。」

今となっては、あたしももう嫌ではない。どころかむしろ、三年間同じクラスでもこんな風に話をするなんて思ってもみなかったから良かったのかもしれない。

あとは、ジュリエットの話もした。なんでジュリエットはあんな方法とったんだろうねとあたしが訊いたのだ。

あたしにはまだ分からなかった。どうして二人はあんな風になってしまったんだろう。家同士の仲が悪かったから？ それとも、二人が盲目的な恋で考えなしだったからなのだろうか。

小林玲人は言葉を選ぶようにうーんと思案を巡らせて、

「愛していたから、だろ。」

なんてことを大真面目な顔で言った。

「いや、まあそうなんだろうけど。」

そうだということは分かっているんだけどね。

「今よりもっと家とかのしがらみが強かったからね。」

知らないの、みたいな風に言われても、それじゃあ説明になってない。などと思っていたら、

「俺はあの物語なら、あの結末以外にありえないと思うけど。」

小林玲人が自分がまるでロミオとジュリエットを書いた張本人であるかのように言いきった。いやまあ確かに、脚本にしたという点では作者と言えないこともないけれど。

「でも別に、死ぬ必要はないじゃない。」

肝心要はそこなのだ。そこんとこどうですか。

「恋を愛に変えるためには、死ななければならぬんだよ。」

そして、そんな意味不明なことを言い出した。何がしたいのか全くわからない。

「死？」

「もちろんメタファーとしてね。」

揺るがない確信の形として表れた言葉は、まるでたった一つの恋を愛にできなかったことを悔やむような口ぶりで、それでも純粹に一途な想いを抱き続けた結論のように訴える力を持っていた。

「メタファーとして？」

「そう。ある意味での死を受け入れる必要があるんだ。」

夕焼けのまだ来ない夏の空を見上げて、小林玲人がわずかに悲しそうな顔をした。

「よく言うだろ、結婚したら自由な時間がなくなって窮屈だって。」

うん、まあ本末転倒な気もするけれど。

「だからさ、それも一種の死なんだよ。個人としての自由の死。」

あ、なんだか言いたいことが少しわかってきた気がする。

「つまり、そういうのを受け入れろってこと？」

なのだろうか。言いまわしの割りに普通な結論だ。

「まあ、結局はそういうことでもあるね。受け入れろではなく、それすら望めないなら愛ではない、という感じだけだ。」

「死すらも厭わないのが愛？」

「そう。メタファーとしても、真実命を失うとしても。」

それなら確かに、愛していたからこそジュリエットが死んだと勘違いしたときにロミオは死んだのだろう。二人が一緒になって愛として新しい生活をするためには、死という表象が必要だったのだ。もちろんメタファーとしての死で十分だけど、あの作品ではそれが現実の死として表れてしまったのだ。両家の因縁や友人との仲などのしがらみの中で。

「そっか。そういう考え方もできるね。」

ひねくれた考え方ではあるけれど、そういう意味で死と呼ぶならば確かにそういう面はあるかもしれない。

それならこの人は、そういう愛をするのだろうか。そういう形の愛情を見出すのだろうか。それは叶う恋だろうか。あたしがいつかきっと誰かに恋をして結婚したときに、そういう愛は見つかるだろうか。小林玲人はそういう意味で、叶いそうもない高嶺の花に恋をしていると言えなくもない。

そのほかにもいろいろ話したけれど、あっと言う間に駅に着いてしまったあたしたちは、それぞれホームの反対側で手を振るという昨日までだったら考えられもしなかったことをしでかして別れた。

ケータイが震えた。差出人は小林玲人。件名は「脚本の件」。本文には俺が脚本をデータに直すよという申し出と、今日は話してみても意外と楽しかったという一種の告白めいた文章が添えてあった。

なんだろう。なんでだろう。なんでなんだろう。なんであたしの心は、今少しだけ嬉しいと、感じたのだろうか。

*

次の日。学校へ行くと小林玲人はすでに登校してきていた。

「おはよう、佐藤さん。」

あいさつされた。

「おはよう、小林君。」

クラス中の視線を感じる。ああ、見たくなる気持ちはよく分かる。あの小林玲人が、自分から女の子にあいさつするなんてこと、想像したこともなかったのだろう。あたしもだ。だからまあ、あたしの視線も小林玲人へ向けられていたわけで、集中点は小林玲人だったわけだけど。

「印刷、してきたよ。」

話し方も誰だこいつと言いたいくらいに変わっている。

「あ、もうデータにし終わったんだ。」

「まあね。」

前言撤回。やっぱり、性格は変わってない。いやいやもちろんそうなんだけど。

「はい、これ。」

差し出された閉じ込みの紙束を、何にも考えずに受け取って、あたしは三上さんが言った事を思い出した。みんなでやりたいのよ。そんな女王様の我儘。もう充分に参加しているとは思うけど、ここは一応三上さんの思惑に乗ってあげることにした。

「それじゃ、今配っちゃおう。」

は、いや別に俺は、などと前に出るのを拒もうとする小林玲人をあたしは無理やり引っ張って壇上に立たせた。

「ほら、脚本終わったって言わなくちゃ。」

え、あ、ああ。なんてうろたえちゃってまあ。

「えーと、文化祭でやるロミオとジュリエットの脚本が上がったので役の人は一部ずつ取って行って下さい。何かあれば俺か佐藤さんまで。んじゃ。」

小林玲人は紙束をばさっと教卓に置くと、何が恥ずかしかったのかそそくさと席に帰って行った。あたしもそれについて行って自分の席まで行く。へーもう脚本できたんだとかありがと二人ともとかいうねぎらいの言葉を受けて小林玲人は柄にもなく少し嬉しそうに見えた。もっとも、返答はぶっきらぼうだったけれど。返事があるだけでした。あたしなんて初日は全部無視されたんだから。

「やるじゃない、佐藤さん。」

三上さんが興奮で手に持った脚本を震わせながら声をかけてきた。テンションハイだ。

「昨日の今日でいきなり出てくるとは思わなかったわ。」

失礼な。任せたのは一体どこの誰だ。

「結構いい感じに仕上がってるみたいね。うん、これなら大道具とかにも困らなさそうだわ。」
三上さんはなんだかやたらと感心している。

「小林君も随分協力してくれたみたいだし。」

確かに。あたし一人だったら、絶対にここまでの脚本は出来上がらなかつたろう。

小林玲人の席では麻上君が、おい何でこんなシーン入れやがった小林っ、などと本気半分で話
をしている。

「それに、あんな小林君も見たことなかったわ。」

うん、まあ。実際びっくりだ、あたしも。

「どうやったのよ、いったい。」

三上さんは心底不思議そうだ。いやあなた、そこまで驚くなら最初からあいつと一緒に脚本書か
せようなんて思うなよ。

「あ、私もそれ訊きたいです。」

真美ちゃんがくるっと後ろを振り返って聞いてきた。あなたもさ、いったい誰だ、悪い人じゃあ
りません、なんて言ったのは。

「だからさ、悪い人じゃなかったんだって。」

笑みの零れてくるあたしを見て、二人とも不思議そうにしていたけれど、あたしにはそれで十分
な理由だった。

だってさっきあいさつされた時に、あたしの心はどうしてか弾んでしまったのだ。

*

家に帰ると、メールが来た。差出人は三上さん。件名は「脚本読んだ」。本文には、小林君を
行事に参加させてくれてありがとう、迷惑かけました、よく読んで練習して絶対いい演技をして
みせるわとあった。演技じゃなくていってば。返信。

どうしよう。あたしもメールするべきだろうか。

もちろん三上さんにじゃない。小林玲人にだ。データにしてくれたことに対する感謝とかを。
どうしよう。ああもう、どうしてあたしはこんなことで悩んでいるんだ。いい、出しといて悪い
ことはない。だったら送っておけばいいだけの話だ。

あたしはとりあえずの感謝の言葉を電波に乗せた。なんでこんなに緊張しなきゃならんのだ。

おかしい。どうしたんだろう、あたしは。なんで小林玲人なんかに、こんな気持ちになんかき
ゃならないんだ。確かに、話してみたら面白かったけど。これじゃまるであたしがあの男を好きみ
たいじゃないか。

そんなことを考えていたらケータイが震えた。小林玲人だ。いいよ別に。件名はそんなぶっき
らぼうな文。そして本文には、あんな話をしたのは佐藤さんが初めてだ、と書いてあった。

あんな話。愛とは死を厭わないこと、だろうか。返信。

ほどなくして返事が返ってきた。そう。まさかそういう話をするとは思わなかった。あたしだ
ってそうだ。

ああ、どうしよう。あたし、どうしちゃったんだろう。

なんでこんなに、あいつのメールを待っている時間が長いんだろう。

*

急に母親が返ってきた。お酒臭い息でよれよれの母親は、あたしに水を持ってこいとか薬だせとか命令した挙句ソファで寝てしまった。何がしたいんだろう、この人は。五日間も家を開けて、帰ってくるなり娘に偉そうな顔して。

だいたい、パパがいなくなったのだからこの女のせいなのだ。遊んでばかりいる母親は、子供の相手なんてしたこともない。それでもパパからあたしの口座にお金が入ってくるからこの女の稼ぐ汚い金に全面的に寄りかからなくてすんでいるのだ。もう少し、なんとかならないのだろうか。愛してくれとは言わない。そんなこと望んでもいない。それでも最低限、何もしないことくらいするべきなんじゃないだろうか。

何でこんな女があたしの母親なんだろう。パパだって、せっかく建てた家を自分が出ていくんじゃないかってこの女を追いだせばいいのに。最後の最後になってまでそれができないくらいこの女を愛していたんだろうか。パパについていけばよかった。この慣れ親しんだ家から離れたくなかったあたしは、パパと家とでこっちを選んだのだ。あたしの馬鹿。パパだって、あたしを連れて行ってくれればよかったのに。愛してくれているから、そんなことをしなかったんだっていうのは、分かってはいるんだけど。

今はもうとっとと大人になって、早くこの家を出ていきたい。もう感傷も起こらない。

もちろんそのためには、就職するなりしなくちゃいけないんだけど。いつまでもパパに甘えているわけにもいかないしね。

*

夏休みが終わって、文化祭までもうあと一週間で切った。三上さんは神がかり的な演技で、見ていると本当に涙が出てきそうなほど切ない顔でセリフをなぞる。まるで本心本心に、自然にそういう言葉になってしまったかのように。マルチな才能だ。羨ましい限り。

麻上君の方はまだ照れもあったけど、三上さんを見つめる目だけは真剣そのもので、他の男子生徒に散々からかわれながらもめきめきと上達していった。最初は大根だったのに、これだから男の子は怖い。

他の面々も中々で、劇の方に問題はほとんどなかった。途中衣装が合わなかったり布が足りなくなったり大道具に使う材料が遠くの方のお店までいかなくちやなかったりしたけれど、本番一週間前にして余裕すら感じられるほどだった。もちろんそれは、三上さんと麻上君の、男女それぞれのトップの先導あってのことだけだ。

小林玲人はなんでこういうセリフになるのか馬鹿丁寧に説明して笑われたり感心されたりしていた。三上さんの策功を制すといったところだ。

そうして本番になった。三上さんは大胆にも麻上君と本当にキスしていた。角度的には微妙だったけれど、あのしたり顔は絶対にやったんだろう。ファーストキス。麻上君はあの冗談のおかげで今まで我慢させられてきたわけだ。かわいそうに。

劇は大成功だった。客入りも上々で、純情そうな女の子なんか泣きそうになっていた。他の演劇やるクラスが皆ギャグな中シリアス路線だったうちの作品の評判は良かった。おしくも文化祭の出し物の最優秀賞は逃したけれど（それはマ○オになって迷路をぬけて、ひたすらパイをなげるというよく分からないものだった。もったいない）、優良賞を受賞した。

打ち上げでは三上さんと麻上君が高いテンションにまかせてバカップルぶりを発揮した。あんたら、人前でキスとか恥ずかしくないのか。訊いてみたら、いいじゃない、所有宣言よ、とかぶっとんだ理由が返ってきた。いままでこういうのに一度も参加しなかった小林玲人も来ていた。というか隣の席だったけど。真美ちゃんとあたしと彼の三人でだいたい話していた。

どっか行かないか、今度。打ち上げが終わってしちゃつく三上さんたちと同じ車両に仲の良い友人と乗って帰っている途中に彼からメールがきた。どうしよう。行くって言った方がいいのかな。なんで誘ってきたんだろう。

そうしてなんで、あたしは着ていく服の心配なんかしているんだ。

*

ああ、どうしよう。

もう無理だ、あたしには。気付いてしまった、この心は。

ああ、どうしよう。

「スカートだとあざといかな。でもズボンだと、」

いつも影を追う視線に。無意識の感情に。気付いてしまった。求めていた。たぶん、恋。認めたくはないけれど。

「ああもう、なんでこんな変な服しかないのよ！」

不思議な力によって浮かび上がった冰山は、もはや一角とは呼べない。隠しきれなくなった月の影の前に雲はもう無意味だ。

「デート、か。」

そう。どんなつもりで言ってきたのかはわからない。でも男女が二人で出掛けるってことは、つまりそういうことなのだ。

「あたしのこと、どう思ってるのかな。」

柄にもなく乙女な気分になったあたしのケータイが震えた。慌てて手に取る。彼だろうか。何を言われるんだろう。

「うう、なんでメール一つに覚悟がいるのよ。」

よし、見るぞあたし。

開いてみると、期待どおり彼からだった。小林玲人。ほんの二か月前までは、メールアドレスなんて知らなかった人。三年間同じクラスだったけど、彼のことは全然知らなかった。知ろうと

もしなかった。根暗で冷淡だと決めつけていた。実際、そういう風に見せている節もあったけど。

「明日、駅前の時計塔で待ってる、か。」

ちょっと待て。今あたし一瞬ときめいた。うわーもう駄目だあたし。認めざるを得ない。

だからもう、ほんとにもう、あたしは覚悟したんだ。言うことに決めた。一つだけ、反論があるわ、と。

そう、恋を实らせようとする時にも、人は死ぬんだ。それすら厭わなくらいの覚悟が、必要なんだ。

この気持ちを、伝えるためには。

*

ただ映画を観る、それだけ。隣に座る、それだけ。なのにまったくあたしの心臓は必至で寿命を短くしてやろうと誰かが意図しているんじゃないかっていうくらいに早鐘を打っていた。あんただよ、小林玲人。何食わぬ顔で緊張もしていないような風であたしの心臓どうしてくれるんだ。責任とれ。

ああ、どうしてなんだろうな。どうしてたいして格好良いわけでも優しいわけでも面白いわけでも頭がいいわけでもお金もってるわけでもないのに、こんなことになるんだろう。あたしは馬鹿だ。馬鹿に違いない。三上さんのことなんて言えやしない。そんでどうして見る映画ラブロマンスなんですか。

彼は映画に見入っている。あたしは映画なんて見ちゃいない。触れそうで触れさせなかったあたしの手は、すぐに後悔したけれど大人しく自分の膝に落ち着いた。

ねえ、小林君。何を考えているの。どうしてあたしなの。言ってくれなくちゃ、わかんない。付き合っているわけでもないのに、好きあっているかどうか分からないのに、なんであたしを誘ったのよ。

視線を感じたのか小林玲人がこっちを見る。目線がぼっちりあってしまった。目と目をつなぐ線分に、邪魔者は空気くらいしかいない。それくらい今は近いのだ。

「何？」

「ううん、別に。」

あたし変わったなあ。誰だよこの乙女。

仕方がないのでスクリーンに目を映す。外国映画の濃いラブシーン。変に勘くぐりそうになる意識を無理やり抑えた。こんな場面であたしの方を見るってどういう意味？ 抑えきれなかった。あたし何やってんだろう。

映画が終わると、小林玲人はさっさと歩きだす。スタッフロールは見ない主義なのか。あたしは後をついていく。いつもより彼の歩調が緩やかな気がするのはあたしの頭が湯だっているからだろうか。それとも、本当に。

喫茶店に入ると、彼はコーヒー、あたしは紅茶を頼んだ。

「コーヒー好きなの？」

そんな些細なことが気になる。

「紅茶好き？」

訊き返された。質問したのあたしなのに。

「え、まあ。コーヒーも嫌いじゃないけど。」

「そんな感じ。」

らしい。つまり気分ってことなんだろうか。

「どうだった、映画。」

困った。見てないのに感想も何もあるか。

「え、あー、お、面白かったよね。」

「悲恋モノだったけどね。」

知りません。あたしはそんなの聞いてもいません知りません。

「まったく、恋やら愛やら分からないと言うから勧めたのに。」

え。

「一応有名な作品だよ。小劇場で再演するくらいには。」

あたしの中で何か大事なものが音もたてずに崩れた。分かってる。期待したのはあたし。妄想を膨らませたのはあたし。それで舞い上がって、ああ、あたしはなんてバカなんだろう。

「どうした？」

沈んだあたしの空気に気付いたのか、無神経な男が声を掛けてくる。気付かないでほしかったのに。だから崩れ落ちる音だっしてしていないことにして、あたしは必至で耐えたのに。

「調子でも悪くなった？」

そんなことない。笑ってごまかそうと思った。無理やり笑おうとした眼尻に涙が浮かんだからせき込んだふりをした。駄目だ、なんか止まらない。

「佐藤さん？」

これ以上ここにいたら、一緒にいたら、辛すぎて切なすぎて、あたしはどうかかしてしまうんじゃないだろうか。壊れたからくり人形みたいにぎくしゃくした動きで最後には奈落に落ちるのだ。その深さまでたどり着いたときにはもう、ばらばらになっているに違いない。

「ごめん、トイレ。」

やっとのことでそう絞り出して、あたしはトイレに駆け込んだ。嘘というほどの嘘でもない。実際トイレにいるんだから。

充血した目で鏡を見る。映ったぼろぼろの顔を見てたら自然と乾いた笑いが出てきた。いやむしろ、それは濡れて溺れているのだ。

ああ、どうしよう。涙が止まらない。ぼろぼろ流れてくるわけじゃないけれど、潤んだまま今にも落ちてしまいそうだ。早く戻らなきゃいけないのに。戻って馬鹿みたいな話をして、また明日ねって別れば、それですべて終わるのに。これ以上涙が出てきたら、袖が透けてしまう。和歌じゃないんだから。

五分くらいしてやっとなんか落ち着いた。ショックだったんだ、あたし。そんなに期待していた

んだ。期待なんて、しなきゃよかったのに。

「大丈夫？」

席に戻ると、彼のコーヒーはすっかりなくなっていた。そりゃそうだ。何もすることなんてあるはずない。待っているだけの時間には、コーヒーくらいしか暇つぶしの手段はない。

「うん。」

まだ少しだけ滲んだ涙声で答えた。

「あのさ、佐藤さん。」

「何。」

もう帰りたい。それなのに、なんで一方でここにいたいと思うんだろう。馬鹿。

「今日、迷惑だった？」

なのに、そんなことを訊かれた。

「何で？」

「何か、映画も見てなかったみたいだし、泣いて、るし。」

世の中のどこを探せばデートが迷惑で泣く女がいるのよ。

「つまんなかったの、かな、と。」

「そんなことない。」

さっきまではホントに楽しかったんだ。

「それならいいんだけどね。」

沈黙。ああ、こんな風にいたいんじゃないんだ。

「ねえ、小林君。」

「何。」

だからあたしは、もう覚悟だけは決まってしまった心を隠しきることができなくなってしまった。

「あたしは、今好きな人いるんだ。」

そんな遠まわし過ぎる言い方しかできなかったけど。

「え。あ、そう、なんだ。」

小林玲人は驚いたというよりも、落胆したように見えた。

「それじゃあ、きょうのは、やっぱり余計だったかな。」

「何で？」

遠まわし過ぎて伝わらないどころか、何か誤解を与えてしまったらしい。

「だって、君が好きな男に悪いだろう。俺が君と一緒にいちゃ。」

違う、違うよ。察してよ。考えてよ。それで泣くわけないでしょう。それなら最初から映画の誘いに乗るわけないじゃない。

「違う。」

「え。」

視線が合った。心まで繋がるだろうか。受け取ってもらえるだろうか。

ああ、死ぬんだ。あたしは今、あたしを殺して。

「あたしが好きなのは、」
まぎれもなく、他の誰でもなく、
「好きになったのは、」
小林玲人、

「君、よ。」

言ってしまった。言ってしまえた。固まる空気と、止まらない鼓動。放さない視線と、離れない願望。

永遠とも思えるなんて使い果たされた表現を体感するころ、やっとのことで彼は唇を開いて、
「俺は、」
どちらかを、殺すのだ。あたしか、彼自身か。その次の、言葉によって。

「君が好きだ。」
死んだばかりのあたしの眼から、さっきとは全く意味の違う涙が出てきた。どうしよう、今度こそ止まらないかもしれない。腕を組んで俯くようにして頭をのせる。もう一人、自分を殺した男があたしの手にも手を重ねる。暖かい。また涙が出てきた。あたしは彼の温かさに包まれて、嬉し泣きで笑顔を濡らした。

*

半年後。受験をしないあたしと彼がクラスの雰囲気に取り残されているころ、母親が家に知らない男を連れてきた。愛人か。母親はあたしを見るなり恐ろしい形相と激しい語勢で言いたてた。なんであんたいつまでもこの家にいるの。ここはあたしの家よ。もう大人なんだから、自分で生きていけるでしょ。出ていきなさい、出てけ。酔いに酔った母親の醜態。怒鳴り散らす勝手な主張、男の気持ち悪いにんまりとした笑いとこの後の行為に耐えられなくなってあたしは逃げた。

「で、行くあてがないってことか。」

「そう。」

あたしは彼の家にいた。彼の両親も仕事でいない。

「あたし、これからどうしようかな。」

どこで生きていけばいいんだろう。いつまでも彼の家にいることだってできないのに。唯一の場所としてパパの所も考えたけど、仕事の調子が悪くなって四畳一間で暮らしてるパパにだって余裕があるはずもなかった。あたしの口座に入ってくるお金も明らかに減っていたし。

「死んじゃおうかな。」

もちろん本気でそんなこと考えていたわけじゃない。ただ彼に、慰めて欲しかっただけ。

「なるほど、その手があった。」

なのに、至極当然のように彼は乗っかってきた。

「え？」

「だからさ、死ぬんだよ。二人で。」

どういう、ことだろう。

「一人だと、きつとうまくいかない。ロミオとジュリエットみたいな結果になるのがオチだ。」

「だったらさ、二人で死ぬばいいんだよ。」

ああ、なるほど、そうか。そういうこと。

「いいの？ それで、玲人は後悔しない？」

「ああ。」

「それじゃあ、あたしと一緒に、死んでくれる？」

「うん。あ、でも用事あるから、時間を決めよう。」

そうして集合は午前五時、駅前の時計台になった。

*

午前五時ちょうど。駅前の時計台。

「どうしたの、用事はもう済んだんだ。」

真っ黒なジャンパーを着込んだ彼に、涙目で笑いながら抱きついた。どうしてこうあたしたちは正反対なんだろうか。ううん、でもきっとそこに惹かれたんだ。

「死にに来たよ。君がそう言ったんじゃないか。」

背中に腕をまわして受け止めながらニヒルに笑う彼に、もちろんあたしはこう答えた。

「違うわよ、玲人。」

「死ぬと言ったのは君。」

Fin.

手記

手記というものを書くのは初めてです。

私は特殊な人間であると思います。自意識過剰と笑うかも知れませんが、およそ常識の枠内にいることは不可能に思えるのです。誰しも自分は普通であり、かつ特殊であるといったような二面性をごく当り前のように信じていることでしょう。しかし私には、この普通という言葉が、まず怪しく思われるのです。もちろん、それは誰かほかの普通だと思っている人を否定するものではありません。唯一自分に対してのみ、私は普通とか常識とかそういった普遍性をもつ概念に懐疑的なのです。これを説明するには、私の生育環境を記した方がよいかもしれません。私の父は詐欺師でありました。母はそんな父に散々な苦勞を掛けられているのにも関わらず、過去の幻影に縛られ、自分がその男を愛しているのだという信仰に縛られ、果ては私という普通でない子供に縛られた女でした。母は健在ではありません。父の行方は知りません。私の特殊性を、母や父から受け継いだ、ごく自然なものとして立証するのは簡単です。何せ私は父の醜さを見、母の愚かしさを見、人間というものはこんなにも醜悪な生き物なのだと、年を経るうちに確信したのでありますから。

実際私は、何で普通の人たちが、ごく普通に、疑いなく、或いは些細な疑いを捨てて誰か他人を信じるということができるのか、不思議でたまらないのです。もちろんそういうように信頼を結ぶのが普通であって、疑念も何も人間はそういう動物であることは承知しているのですが、私に言わせればそれは狂気的な行為です。人間は醜悪です。困ったことに、こちらを立証することは容易いのです。歴史を紐解いてみれば、一体幾つの戦争があったでしょうか。現代においてさえ、この平和な国においてさえ、人殺しは後を絶たないのであります。

そうです。私は人間を信頼できないなどと言っておきながら、善と悪については一般的に、正しい道徳として、普通に信じていると言えるのです。その意味では私ほど人間を真に信頼している人間はいないということもできるでしょう。殺人を非道徳とみなす感情の、何と普通なことでしょうか。人間はそんなことをしてはいけないと考えるのは、人間というものに過度の理想を抱いているに他ならないのですから。

しかし故にこそ、私は人間を信頼することができません。多感なままに、むしろ脆弱に、懐疑を抱え、人間不信に陥り、それ自体が理想の存在への信仰を仄めかし、このジレンマは私の心を疲弊させるのであります。

前置きはこのくらいで良いでしょうか。私がこの手記を書こうと思った理由はもちろん私の特殊性を認めてもらおうなどといった感情からではないのです。このように育ち、かつ今になってまだ、病的な妄想（実際、妄想と言う以外に市民権を得る手段はないでしょう）を抱える私であってさえ、不思議なことに好意を寄せる女性というものがおります。人間というものは不可思議です。私は自分が、こんなにも人間不信な男が、女性を好きになることがあると想像もしていませんでした。

私にとって女性とは、愚かでかつ恐ろしい存在でありました。それは十分な年になるまでの私

の関係してきた女性のほとんどが母親であったからだと思います。前述のとおり、母は愚かしい人間でありました。しかし私の、特に年少期におきましては、この上なく恐ろしかったのも確かです。それはいつの間にか女性一般に対する感想に変わりました。私は小説をよく読みますが、その中で女性とは、何故か、愚かであるが一途であるか、不死鳥の如き驚異的な回復力をもって立ち上がる前向きな人物であることが多かった、と指摘しておきます。故にこそ、女性には、男性における暴力とは違った恐ろしさが備わっていると信じて疑いません。

そして、私が好意を寄せる女性も、そんな女性のうちの一人でありました。なぜ数多くいる女性の中から彼女に惹かれたのかは分かりません。運命の星というものがあって、その巡り合わせは数奇な、そして崇高なものであると表現しておきましょう。彼女が恐ろしい人間であることを言うのはこれまた簡単であります。なぜなら彼女は、私に対して、この人間不信の私に対して好意を寄せていると言ってきたのですから。

ですから、私と彼女の仲は相思相愛と言っていいものであるわけです。好きなもの同士が、好きな故に、好きなように共に過ごすという行為の連続を私は体験いたしました。しとしとと降る春の雨の中、一日中共に過ごすというような幸福を。待ち合わせの時間に遅れて尚、笑顔を向けてくれる喜びを。目覚めたとき、私の腕を枕にして眠る安らいだ顔を見ることは、至上の幸福と言って差し支えないことでしょう。

どのようにして彼女が私に好意を寄せるに至ったかは定かではありません。その事実は私の人生にとって最大の謎でありましょうが、最早それは重要ではないのです。

そして、私がこの手記を書こうと思った理由とはまさにその謎に換わり得る、ある重大な決定と覚悟に基づいた、一つの計画について、その進展と問題を暴きだそうと致すものであります。それとは別の問題として、このように私の精神状態を晒しましたから、教養のある人の中には、私が統合失調症のような精神病患者ではないかと疑っているのではないのでしょうか。いえ、その点については保証致しましょう。私は、いわば哲学者なのであって、決して精神を病んでいるわけではないと。それでも尚、私に対しての疑いはぬぐい去れないでしょう。しかしこれから記す私の覚悟と、およそ目にしたことの無い程の愛情は、あなたを納得させるに足るものだと信じております。

そうです。これは私の彼女に対する真摯な愛情、故にこそその思考と矛盾、追い詰められた精神と持ち合わせていた指向性が織りなしてしまった私の最期を記録するものであるのです。

彼女の名は紫藤綾といたしました。出会いの頃は覚えておりません。無理もないことです。何故なら私の精神において、私が私と認識する全ての記憶において、彼女という存在は、あまりに自然に、かつ初めから、私のそばに存在したのですから。私と彼女はいわゆる幼なじみでありました。彼女が恋の対象に私を選んだのも、このような長く確かな関係性の延長というある種自然な流れであったのでしょう。それはもちろん、私の彼女に対する想いの変化にも言えることでもあります。

少し幼少期のお話を致しましょう。私は嘔吐きな人間でありました。というよりも、虚言を通してしか他人と交わることができない性格であったのです。これは私の父親の影響かもしれませ

んが、およそ私は子供らしくもない嘘ばかりついておりました。とはいえ流石に幼いころですから、母親は面接の際などに、学校の担任から虚言癖があると言われる程度には上手くありませんでした。宿題をすませなかったことを糾弾された時に、他の子供であれば忘れていたなどといった嘘ともいえぬ言い訳をするところではありますが、私の場合は違いました。例えば年に二回ほど、ほぼ間違いなく言えば許された嘘というものがありました。それはつまり、突然父親が帰ってきて家が騒然としたのだという嘘であります。勿論、騒然の内容は毎回違うものを事細かに考えているのであり、また教師たちは私の家庭の事情をよく知っていましたので、回数と頻度にさえ気をつけていれば、独特な諦めの表情で私を席に座らせるのです。そうして質問は次の子に移ってゆきました。

今考えれば、このような幼稚な嘘などは見抜かれていたことでしょう。しかし教師たちにも、特殊な家庭事情と私の性格に対する理解はあったのです。私はそれを利用しました。特殊な家庭事情であることを盾に、知能でもって荒廃した人格を演じていたのです。効果的に、教師をあきらめさせたのです。中学に入ったころには私のやり方はさらにせせこましく、卑怯で、かつ大胆になってゆきました。家庭内暴力を誇張したこともありました。しかも、決して大がかりな問題にはならぬように、巧妙に、それとなく印象付けてゆくのです。

私のこの性格に、彼女は気付いておりませんでした。おそらく今も知らぬものだと思います。私の吐く嘘を簡単に信じ、私の嘘の信憑性を上げるために、彼女の存在は大きく役立ちました。そうです、私は彼女を最大限に利用したのです。簡単に、無条件に人を信ずる彼女は、私の最も理解不能な人物であり、かつ、最も利用できる人間であったのです。

それは、もちろん学校においてのみのことではありませんでした。いったい私は今までに、何度彼女を騙し、利用し続けたことでしょうか。そしてこれが最も私の罪悪だと思われることは、そうやって利用し続けて尚、絶対に嫌われないように、当然の権利の如く、いえむしろ同情さえも感じさせず、まったくあたり前であるかのように彼女の良心を弄んだことなのです。私は無意識のうちに彼女の中に私の偶像を打ちたててゆきました。そうです、それは彼女にとって信仰になりさえするものなのです。おそらく彼女にとって、私を信ずるということは、多分に大きな愉悦と恍惚を齎すものであったことでしょう。可哀想な人、嗚呼あの人は何んて可哀想な人なんだろう。私が彼を守ってあげなくちゃ、とでも思わせるかのごとく。

そしてそれは、私にとって非常に価値がある以上に、居心地のよいものでした。私と彼女の絶対的な人間に対する態度の相違は、彼女が私の傍に寄るのを許しました。私には優越感にも似た感情があったのだと思います。こんなに人間は信じられないものなのに、この女は簡単に人を信じる。極めつけは人類の中で最も信じるに値しない俺のような人間に対してさえ、信頼し愛してしまうのだ。その妄想は私を非常に昂らせました。

そうです。彼女は私を信仰するばかりか、よもや愛などというものを抱いてしまったのです。人間なんて信じられないと言っている、こんな最低の人間を。顔を赤らめた彼女からこのことを打ち明けられた時、私は不思議と口元の緩みを隠せませんでした。私は価値判断でしか彼女を認めていなかったのです。

彼女は非常に献身的でありました。それは異常と言ってもいいほどです。おそらく彼女は、私

がどうしても人間を信じられないのと同様に、誰かを信じ尽くすことをやめることができないのでしょうか。それは私のよく知る女性によく似ている性質でありました。そうです。私と彼女は今、私の父と母の再現をしてしまっているのです。どうしようもない詐欺師の男と、どうしようもなく愛してしまった女。この気づきは私を愕然とさせました。恐らく私が一番なりたくないと思っていた影と私の姿は重なってしまうのです。私はこの時、自殺を考えました。いいえ、より正確に言うならば、決意いたしました。その頃には既に母も鬼籍の人でありましたし、何より高校も終えその日暮らしの生活が続ける若者が一人見えようが世界は全く変わらない。彼女ひとり泣いてくれるだろうとは思いましたけれど。

正直言って、自殺という二文字が頭に浮かんだ瞬間、私にはその響きが最高級の果実の香りよりも魅力的に思われたのです。今まで私は誰も信用せず、多感で厭世的な思考に酔い、可哀想な自分という想像に溺れているだけでありました。しかし死という絶壁は、私に絶望を齎すばかりか、希望のように映りました。私の存在は、消えることによって輝きを放つのです。矛盾でもなんでもありません。陶酔と妄執の美味とでも表現しておきましょう。

それから何カ月か、私はどのように死ぬかを妄想して過ごしました。思春期の終りの最も盛っている年頃であれば、他の正常な男子であったらエロティシズムな蜜の誘いに酔うのが普通ですが、私の場合はペシミズムの誘惑に墮ちたのでありました。そしてそれはプラトニックと言っても過言ではないほどの憑かれ具合でした。

そんな私の決心を変えたのは無論彼女でありました。彼女の最大の罪を記しましょう。それは私を愛欲の泉に誘ったことでもあります。そんなものに一切の価値を認めなかった私も、肉体と本能の衝動には抗しきれなかったのです。私が最も苦手とするはずの、肌を触れ合わせるということを、肉の情動は要求いたしました。そして彼女は私に彼女を抱かせたのです。これは非常に巧みな手口でありました。完全に男の欲望を刺激する形で、もはや私が私の本能に逆らえなくなるのを承知で、いや寧ろそれを狙いすました態度と言葉で巧みに私の思考を遮断しました。

私が気付いたとき、私は今まさに彼女の中で締め付けられていました。しかし襲いかかったものは快樂どころか痛みでした。忌避していた人間の交わりのうちで、最も深く重なる行為を自分がしているのだということは私の心を打ち砕きました。自然と涙がこぼれてきました。それをすくいとった彼女はなんと言ったでしょう。同じように痛みを耐え頬を濡らしながら、彼女は私を愛していると言ったのです。それから彼女は狂ったように私の名前を繰り返し呼びました。呪でも架けるような程でありました。そして実際、彼女は私に首輪をつけたのです。それは愛欲の楔でした。私はこの感覚に逆らうことができなかったのです。

もちろん、彼女に悪意など一遍もありませんでした。むしろ愛情のみが彼女に純潔を捧げる覚悟を抱かせたのでした。もしあえてそこに何か付け足すとしたら、それは不安でした。私に愛されていないのではないかという不安。これはおそらく、この時私が彼女の体に欲望を放つまで彼女に纏わりついた暗黒なのでありましょう。

そして事が終わると、私はすっかり自殺する気を失ってしまいました。そればかりではありません。私の意識には重大な転換が見られたのです。私はここに告白いたします。それは私の、彼女に応える形での愛情の発見であったのです。私は自分の意識の中に、彼女への想いを見つけて

しまったのです。

よくよく考えれば、それは当り前のことでした。彼女が私に向ける感情が、私にとって理解不能であれ輝いて見えたのは、私が決して誰かに愛情を抱けないなどということはないと、証明するものであったのです。そもそも、私が利用価値のみで彼女を傍に置いていたのだということ自体、強がりに似た言い訳だったのです。そうです。私は他人を騙すばかりか、彼女に偽るばかりか、自分さえ虚偽のうちに貶めていたのです。

私が彼女への愛に気づいてから、私たちの関係はごく一般的な相愛する男女の形へ落ち着きました。穏やかな時間でした。ゆるやかで激しい山を、私たちはいったい何度超えたことでしょうか。抱くたびに彼女は私の名前を呼びました。それに応えて私も彼女の名前を口にしました。それは不可思議な呪文でした。ただ相手の名前を呼ぶというだけのことが、現に繋がっている体をより熱く溶け合わせるのです。雨さえ小道具になりうるのです。映画などで見たことがあるでしょう。土砂降りの雨の中、傘もささずに唇を重ねる男女の姿を。陶醉した目で見つめ、ザーという雨の音が全てを遮断してくれるようで、それでも不思議と相手の息遣いさえ聞こえるのです。濡れて透けたシャツに欲情し彼女を抱きよせ長く深い接吻をしました。少しだけ私は彼女を殺す気でいました。何故なら酸素を止められた彼女が、それでも私の舌を求め蠢くのですから。彼女は淫靡で尚、清純でありました。

今思えば、それはなんと甘美で幸福な日々であったでしょう。私は懷疑も不信も忘れ、彼女の胸に抱かれていたのです。そしてなんとということでしょう。私が彼女への愛を確かなものにする過程はまた、彼女と私の距離を離さねばならぬという決心を、私に持たせることになったのです。

私はこの時にはもう、彼女を心の底から愛するようになっていました。今でもその感情に変わりはありません。ですが前述の通り、私は社会性の欠如という重大な欠陥を抱えていましたし、その上仕事も何もせぬ将来性のない男でありましたから、彼女にはとうていふさわしくないと考えたのです。いえ、もちろんそれは自己満足と映ることでしょう。真なる愛情とは、何にせよ共にいることだという考えを否定するつもりはありません。しかし私には、どうしても駄目なのでありました。たとえ彼女という存在が春の風のように私の背中を後押ししても、私にとって生きていくことそれ自体が苦しみに満ちたことだったのです。それに、私にはこのような私の将来と、彼女を道連れにすることなどできませんでした。彼女には見合ったよい相手がいるはずなのです。それは私ではあり得ませんでした。彼女が何を言おうとも、私は共に在ることはできないのです。

私は彼女から奪い過ぎました。一途な供物を貪りすぎたのです。彼女が私を愛すれば愛するほど、私は自分を嫌ってゆきました。冷たい闇の中で触れる暖かな手は、自分の手の冷たさまで意識させてしまうのです。優しさに濡れた頬は、自分の冷酷さに泣いているのに等しいのです。そのことに気づけたこと自体が価値あるものだと言うかもしれません。ですが、その気付きは、私には重すぎました。

そして、私は決心いたしました。彼女のもとから姿を消そうと。そうして誰も知らないうちに、真正の闇へ堕ちてゆくのです。それには彼女が私の行方を全く気にしなくなるほどに、彼女が

ら嫌われる必要がありました。いえ、それでは足りません。記憶のただ一片にも残らぬように、完全に緻密に、彼女の全人生から私の影を消すべきなのです。私と彼女の二十年を、すっかり消去するにはどうしたらいいでしょうか。ごく自然に、かつ完全に、最初からなかったもののように、彼女から私への愛情だけを消し去ってしまうには、どのような道を辿るべきでしょうか。なにせよ、これは価値ある行為に違いないのです。何故なら彼女にとって新たな人生の始まりとなり、私にとっては苦痛の終焉たりうるからです。

もちろん、この二十年の罪を購いきれるなどと思っているわけではありません。どころか私には、償うつもりなどありません。死んでお詫びなどというのは御免です。しかしそれでも私が死を選択するのは、私が完全に社会から逸脱した、絶対の逃亡者たるために必要であるからなのです。何も私は、普通に暮らしている人々の、普通の感覚までを否定するつもりはないのです。異常なのは私の方です。それは意識の芽生えと同時にわかりきっていたことでした。そうです。異分子は滅びるべきなのです。その破滅が、彼女を救うことにもなるのです。それはなんと美しい愛情でしょうか！

私は自分のこの思考に満足しました。分かってもらうつもりなどさらさらありません。ですがこの実行は、私の彼女への愛を確固たるものにしてくれるのです。社会に適格できなかった可哀想な男が、気付かれぬように唯一残した高潔な愛情。なんと綺麗な物語でしょうか。私はその類の話を知っております。それは極貧の母親が、女手一つで育てた娘の婚礼衣裳を、自分の結婚指輪を売ってまで用意するような愛情に似ています。そしてそれが綺麗で哀しい物語になるためには必要な条件があります。そうです。母親はドレスを娘に送った後、不慮の事故か病気か何かで死ななければならないのです。娘と母親がそれまで喧嘩か何かで疎遠であったならなお完璧です。私がしようとしていることはそういうことなのです。綺麗な悲劇を最期に残したいのです。

ですから、私はこれから計画を実行に移そうと思います。概要はこうです。これから私は徐々に徐々に、彼女との逢瀬の期間を開けてゆきます。それでも離れないというならば、およそ女性が男を嫌いになるありとあらゆる方法を使う覚悟を決めています。静かに密やかに、私は彼女の視界から退場してゆきましょう。あくまで何も残さぬように。それが唯一、私に出来る愛の形なのですから。

本懐とは矛盾する一抹の淡い期待を以って、この手記を残してゆこうと思います。遺言はありません。ですが許してほしいのです。君がこれを見つけてくれたらと夢想することを。何にせよ私の知り及ぶところではないのですから。

それでは始めようと思います。一世一代の、強固な意志と目的を持った、嘘と偽りの愛情劇を。そして人間を信じられない癖に人を騙すことしかしてこなかった私の欺瞞だらけの人生の、最期には綺麗な悲劇を演じきって見せましょう。この私の最も得意とする嘘偽りの技によって。

もうすぐ彼女が訪ねてきます。いつも通りの笑顔でもって。私は昔から変わらぬ彼女に、少しだけ冷たく接するつもりです。上手く行くでしょうか。いえ、上手く運ばねばならぬのです。

嗚呼、私のこの性格は、偽ることしかできぬこの人格は、まさにこの為にあつたのだと、私は今確信しております。

.....

＊病室＊

紫藤綾が病室に入ると、白痴のような男が虚ろな瞳をこちらに向けた。精神の安定の為に少しだけピンクがかった病室の中で、男の真っ白なパジャマは死化粧を連想させた。彼は焦点の合っていない瞳を何秒か彼女に向けて、しかしすぐにクリーム色のカーテンの向こうの青空へ目をやってしまった。開け放たれた窓から海沿いの病室へ潮の香りを運んだ風は、そのまま彼と彼女の髪を揺らした。そうして彼女は、自分の眼尻に涙が溜まっていることに気付いた。ああ、こんな人のためにも私は泣けるのだ。寂しげな喜びが、口まで出かかった言葉を飲み込ませた。

医者らしからぬ風貌の男にいざなわれると、彼女は少しだけ患者の男へ目をやった。変わらない細い線。変わってしまった光のない瞳。泣きそうになった。けれど泣かなかった。紫藤綾は最後まで目を離さずに、それでも病室の扉を閉めた。

「彼はね、一応統合失調症の患者ということになっているよ」

首から下げた写真入りのプレートを指さしながら河野と名乗った医者らしからぬ風貌の男は場所も憚らずに喋り出した。

「統合失調症？ 分裂病のことですか」

「昔はそう言ったね。妄想とか、社会性の欠如とか、まあそういう症状がみられたからね」
妄想。彼女は口の中でその言葉を反芻した。

「そう、妄想」

「この辺のね、名前もない、まあ自殺の名所みたいな崖の近くでふらふらしていたのを発見してね、うちで保護したんだよ。どうも精神が正常な状態ではないように見えたからね」

「そうですか」

確かに、さっきの彼は彼女でさえ見たこともないほど放心しているようだった。

「それでね、持っていた手帳に君宛だと思われる手記が挟んであったからね。それに一応、手続きとかいろいろなことで彼を知っている人間が必要だったからね。君を呼んだんだよ」
その手記も今は彼女の手提げ鞆の中に入っている。既に読み終えてしまった彼女は、感情のない声で河野に告げた。

「彼の母親、まだ死んでないんですよ」

「そうなのかい」

河野はさして驚いた風もなかった。こんなことは日常茶飯事なのかもしれない。

「ええ。父親だった男と、何年か前復縁したんです。でもその条件が、彼を離して二度と会わないことだったんです」

俯いたまま言葉を続ける彼女は、膝を抱えて泣くのを堪える幼子の姿に少し似ていた。

「捨てられたんです、彼。だから私、放っておけなくて」

「そうかい」

河野は特に慰めもしなかった。彼女は慰めを、背中をさすってくれる手を欲していたが、それは目の前の男のではない。

「治るんですか、彼は」

哀願する瞳の彼女に、難しそうな顔で河野は答えた。

「分からないね。一番の薬は君が来て彼に話しかけてくれることだけど。あとはこの環境と薬とカウンセリングでどこまでいけるか。なににせよ、完治は期待しない方がいいね」

最後の一言で、ついに彼女の頬を一滴雫が伝わった。彼女自身も分からないほど長い間堪えてきた涙は、止まることを知らなかった。河野は彼女の正面に回ると、彼女に訊ねた。

「それでも君は、彼を訪ねてくれるかい？」

ハンカチで涙を拭い、病室の扉に目をやって、自分を騙そうとした最愛の彼のネームプレートをゆっくりとなぞると、愚かで一途な少女は誓うように答えた。

「ええ。子どもには、父親が必要ですから」

そうして彼の名前をなぞった手で、彼女は自分のお腹をさすった。

FIN.

甘き死よ、来たれ

小さい頃、あいつは泣き虫だった。虫や動物なんか見るとすぐに俺の後ろに隠れてぐずっていた。俺は毎回のことながらそんなあいつに鬱陶しさを感じながらも、可愛さを感じていたというか、嫌な言い方をすれば優越感に浸っていたんだ。なんだよ、犬可愛いじゃん。何が怖いのだ。ほーら触ってみろよ。ははは、吠えられてやんの。嫌われてるのがわかるんだよ、向こうにも。……そんな風に、眼尻に涙を溜めているあいつをからかうのが楽しくて、まあちょっといじめめいたところもあったと思う。いちいちビクッと跳ね上がりながら身を縮こませる恰好は見ているとあきない。もっとも本気で泣き出されたら、こっちがオロオロ慌てることになるんだけど。

その上あいつは馬鹿なんじゃないかと思うくらいにバランス感覚に疎かった。歩けば子供の足だって五分かからないくらいの公園に着くまでに必ず一回は転んだ。転げば転んだでびーびー泣く。それをやっとの思いで公園の手洗い所まで連れて行って擦り剥いた膝なんかを洗い流してやるのが常だった。そのくせ縁石やら半分埋まったタイヤやらとにかく出っ張った所があれば登るもんだからまた転ぶ。歳が一つ違うとはいえ実際離れているのは三ヶ月くらいで、つまり俺が二月であいつが五月生まれなものだから、学年なんかは離れてしまうのだけど、それを差し置いたって俺はあいつの兄貴みたいな位置にいた。

まあそんな感じでいわゆる幼馴染の関係であるあいつと俺は、お互いの家へいったり来たり、仲のいい兄妹みたいにいっつも一緒にいたし、それが普通だと思っていた。高校に入った今でこそあの時みたいに四六時中一緒にいるわけではないが、特に申し合わせたわけでもないのに学校は同じだし、だいたい住んでいるのは同じマンションの同じ階だからよく鉢合わせてはからかいあった。まあ、つまり心地良かったわけなんだ……が。

「なあ、お前最近機嫌悪いな」

隣を歩くのはもちろんあいつ、幼馴染の佐伯彩だ。今日も今日とて約束したわけでもないのに玄関を出たところでばったりはち合わせてしまった。小学生のころだったら元気にあいさつなんかして、競争なんかしながら学校に向かうところだが、思春期真っ盛りの女の子は色々難しく、こっちがおはようと声をかけても聞こえるか聞こえないか程度の声でおはよと呟くだけである。そのくせすぐ後ろでついてくるみたいに歩いているしもともと気を置くような間柄でもないから、単刀直入に訊いてみようと後ろを振り返ると彩とばっちり目が合ってしまった。いくらなんでも多少気恥ずかしくなって首を元に戻しながら訊いてみると、

「何」

なんて可愛げのない声が返ってきた。

「振られたとか？」

「違うわよ」

挑発も無駄骨。カマをかけたが見事に外れた。まあ、分かっちゃいたんだが。聞こえるだけの音量で返事が返ってきただけましか。

「んじゃなにさ」

「何でもない」

にべもなく切り捨てられた。取りつく島もなければつかむ藁さえありゃしない。

「何でもないって、お前なあ」

なんで急に愛想悪くなるんだよ、生理か？……などという科白が思いつくことは思いついたのだが、わざわざ逆撫ですることもない。だいたいいくらなんでもデリカシーに欠けている。いくら年頃の男の子だってその位の配慮はある。

エレベーターの扉が開いて彩はさっさと入ってしまう。

「入らないの、閉めるよ」

「待てよ」

まったく、入ろうと一步踏み出してんのにそういうことを言う。言ってる割に本気で閉めようとしているわけではないのはわかるのだが、やっぱり言われたら多少焦る。というか焦ったふりをする。意地が悪いやら優しいやら。いや、やさしいとは言わねーな、これは。

ほんの一瞬重力から解放されて再び重さが戻ってくる。朝飯を駆け込んだばかりの胃にはいささか悪い。エレベーターの中の空気は冷たい。彩はマフラーの中に口まで埋めて、毛糸の手袋に収めたちっちゃな手を擦り合わせている。あんまり意味のなさそうな行動だ。気持はわかるけど。

エレベーターは重たく落ちて少し戻って一階で止まった。

「降りないの」

「え、ああ」

開くボタンを押している彩に促されて、俺はマンションのロビーへ出た。本当は男の方が気を利かせてボタンを押してやっていれば格好良いんだろうけれど、どうにもそういうところには気が回らない。対してこいつはなかなかどうして気を利かせられる性分なのだ。今でこそつっけんどんな人当たりだが、思いの他に面倒見がいい。こういうのを面倒見がいいというのかは謎だけど。

「うわ、寒っ」

ガラスの自動ドアの向こうの通りはさっき部屋の前で感じたよりもいっそう冷たくなっていた。仕方がないか。川沿いの舗装されたアスファルト、しかも日の当りが悪いとくれば、冷え切っている方が自然だろう。

彩はコートに手袋ごと手を突っ込んでいる。右肩に下げられた鞆にいつぞやあげたうさぎのマスコットがかかっていたのに今さら気づいた。確か去年の冬だったか。同じ高校を受験すると決めたこいつに願掛けで買ってやったものだ。あの頃は今よりずっと仲が良かった。もっとも、もっと小さいころと比べればそれほどでもないのだろうけど。

「あのさ」

唐突に声をかけられて、目をやれば彩がこっちを見もせず俯いたまま歩き続ける。あんまり普通な声色すぎて、むしろ反応出来ずに俺も黙ったまま隣を歩く。俺たちが幼馴染だと知らないやつが見れば、朝っぱらから喧嘩したカップルの姿に見えなくもないだろう。もちろん事情を知ってなお、そうやってからかうやつも後を絶えないのだが。

黙りこくった空気のまま大通りとの交差点まで来てしまうと、赤信号で止められた足と反対

に彩が再び口を開いた。

「二月だね、今」

そんな当たり前のことを言う。今が二月じゃなきゃいつが二月なんだか。だいたいなんだ、そんなことを言ったってなにが言いたいやらさっぱりわからない。今が二月だからって何か変わることがあるわけでもないし、たとえ七月だったとしてもこの暑苦しい格好から脱皮するくらいのものだ。

「なんかあったか、二月」

とりあえず意図も見えないので、そんな普通の返事をして様子を窺うことにした。実際何にも思いつかない。ああ、そういえば高校入試で休みが何日かあるな、後半には。

「わかんない？」

「何が」

なにやらだ。覚えてないのと聞かれても、何の話をされているのかわからなければ答えようがない。

「覚えてないの？」

「だから何を」

彩の言葉はいまいち了を解せない。話がまったく見えてこないし、お前はコミュニケーション不全な引き籠りかなどとも言いたくなるが、こいつの性格はわかっているので口に出さない。昔はちょこまか後ろを着いて来ていたのに、今じゃ横に並んで愛想の一つも見せやしない。

信号が変わって横断歩道を渡ろうとすると、綾が小さくため息をついた。こっちに聞こえる程度に。

「おい、早くしろよ」

そのまま歩き続ければいいものを、なぜだか彩は白線と白線の間の中途半端なところで立ち止まってしまう。

「翔太ってデリカシーの欠片もないのね」

おいまて今どの辺にそういう要素の係る部分があったんだよ。それこそ欠片もありやしねえよ。この続いているかどうかとも怪しい一連の会話の流れのどこにデリカシーとやらを発揮するタイミングがあったんだよ。それともあれか、デリカシーってのはうまいこと会話を盛り上げることなのか。んなら俺には求めんな。つうかそれデリカシーじゃねえだろ……とは思っていても言いはしない。面倒くさいのは嫌いだ。

「お前なあ、ほら、早く来いよ」

「嫌、なにするのよ」

腕を取って引っ張ろうとすると、痴漢にでもあったかのような反応で振り払われた。いや実際こいつの中じゃあ近いものがあるのかもしれない。知らねえけどんなことは。いつの間にやらずいぶん嫌われるようになったもんだ。

「んじゃ歩けよ。赤になんたる」

だから翔太はデリカシーないのよ、という呟きは聞こえなかったことにする。もう一度、今度は強引でなく手を差し出すと、意外にも素直に握り返してきた。小さな手で厚手の手袋なんかして

いるもんだから握りにくいことこの上ない。なによ、少しはできるじゃない。聞こえない程度の音量で言ったつもりなんだろうけど、あいにくしっかり届いていた。だからと言って反応はしない。面倒くさいのは嫌いだ。

「いつまで握ってるのよ」

大通りを渡り切ってしまうと彩が駄々をこね始めた。そういう言い方であらわすのは不適切かもしれないが、俺には何故かその言葉が、嫌がっているようには聞こえなかった。嫌われてるのかそうじゃないのか。どうにもこっちの感情でバイアスがかかるらしい。色眼鏡も付けるのは俺だ。

「学校まで、とか？」

「な、何言ってんのよ恥ずかしい」

「俺もだ」

「もう」

手を離してやると、彩は勢いよく胸まで手を引いた。そうして触れていなかった左手で俺が触った右手をかき抱く。どっかで読んだことがある文章が頭をかすめた。胸の前で手を組むのは相手との心理的な距離を表しています。こういうときばっか俺の頭は回りやがる。自家発電で気分を悪くしても仕方がないのでさっさと行くことにした。

「あーもう、行くぞ」

「待ってよ」

彩は走って隣に並ぶ。近づきたいのか距離を置きたいのかどっちなんだよお前は全く。なんなんだ、本当に。わかりやしねえよ。女って面倒くせえな。とはやっぱり言わない。臆病とかではないと主張したい。こういうのは処世術だろう？

「んで、結局何なわけ」

「何なわけって、何？」

コノヤロウ。何の話か訊いてんだから、こっちにわかるわけねえだろ。いや確かにこいつは昔からんでキャッチボールが下手だったけど。会話くらい成立させてくれ。

「二月がどうのって話だよ」

仕方がないのでヒントを出す。ヒント一つかむしろ俺にヒントくれよ。何の話かわかんないんだから。あーもう面倒くせえよこいつ。歩くのは遅いし話は噛み合わないし。

彩は、ああ、うん、などと情報量のない返答をする。いやいいんだけどな、それはそれで。会話が續くならな。

「ほら、真ん中へん」

「真ん中へんって言われてもな」

「あと二日くらい」

なんでこいつはこう素直に伝えることができんのだ。わざわざ回りくどい言い方をするどこに利があるのか教えて頂きたいものだ。あと二日とかいう言い方する意味ねえだろ。

「ああ、製菓会社の謀略の日ね」

バレンタイン、と彩が訂正する。わかってるよそんくらい。お返しだよばあか。

しかし珍しいな。料理の類が壊滅的に苦手なくせに毎年手作りで辛うじて成功作だろう物体をポストに突っ込んでおくようなこいつがわざわざバレンタインを話題にするなんて。

「あの、ね、」「毎年何か激しい物体が渡される日なんて恐ろしくていちいち覚えてられねえよ……って、何か言ったか？」

彩が何か喋ろうとしたと思ったのだが、ついつい聞き逃して喋り続けてしまった。

「何でもない」

彩は途端に機嫌を悪くした、ように俺には見えた。

「何だよ」

「何でもない」

「言えよ」

「だから何でもないって」

無益な言いあいが続く。無益というか無内容というか。彩は頑なに明かさない。何なんだよ、一度言おうとしたことだろ？

「バレンタインなんてカップルと製菓会社のお祭りだろ？ 俺もお前も本来まったく関係ねえじゃねえかよ」

というかむしろ関係なくしてあの激しい物体を送りつけてくるのをやめてほしい。毎年苦勞するんだよ、これが。チョコが辛いとかあるかばあか。

例のごとく心中ひとりごちていると、かすれる様な声で彩が反論した。

「……今年は、違うもん」

「何が」

なんだかそれがやたら必死に見えて、何がどうなれば去年までと違うようになるのか微に入り細を穿ち説明して欲しかったが、どうせ言わないだろうから相槌程度に留めておいた。

「言わない」

ほうら、やっぱり。

「上手く作れるアテでもあんのか？」

牽制のつもりで言ったのだが応答がない。その代わり彩は歯を食いしばって黙ったままぎゅっと拳を握り締める。いつもなら軽く笑い流すかもっとわかりやすく怒ってくるやつなのに。

ああ、そうか。閃くものがあつた。嫌な予想だ。だけど、それは仕方のないことなのかもしれない。何もやらんで甘えていた俺が悪い。そういうことなんだろう。

「何だお前、好きな男でもできたのか」

ああ、ばかだな、俺。何でからかうようなことしか言えねえんだろ。言ったら後悔するとわかっていながら言うことしかできなかった自分に嫌悪した。そら嫌われるわな。当たり前だ。

彩は今度も反応がない。

「何だよ、凶星か？」

ああ、だめだ。止められない。胸やけむたいなもやもやが、しかししこりのように重くのしかかる。おい、怒ってこいよ。いつも見たくそんなことないって否定してくれよ。何で、何にも言ってくれねえんだよ。

「相手の男も大変だな、あんな物体渡されちゃあ。考えもんだよなあ、あれは。食ったらいいのか捨てたらいいのか」

どうして俺はこういうときに素直になれない。死ねよ俺。それが嫌なら謝れよ。ごめんて一言いえばいいだけの話だろ？ 簡単なことだ。幼稚園児だってできることだ。

「……い」

ぽつりと、彩が零した。

「何だよ」

つい語勢が強くなってしまふ。本当に、本当に俺は馬鹿だ。

「知らないっ！」

「おい、彩！」

走り去っていく後姿を見つめながら、引き留めるようなことを声には出しておきながら、俺は全然追いかける気力が湧きあがらなかった。

泣いてたよな、あいつ。泣き虫だからな。変わってねえな。ほらまたやりすぎちまった。十年以上も前から進歩しねえな、俺。死ね。

一日中自己嫌悪に陥っていたら放課後になっていた。授業なんてこれっぽっちも覚えちゃいない。いつの間にやら夕日も落ちて、闇が静かに帳を下ろす。最低な気分でだらだら歩いて靴箱まで来た挙句、鞆を教室に忘れていないことに気がついた。頭が全然回らない。もともと馬鹿の自覚はあったけど、ここまでだとは思ってなかった。俺馬鹿大馬鹿死ねこの野郎。

電気の点いていない廊下を今の俺にはちょうどいいかなどと自虐的な気分で教室に向かって歩いていると、廊下の向こうに彩の姿を見つけた。そばには友人だったと思う女の子と、初めて見た男がいて、何の話をしていたかは分からないが楽しそうに笑いあっている。あいつか。あいつなんだろうな。まあ仕方ねえな。学年が違うってのはこういうことだ。今まで何度も感じてきた疎外感。あまりにも一緒にいるのが自然すぎて、妙に独占欲めいたものを抱いてしまう。格好悪い。

いざ教室に入ろうとすると、ふっと彩がこちらを振り返った。表情も眼の色も暗いせいでよく分からない。少なくとも笑ってはいない。笑いながら友人たちと話している、その一瞬の間に無表情でこちらを見つめ、そうしてすぐに視線は友人たちのほうに戻ってしまった。いよいよ扉を開けようとする、彩たちの会話の中に出てきた単語を敏感にも聞き分けてしまった。

「明後日はバレンタインだねー」

女友達に答えて彩はそうだねと言った。無意識のうちに意識が向こうへ向いてしまう自分が悔しい。ねえよまったく。なんだよそれは。ついつい扉を開こうとする手に力がこもってしまう。バン、という大きな音に、女の子が反応してこっちを見たが、すぐに会話に戻って行った。彩は振り返るそぶりもない。

自分の机まで行って鞆を見つけると、今出ていくのも気まずいが出ていかないのも馬鹿馬鹿しいので、自分がやけになっているのに気付きながらも教室を出る。じゃあな。声に出さずに彩に贈る。もちろん、反応なんて返るはずもない。

「吉井君はどんなの貰ったら嬉しいの？」

その代わりに聞こえたのは、男の方に訊ねている彩の声だった。少しだけいつもより音量がでかい気がして、こっちの精神状態がおかしいからか、それともほんとに大きな声で言ったのか判断つけることもできない。男の方は、やっぱり貰うなら本命のやつだよ、などと返す。違うよ、そういう問題じゃなくて、ケーキとかクッキーとか、ジャンルの話だよ、ばっかだなあ。彩と女の子はそう言って男の方をからかう。

もうだめだ。俺はここにいらんない。姦しい三人に背中を向けた。視線は感じない。馬鹿なのは俺。じゃあな。せいぜい幸せになってくれ。心にもないことを思いつく。

冬の宵口、引き留める声をまだ期待している甘っちょろい自分を切り裂くくらいに外の空気が冷たく感じた。

次の日。気分はまだ重たいまま部屋を出ると、エレベーターの前に彩がいた。上がって来るのを待っているんだろう。追いかける気は起きないが、気まずいさを感じる反面妙に焦燥めいたものを感じた。なんだこれは。

「……おはよう」

一応声をかけてみたものの、返事はやっぱりというか当然というか帰ってこない。

こちらがエレベーター前に辿りつくほんの少し前に開いたドアの向こうに彩は無言で入っていく。走ったらたぶん乗れる。けどその気になぜかなれない。心ばかり焦って足の方は呑気なままペースを変えない。天の邪鬼め。

間に合うか、という目の前で静かに音を立てて扉が閉まった。彩の目はしっかり俺をとらえていた。感情がよくわからない。伝えたくないと言っても言うような雰囲気だけが伝わってくる。無言で見つめる。交差した視線を、無情にも扉が断ち切った。

再びエレベーターが上がってきた。乗り込むとそこには、という展開を少しだけ描いていたけどそんなことあるわけない。どういう期待だよ、バカヤロウ。

「とりあえず、謝った方がいい、よな」

それが最善だろう。でもどうやって、今さら。

また放課後。いつもとは違ってかわって暗い雰囲気のをさすがに心配になったのか、友人どもは最初こそわけを尋ねてきたけれど、そのうち触らぬ神に祟りなし、ということで落ち着いたようだった。どうでもいいけど。

帰るか。学校にいても何か好転するわけじゃねえし。鞆を取って立ち上がると、教室の外に見たことのある顔があった。確か昨日、彩と一緒にいた女の子だ。じい、と俺をにらんでいる。「何か用か」

穴があくほど見つめてくるのを無視するわけにもいかんだろう。

「アンタ、稲原翔太？」

校章を象ったピンの縁が青い一年の女の子は、いきおい怒っているようだ。物怖じしない子だな

。

「一応センパイだと思うんだが」

「関係ないわよ」

確かにな。どうでもいい。

「で、何の用だよ」

あたりはついているけれど、こっちから言ってやる義理はない。

「わかるでしょ？」

ここでわかんねえよと答えたら、デリカシーの欠片もないのね、とか言われそうなのでやめておいた。わざわざ火に油を注ぐまねはしたくない。面倒くせえのは嫌いだ。

「彩か？」

「そうよ」

何を言っても逆鱗に触れそうだ。温度の高いこと高いこと。

女の子はこちらに詰め寄る。すげえなおい。年上の男に向かってこんだけの威圧感を出せるジョシコーセーはなかなかいねえぞ。いやいそうだな。ヤマンバとか。まだいんのかな、そういう人種。とかいうどうでもいいことばかり考えたくなる。こいつと話すのは面倒くさそうだ。

「アンタは彩の気持ちが全然わかってない」

「そうだな」

否定する気も起きないし、できるはずもない。十年以上隣にいたってあいつが何を考えてどう感じるのかまだよくわからない。だいたい会話すんのは下手だし最近では愛想もねえしでわかるわからんの次元じゃないのだ。昔は一緒にいるだけで楽しくて嬉しくて、しかもそれが普通だったから会話の意味なんてあってないようなものだった。今でも一緒に歩いたりするけれど、重大な意味のある会話なんざした記憶がない。まあ、昨日のはもしかしたらあいつにとって重大な意味をもっていたのかもしれないが。んなこと知らん。わかるわけねえだろ。

「冷たいのね」

そういうんじゃねえよ。事実だろうが。非難されてその通りだと答えたら冷酷だといえますか。

「わかんねえもんはわかんねえ」

それ以上に、言えることなんてないだろ。

「いいの、それで？」

「いいもなにも、事実なんだから仕方ねえだろ。それともお前にわかんのか？ 超能力者でもあるめえし」

いらついた気分をそのままこめて睨みつける。さてどう反応するだろう。わかると言い張るだろうか。それは根拠薄弱だ。何の説明にもなっちゃいない。

「わかるわよ」

「どうして」

彩の友人は力のこもった瞳でこちらをにらみ返してきた。

「アンタと違って、わかろうとしてるから」

「だからわかるってわけじゃねえだろ」

そんなんでわかったら争いなんざ起きねえよ。人間はもっと馬鹿なんだよ。

「でも、」

うるせえな。分かってるよ。喋るなよ。わかってるんだよ、俺のそういう態度が今のこういう状況を作ったんだってことくらい。ただ俺は、

「あの子は、泣いてたもの」

そうさ。結局は泣かせたんだ。加減を誤って。いつも通りのやりとりなら、多少小憎らしいとは思っても、いくらあいつが泣き虫だからってそんなに静かに泣くわけないんだ。泣くときはこっちを責めるのを全面に押し出して、目の前で大泣きするタイプなんだよあいつは。それが黙って声を押し殺して顔をかくして走り去るなんて、俺にはどうしていいかわからなかったんだよ。

「とにかく、泣かせたのはアンタなんだから、このままにしておいたら許さないからね！」

彼女は声高に友情らしきものを宣言する。そうだよ、確かに悪者は俺だろうさ。

「じゃあどうしろって言うんだよ」

わかってくれると思ってたんだ。彩なら。からかって虐めているようなことも言うけれど、本心は全然そんなんじゃないんだって。そんなつもりこれっぽっちもないんだって。自分は相手のことを分からねえと言ってるのに、そんなこと言う権利はねえとは思うけど。

「明日」

明日、何だよ。どうしろってんだよ明日。彩みたいな話し方すんな。バレンタインがどうしたってんだよ。もう本当に関係ねえだろ。不信の色で相手の目を見る。

彼女の瞳から怒気が消えていた。いつの間にかついていた蛍光灯の光を反射する。薄い茶色の虹彩。ああ、そういえば彩の眼はもっと深い、吸い込むような黒だったな。

「学校終わったら、屋上手前の踊り場で待ってなさいよ」

そう言うと彼女は反対を向いてさっさと去ろうとする。

「何だよ、それ」

最後の悪あがきで背中に声をかけると、慈悲深くも彼女は振り返ってこう付け足した。

「答えてあげて。それが、できることよ」

そうして颯爽と去っていく後姿を見ながら、あいつもいい友達をもったな、などと脇道外れたことを考えていた。もし俺があいつと同じ学年だったら、それなりに仲良くやれたんだらう。また寂しさがよみがえった。言いようのない距離感が。

でもきっと、それはあいつも感じていることなんだろう。

階段を上がる足はまだ重たい。心はまだ焦燥感に追いやられている。朝はあいつの姿を見れなかった。言われたままも癪だから朝のうちにはっきりさせようと思っていたんだが。

そう、白黒つけるべき時が来たのだ。曖昧で居心地の良かった関係を殺して、今日こそ新しい始まりを。それが甘いものでありますように。

ゆっくり上がっているつもりだったのに、いつの間にか足は心を映す鏡になって、一段飛ばしで駆け上がる。息が切れる。あんま運動してねえからな。これから毎日走るようにするか。

踊り場まで来ると、まだ彩は来ていなかった。なんだよ、どうせなら先に来てろよな。

窓から屋上を見る。立ち入り禁止の屋上には、いつからあるのか分からないような水たまりがあって夕日を映す。今日はまだ暗くなっていない。冷たい空気に紅が透き通る。

「あ……」

声に反応して振り返ると、待ち人が息を荒げてふうふう言っていた。後ろには昨日の女の子も見える。押されて走ってきたらしい。彼女の方はじゃあがんばって、という励ましを最後にして降りて行った。どっちに言ったんだか。

「よう」

彩は両手を後ろにして俯いている。

「来たんだ、翔太」

「来ねえと思ったのか」

「うん。少し」

そうか。ふっと口から零れた。そりゃそうだ。俺だって疑ってた。ずっと待ちぼうけを食わせようとあの女が仕込んだんじゃないかと。それは一瞬の疑念だったけど、抱いたことには変わらない。

「あのね、」

「待てよ」

ぐっと顔をあげてこちらを見る彩を見つめて押さえた。

「何？」

「その、ごめん」

「え」

どうしてもこちらから言いたかったのだ。言わなくちゃいけないと思った。そのくらい俺にやらせてくれ。

「俺さ、たぶん甘えてたんだ。腐れ縁っつーか、お前との関係に。こういうのって、なかなかないことだろ？」

うん、そうだね。彩は素直に先を促す。

「だからさ、分かてるし、分かってくれてると思ってたんだ。そんなわけねえのにな」

「私も、それは考えたよ」

「そっか」

思わず笑いたくなってぎりぎり寸前でこらえた。やっぱ十五年は重いな。どっかで似てるのかもな、俺たちは。

そうしてこの長かった関係にも、そろそろお別れだ。名残は惜しいけれど、しがみついているだけじゃ何も変わらない。その意味じゃこいつが愛想悪くなっていたのも必要なことだったのかもしれない。取りつく島も、掴む藁もなくして。

「いい関係だよな、俺たち」

「うん」

彩がふっと眼を泳がせた。俺は大きく深呼吸する。言うぞ、俺は。答えてやることだけじゃない。俺に言わせてくれ。

「でもさ、今日で終わりにしようと思うんだ」

「え？」

泳がせた目がこちらへ戻って焦点を結んだ。どういう意味か測りかねて、どうにも反応できていない。そらそうだ、こんな言い方じゃあな。当たり前だ。

「その、す、」

もう一度大きく息を吸う。

「好きなんだ、彩。お前のことが、昔から」

しっかりと、目を見て。

「だから、今日からは、恋人同士ってことじゃ、だめか？」

無言。でも、馬鹿にされたり一蹴されたりといった反応じゃないってことは、答えに期待が、と思っていたが。

「翔太はさ、ずるいよね」

彩はそんなことを言い出した。なんだ、やっぱり俺からの告白なんていらぬし聞きたくなかったってことか。

「男の子だから力も強いし」

「女には涙があるじゃねえか」

悪い方ばかりに考えが進みそうなので、何でも無かったみたいに軽く返した。少なくとも、そういう反応のつもりだった。

「私より三か月も前に生まれるから学年は違うし」

「そうだな」

確かにそれは、俺も痛感したよ。

「しかもさ、」

なんだよ、といつものように聞き返す。突然倒れこむように、彩はぽふ、と頭を俺の胸板に預けてくる。そのまま腕を腰のあたりに巻きつけるようにして抱きつかれる格好になった。

「な、どうしたよ、急に」

「なんでもない」

その声はなんでもなくない声だろうに。だいたい、だ、抱きついてきておいて。

「愛想ねえな相変わらず。たまには、ちゃんと言えよ」

「翔太はデリカシーがない」

確かにな。だけど、答えてくれなければ、こっちだって真面目になれない。腕をまわしてその体を支えられない。抱きしめたりなんか、なおさら。

「言うつもり、だったわよ」

抱き返さないままでいると、頭を伏せたままとうとう彩はぼつりと話し始めた。

「バレンタインは何がいいって。いつも迷惑かけてるから。言おうと思った」

だから、仕方ないから未樹ちゃんの彼氏に聞いたの。未樹ちゃんは友達のおの子の名前か。はは、馬鹿だなやっぱり俺は。無駄で無意味な嫉妬だったってわけだ。

「愛想のないのも自分で分かってるし、翔太が本当は優しいってことも、分かってる。いつも、

私の歩く速さに合わせてくれてるでしょ？」

「まあ、それは」

いざ言われると照れくさいが。意識的にそうはしていた。だって歩調を合わせて歩いていけば、小さい頃から後ろに隠れていた女の子を守っていけると思ったから。

「でもね、」

きゅっと彩の腕に力がこもる。体がなおさら密着する。

「嬉しかったけど、嫌だったの。だってそれは、対等じゃないってことでしょ？」

「そんなつもりは、」

全然、ねえよ。続けようとして、でも確かに気を使っていたのだから対等じゃないとも言える、んだらうか、という思考が口を閉ざさせる。両腕はまだ彩に答えない。

「私は、翔太の隣がいい。後ろじゃなくて、守られたりするんじゃないって」

そうか。そうなんだ。同じことだった。思っていることも、互いに想っていることも。三か月というほんのわずかな期間が、どうしても大きな障害になっていた。学年が上になった俺は妙な年上意識と独占欲を抱くようになり、下になった彩は劣等感と羨望をもつようになったんだらう。それが壁になっていったんだ。ちょっとだけ避けるようになって、でも離れたくない、そんな距離があったのだ。だから本当はとても簡単で、作られるべきは壁なんかじゃない。

「なあ、それなら、」

「うん」

腕を下ろす。細い肩に触れる。抱き締めると彩は小さな声でうん、と繰り返す。

「これからも、よろしくな。その、恋人として」

「うん、……翔太、好き」

重なっていた頬を離して、互いにしっかり見つめ合う。彩がこちらを向いたまま、瞳を、閉じた。

キスだよな、こういうとき。いいんだよな、彩。声に出さずに目くばせで確認する。できるかできないかなんて関係ない。眼は口ほどに物を言うって、瞼が落ちてても有効だと思う。

あと10センチ。俺は眼を瞑った。微かな吐息があったかい。あったかくてくすぐったい。やべえ良い匂いがする。やばいくらいの好い香りだ。くらくらして、考えてなんかいらんない。きつと柔らかいんだらうな、もうそろそろ……なんて思っていると、チュッ、と微かな音がして、頬を柔らかい感触が擦った。

「え……」

思わず右手で頬を触る。見れば彩がにかにか笑っている。あれ、目え瞑ってなかったか？

「10センチも先から目を閉じてるヤツなんて聞いたこともないよ、翔太」

あっけにとられて動けない俺の手を彩は強引に下ろさせると、そのままぐいと引っ張った。

「おまっ……」

訴えようと開けた口を塞がれて、頭が真っ白になっている俺を見て、彩は「チョコレートは上手く作れなかったから」とわけのわからない理由でもう一度キスをしてきた。

全く反応できない俺に、べっ、と小さく舌を出して一言。

「ばあか」

そりゃねえよ、コノヤロウ。

家に帰って渡された袋を開けると、ハート型に見えなくもない何か黒と茶色の中間の色をしたぎりぎりチョコみたいな物体の脇に、薄いピンクでハートの模様が入られたカードが入っていた。本命。丸っこい字でちっちゃく書かれたあいつの字に思わず頬がゆるんだまま、この何か激しい物体をどうしようか思案した。いや食べよう。食べるべきだ。あの不器用な彩が作ってくれたんだから。

「だけど食べんのかなあ、これ」

ええい、ままよ。明日俺が死んだらお前のせいだ。覚悟を決めて一粒取って口の中に放り込んだ。

「にが甘っ、なんだこら」

焦げてる部分はやたらめったら苦いくせに、中身は甘すぎて甘すぎて甘すぎて甘すぎた。全く、こんなん食わせるんじゃねえよ、ばあか。

Fin.

*

知らないでしょ。

あなたは知らないでしょ。

最初は同情だった。かわいそうって。それだけ。

でも、ね。

夜空を見上げるあなたを見て、星の光に感激するあなたを見て、分かったの。

ああ、私が欲しかった光は、あなたの瞳の中にあるんだって。

あなたを見つめれば、そこにちゃんと、私が映るんだって。

*

とつぜん、ママが女の子をつれてきた。なかよくやりなさい、と言ってママはへやを出てしまう。

「きみはおんなのこなの？」

たぶんそうなんだろうけど、ぼくはままいがいの女の子を見たことがなかったのだ。女の子はすたすたあるいてくる。ぼくのへやは白くてひろい。ママがぶれぜんとしてくれたおもちゃとかえ本とかがいっぱいあって、女の子はおもちゃばこにこしかけた。しつもんにかたえてはくれないみたいだ。ぼくをじっとみつめてくる。

ぼくはこの大きなへやにすんでいる。ママがそうしなさいって言ったから。おそとはとってもこわいところだってママが言った。ぼくのへやにはまどもない。え本にかかれたおうちには、みんなかわいいまどがあって、へやのなかからでもそとが見えるようになっているみたいなんだけど。

ママはたべものをもってきた。

「はんば一ぐ？」

ママはやさしくそうよって言うてくれる。はんば一ぐはぼくのだいすきなたべものだ。そのほかにも、ぐらたんとか、ぴぎとか、あとたまごやきもすきだけど、はんば一ぐにはかなわない。

「たべようよ。ママのつくってくれたごはんはおいしいんだ」

だまりこくった女の子にこえをかけたけど、おんなのこはまたへんじをしなかった。でもはんば一ぐはたべたいみたいで、ちっちゃなて一ぶるのそばにちょこんとすわった。ママとぼくいがいのはじめての人だ。

「いただきまーす」

ぼくはないふとふおーくをつかってはんば一ぐをきっていく。そうしないとママがおこる。ほんとはすぷーんのほうがつかいやすいんだけど。ママはいつもはやさしいのに、ぼくがママのいいつけをまもらないときはちょっとこわい。ぼくはママのそんなかおが見たくないから、ママの言うことをすなおにきくようにしている。そうすると、いいこねってほめてくれるから。そとのせかいを見てみたいきもするけれど、ママがかなしむからやらないことにした。だってママがいれ

ばじゅうぶんだもの。

女の子ははんば一ぐをはんぶんのこしてしまった。いつものままならぼくがたべものをのこすとおこるんだけど、きょうはぜんぜんおころうとしない。

「いらないの？」

おんなのこはうなづいた。しゃべれないのかな。すっとおさらをぼくのほうにさしだしてくる。たべてってことなのかな。ぼくはままのほうをみた。ままはやさしくうなづいてくれた。

「はんば一ぐおいしいのに」

いつもよりいっぱいはんば一ぐをたべられるのはうれしかったけど、おんなのこがなんだかちょっとかわいそうだった。だってぼくはいつかはんぶんもたべられるのに、おんなのこははんぶんしかたべられないのだ。ままもときどきぼくよりすくないりょうしかたべない。女の子ってふしぎだ。

ゆうはんがおわると、ままはいつものようにおでこにきすしたあと、どあのかぎをしめて出て行ってしまった。ままはいつからかいっしょにねてくれない。ままといっしょだとあったかくてやわらかくてきもちいいのにな。

そでをひっぱられたのでふりむくと、おんなのこがえ本をもっていた。こんなえ本あったかな。見たことないや。

「それ、よみたいの？」

女の子はこくりとうなづく。ままとちがってせがちっちゃくて、ままとちがってむねのあたりとかがやわらかそうじゃない。でも女の子はなんだかちょっとかわいかった。え本にでてくるこりすとかこぐまとかこねことかみたいだ。

「よんであげるよ」

おいで、とてまねきしたら、女の子はすなおについてきた。そふあーはちょっとふたりだとせまい。ぼくは女の子をひざの上にのせた。女の子はなんだかきゃーきゃーさわいでじたばたしていたけど、うしろからだきしめてあげたらおとなしくなった。やっぱりままはすごい。ぼくに本をよんでくれたときみたいにただけなんだけど。

「よむよ？」

女の子はうなづいた。女の子はちっちゃい。つよいちからをいれてぎゅってしたら、たぶんぼくは女の子をそっくりだきしめてしまえるだろう。

「あらいぐまのまーる」

女の子はなんだかちょっといいにおいだ。ままとはちがう。ままのはちょっとさっぱり。女の子のはちょっとあまい。あまくってくすぐったい。ままのにおいがいちばんだと思っていたけど、この子のおいもなかなかすきだ。と言っても僕はままのにおいくらいしか女のひとのにおいなんてしらなかつたけど。

「まーるはあらいぐまのこどもです。おとうさんとおかさんといっしょに、木のほらあなでくらししています」

女の子がページをめくった。

「ある日、まーるはいつものようにおるすばんをしていました。ままとぱぱはおでかけです。ま

「一るは言いました。はやくかえってこないかな」

え本のなかではま一るがまどのそとを見てる。ま一るはえらい。ま一るはままとばばのいいつけをももっておそとであそばないでおるすばんをしている。ぼくもそうだ。ままはいつもいいこだからおるすばんしててねってぼくに言うんだ。ぼくはいい子だから、ままのいいつけをまもっていいこでおるすばんしている。ままはかえってこないことのほうがおおいけど、かっぷら一めんだってつくれるしだいじょうぶ。ほんとはままのりょうりがたべたいんだけど、ままにしんぱいかけちゃいけないからがまんしてひとりでねむるんだ。

「ま一るはおそとを見ていました。そとはなんだかとってもあったかそうです。おひさまがま一るにはなしかけました。ぼうや、こんないいおてんきのひに、きみはどうしておへやのなかにいるんだい？」

おひさまはやさしそうなおじさんで、でんきゅうよりももっとあかるいらしいってどこかにかいてあった。ぼくはおひさまを見たことがないからわかんないけど。

「ま一るはこたえました。だって、おとうさんとおかあさんがおるすばんをしていなさいって言うんだもの。ぼくはいいこだから、おとうさんとおかあさんの言うことをきくんだ」

女の子がうしろにふりかえってぼくをみる。そんなにせかさなくたってえ本はにげないわよって、ぼくがままにおんなじことをしたときにままが言っていたっけ。

「おひさまは言いました。だけどぼうや、おそとにはおはながさいて、はらっぱはおふとんみたいにきもちいいし、かぜはやさしくうたっているよ。おうちのまわりなら、きみのおとうさんとおかあさんだってゆるしてくれると思うけどなあ」

「ま一るは言いました。でも、おそとはおぶないんだ。きつねやおおかみがぼくたちをねらっているのよっておとうさんとおかあさんが言ってたよ。とってもこわいんだって」

「でもね、ぼうや。おひさまは言いました。かれらはわたしがこうしてそらにのぼっているあいだはねているんだよ。ちょっとかおをだしてごらん。そうすればきみもそとのすばらしさがわかると思うんだけどなあ」

「そうかもしれない。ま一るは思いました。おひさまはこんなにもやさしくてやわらかくてあったかい。おそとはもっとすごいんだ。ま一るはとうとうほらあなからかおを出しました」

「すると、なんということでしょう。おひさまの言うとおりに、そとはぽかぽかできもちがよくて、おはなはきれいでいいかおりだし、はらっぱはちょっとくすぐったくておもわずごろごろとねっころがりたくなるほどなのです。ま一るはとびだしました。かぜはそよそよとうたっています。とりがそれにあわせてうたいます。むしはたのしそうにおどっています。くもはながれてきもちよさそうで、おひさまはとってもえがおなのです」

そうなのかな。おそとってそんなにいいんだらうか。ままはいつもおそとはとってもこわいのよって言っている。ままがぼくをそだてるためにこわいおそとにいつていると思うとぼくはなんだかちょっとうれしい。だけど、しんぱい。

「ぼうや、これでわかったかい？ ほうら、おそとはいいてんきだらう？」

「うん。とってもたのしいよ。ま一るはもうおそとにむちゅうです。ま一るのうれしそうなかおをみて、おひさままでうれしそうでした。ま一るはちょうちょをおいかけたり、かぜのおんがく

をきいたりしながらとつてもきもちよくすごしました。おとうさんとおかあさんはまだかえってきません」

ほんとうのことを言うと、ぼくはちょっとだけおそとに出たい。ちょっとだけだよ。きらきらひかるおほしさまとか、あったかくてまぶしいおひさまとか、かたちをかえるくもとか、木とかはなとかむしとかみてみたい。だけど、ままがしんぱいする。ままがしんぱいすることは、ぼくはしない。

「そのときです。にしのほうからまっくろなくもがもわもわこっちにしのびよってきます。まーるはおどろきました。さっきまであんなにたのしそうにおどっていたむしも、うたっていたとりもおおいそぎでかえってしまいました。かぜはさっきまでとはぜんぜんちがって、おこっているみたいにびゅうびゅうふいています。おひさまにまっくろなくもがかかりました。まーるはこわくなっておひさまに言いました」

「ねえ、おひさま。さっきまではあんなにぽかぽかたのしかったのに、どうしてみんなきゅうにこわくなってしまったの？」

「おひさまはくもにかくされそうになりながら、あわててまーるに言いました。ぼうや、あらしがやってくる。あらしはとつてもこわいやつだ。ぼうやもおうちへおかえりなさい。きっとおかあさんとおとうさんがしんぱいしているよ」

「でもおひさま、おうちはどこなの？ まーるがぼつりつつぶやいたときには、おひさまはもうくものうしろにかくれてしまっていました。まーるはこわくなってはしります。おうちはどこだかわかりません」

ぼくはちよつとこわくなってきた。まーるはわるいこだ。きっとままとぱぱがしんぱいしている。ぼくはまましはいないけど、おんなじことをしたらままはきっとかなしむだろう。だからどんなにしたくたつて、ぼくはしないときめたんだ。

「びゅう、びゅう。かぜはまーるをおしのけてゆきます。あめがざあざあふってきました。あたりはまっくらです。おかーさん、おとーさん。まーるは泣いてしまいました」

女の子がこっちをじつとみている。きっと女の子もこわくなってきたんだ。ぼくは女の子をちよつとずらしてもつとくつつけるようにした。くつついているとあったかい。あったかいとあんしんする。女の子のかみのけが、ぼくのはなをくすぐった。なんだかちよつときもちいい。これならぼくもこわくない。

「まーるはなきながらあるきます。いちどでもあしをとめたら、もううごけなくなってしまいそうです」

女の子はまだぼくのほうを見ている。なんでえ本のほうをみないんだらう。ぼくのかおになにかついているのかな。ごはんつぶとかだつたらままがきづいてとつてくれるんだけど。

「なにかへんかな？」

ぼくはえ本をひらいたままきいてみた。女の子はじいっとこっちを見つめたまま、しっかりとうなづいた。

「なにがへんかな？」

ぼくってそんなにへんなんだらうか。それならとつてもしんぱいだ。へんな子とわかつたらまま

にきらわれるかもしれない。

女の子は右手のひとさしゆびをすっとぼくのほうへむけ、たっぷりさんびょうはそのまままったあと、すっとおろしてひらきっぱなしのえ本をゆびさした。

「ぼくはまーるじゃないよ。だって、ぼくはいつけをやぶったりしないもの。ほんとだよ」
女の子はちょっとくびをかしげたあと、え本をさしていたゆびをてんじょうにむけた。しんじてくれたのかな。

「あれがきになるの？」

女の子はうなずいた。

「ああ、あれはおほしさまだよ。ママがふれぜんとしてくれたんだ。おほしさまってきれいだよね」

女の子はくびをよこにふった。

「どうしたの？」

女の子のくちびるがかすかにふるえた。なにかを言おうとしているみたい。しゃべれないわけじゃなかったみたいだ。

「、がう……」

なんだろう。なんて言おうとしているんだろう。女の子のこえはちっちゃくて、まるでじゅうねんぶりくらいにこえをだしたみたいなこえだ。かすれててなにを言ってるのかわからない。ぼくは女の子のくちもとへみみをよせた。

「違う」

「ちがうって、なにが？」

げほ、げほ、と女の子はすこしせきこんだ。ぐっとつばをのみこむおとがして、ほそいくびがぐっとうごいた。

「こんなの、星じゃないよ」

さっきのはちっちゃかったけどはっきりしていた。だけどいまのはしっかりとてた。そんなこと言ったって、ぼくはほんもののおほしさまをみたことなんてない。

「でも、ママがおほしさまよ、って」

「でも、本物の星じゃないよ」

女の子はぼくのほうをじっと見つめたあと、かぎのしめられたどあにめをやった。なんだかすっごくこわいかおで。ママもおこっているとたまにこんなかおをする。でもぼくは、なんで女の子がどあにむかっておこっているのかわからない。

「外の世界を知らないの？」

「うん」

またこっちをむいた女の子はもうおこったかおじゃなかった。よかった。おこったかおはいやなかおだ。そんなかおは、ママにもこの女の子にもしてほしくない。ぼくはしょうじきにこたえた。しょうじきはいいことなんだ。うそつきはわるいこと。

「きみは知っているの？」

「うん」

女の子はとってもやさしそうなかおをしてわらった。ままとときどきわらってくれるけど、こんなにじゅんすいにやさしそうじゃない。なんだかつかれているような、あきらめているような、そんなかおでままはわらう。どうしてそんなふうにわらうのかぼくにはわからない。だけど女の子は、とってもまぶしくて、やさしいだけのえがおにみえた。

「じゃあ、おひさまも、おほしさまも、くもも木もはなもむしもかぜも、みんなみんなしているの？」

「空も、海も、山も川も生き物も……全部じゃないけど、見たことあるよ。」

「そっか」

うん。女の子はぼくのひざの上でうなずいた。こんなにちっちゃいのに、ぼくよりもいろんなことをしているんだ。ぼくはこのへやとまましかしらないけれど。

女の子はえがおのまま、ぼくにきいた。

「外の世界を見たくならない？」

「でも、ままが」

ままが言うんだ。おそとに出てはいけませんって。だからぼくはいい子でいたくて、まーるみたいに、わるい子じゃない……。

「大丈夫」

「どうして？」

いいの、だいじょうぶなの。女の子はぼくのひざからとびおりると、ぼくのみぎてをひっぱった。

「でもどあにはかぎがかかっているよ」

おそとにでようとしたこととも、ほんとはなんかいかあるけれど、いつもどあにかぎがかかっているからむりなんだ。

「大丈夫。鍵は外れるよ」

ほんとうかな。おこられたりしないかな。ぼくがおそとにでたってしたら、ままはなんておもうだろう。

「大丈夫。私も一緒にいてあげる」

ぼくがこわがってるのがばれたのか、女の子はそう言ってぼくのをぎゅってにぎってくれる。ぼくよりちからがなさそうなのに、ふしぎなくらいちからがあって、女の子のてはあったかくてあんしんする。

どあのまえでまっていると、かちゃり、とちいさなおとがした。ほんとうだ、かぎがはずれた。いままでこんなこと、いちどもなかったのに。ぼくはおもわず女の子のてをにぎりかえした。女の子はとくいそうにわらった。

「本物の星を見せてあげるよ」

どあをあけた。くらいけどとおくのほうにいくつものひかりがみえる。つめたいくうきがかおにつよくふきつける。そうか、よるなんだ。よかぜがふいているんだ。よるはもっとくらいとおもったけど、おもいのはかあかるくてこわくない。かぜはおもいのはかつよい。だけど、ぜんぶぜんぶここちいい。

女の子はかいだんをかけあがっていく。ぼくはひっしでついていく。なんだかとってもたかいところであって、下をのぞきこむとこわかったけど、女の子がてをはなさないでいてくれたからへいきだった。

「着いたよ！」

「うわあ！」

女の子がとまったのはおくじょうだった。てんじょうでちいさなひかりがきらきらかがやいている。

「ねえねえ、あれがほしなの？」

「そうだよ。あれが、本物の星」

「すごい……」

ぜんぜんちがう。ままがもってきてくれたものはてんじょうにはりつけるやつだったけど、ほんもののほしはかすかにてんめつして、いろもすこしずつちがう。あのほしはあかくてあかるい。あちはあおくていちばんかがやいている。まぶしくはない。おおきくもない。だけど、なんでこんなにきれいなんだろう……。

「どう？　きれいでしょ」

「すごい、すごいよ。こんなにきれいだなんて思わなかった」

「良かった。ね、座ろう」

ちょっとさむかったから、女の子とぼくはかたをよせあってすわった。そのままじっとほんもののほしをみつめる。ほんもののかぜをかんじる。ほんもののそらの下にいる。女の子がごろりとねころがった。ぼくもそうした。めのまえにはそらしかなくて、ひかりがぼくたちにふりそそいでいて、なんだかこのままそらのうえにおちていけそうだ。

「まま、おこっているかな？」

「大丈夫。怒ってないよ」

女の子がまたぎゅっとてをにぎってくれた。なんだか、それだけでぜんぶあんしんする。なんだろう、あったかいんだ。

「帰ろうか」

「……うん」

そういえばぼくは、自分のも、女の子のなまえもしらない。

「君も趣味が悪いな。十五年も息子を監禁するなんて」

「何よ、あんただって娘の面倒見れないくせに」

そうだな。男はつぶやいた。俺たちは出来損ないの親だ。接し方わからなかった。愛し方がわからなかった。笑顔どころか、声を聞くのさえ十年ぶりだ。

「同じじゃない。あんたも私も。あんたは怖くて結果的に娘から声を奪った。その上私に娘を見るですって？　あの子だけでもどうしていいか分からないのに」

「だけど君は、息子の自由を最初から許さなかった」

女は声に詰まった。怖かった。すべてを自由にできることが。そんなものを手に入れるくらい

なら、初めから産まなければよかった。全部ぜんぶ、消えてしまえばいいのに。

「子どもは親のいいなりにならないよ」

「言われなくてもわかってるわよ」

そう、分かっていた。女は馬鹿でない。どんなに頑なに言い聞かせても、いつか子どもは自分のもとを巣立ってしまう。いつかの自分がそうだったくせに、されるとなるとひどく怖い。預けられるのも、去って行くのも嫌だなんて。

「それで、あんたの計画通りになったのかしら？」

「流石にお見通しか」

あたりまえでしょ。女は吐き捨てるように言った。あんな絵本、与えるはずないじゃない。

「私だって、このままでいいだなんて思ってなかったもの」

「そうか」

男は女に手を差し出した。女は虚ろにそれを見つめる。取ってしまおうか。取ってくれるだろうか。やり直せるだろうか。遅すぎる。だけど、

「帰ってくるかしら」

「帰ってくるさ。子どもは、親の元に」

何故だか愛情だけは、どうすればいいのかもわからないのに胸に湧き上がってくる。十五年を経た今でも。どんなに後悔しても。名前さえ、呼んであげたこともないのに。

「そうね。きっと、そうね」

女は男の手をとった。今さらだ。自分をちゃんと見てくれる人が、自分をちゃんと瞳の中に映してくれる人が、こんなに近くにいたなんて。自分は自分の子ども一人、ちゃんと見つめてやれなかったのに。

男が女の目をしっかりと見つめた。

「迎えに行こうか。ちゃんと、名前を呼んで」

「そうね、ちゃんと見つめるわ。これからは」

「ママ！」「浩哉！」

「お父さん」「美世」

おかえり。

いつか忘れられる日が、多分来るのだろう。

あの頃に戻りたいなって、何回も思い出して、思い出して、そのうちに思い出せなくなる。楽しいって感情だけ。映像なんかちっとも残らない。残るのは感情だ。感情とイメージだ。ひと粒ほどの感傷が、いつか懐かしくてたまらなくなるのだ。帰り道、自転車、夕方。遠くで響く車のエンジン。断片は鮮烈に焼き付いているのに、大事なものは何一つ描けなくなる。ひんやりとした風の匂い。ポケットに突っ込んだ掌。話声。秋が冬へ深みを増すころ。落ち葉を踏む湿った音。

隣を歩いていたはずの、制服に収まった君の右腕。

だけどもう、横顔さえまともに思い出せない。

あんなに見つめた。知ってほしいと秘めて抱き、知られぬように密かに窺い、後姿、天然パーマがかった栗色の短めの髪。制服から覗く首筋、白い項。桜色の貝のような耳。眼鏡の奥の透き通った黒い双眸。眼がぱっちりしているような気がするの、多分長かった睫毛のせい。薄い唇は仄か赤く、時折微笑んでは頬を朱に染めた。君の顔。ほのかに感じられた、レモンに似ているようなジャスミンのリップクリーム。あたたかさ。細い手首。握ると少し湿って力が入った君の指。小指だけしか握れなかった焦燥と恥ずかしさ。スカートから時折のぞく赤い膝。すらっとした足。それだけで跳ねた、締め付ける鼓動の甘さ。

僕は忘れてゆく。そういうものを、一つひとつ。

目を閉じて、瞼の裏に思い描けなくなったとき、僕は果たして泣くんだらうか。今の僕には分からない。まだ影を落とす君の姿は、時折こうして僕を揺らす。だからまだ、忘れるのは先のことになるんだらう。嬉しい。嬉しくて、いっそ辛い。

微かに笑いが込み上げてきて、声にならずに僕は大きく息を吐いた。

いつか名前さえ忘れる時が来るんだらうか。色を失くし、影を失くし、輪郭も消えうせて、名前まで忘れてしまったら、いったい何が残るのだから。過去を変えることはできない。変えたいとも思わない。だけど忘れ去られてしまうなら、僕らの日々は何のために在ったのだから。僕らはどうして出会い、惹かれ、別れたんだらうか。忘れない。忘れたくない。僕が忘れた何か大事なことを、彼女が覚えていたんだとしたら、それにどう感じればいいのか。哀しくはない。だけど、これを喜びと言うんだらうか。

藤森、綾佳。

もう会うことはない、僕の彼女だった人。

口に出してみても、何故だか涙がこみ上げた。

*

電車の扉が開いて、ホームに暖かい空気が吹き出される。冷たい冬の空気に押されて僕は三両編成一番後ろの車両に乗り込んだ。土曜日の宵の入り。人は疎らである。一番端の席に、すんと

腰を落ち着けた。目的地まで二十分。音楽でも聴いて紛らわすしかない。僕は手袋を外した。電車の中は暑すぎた。

同窓会が開かれるのは七時からだった。集合は隣街の駅ビル前。僕たちの故郷は田舎なので、二十歳になったばかりの若造が安く酒を飲めるような大手の居酒屋もターミナル駅まで来ないと一つもない。知り合いも殆どが進学や就職を機に都会の方へ移り住んでいった。中には僕のように地元にあるそこそこのレベルの大学に通っている奴や、地元企業に就職した奴、家業を継いだ奴もいるらしいが、大半以上は皆この土地を嫌って出て行ってしまっていた。無論、僕もここは好きじゃない。だけど出て行くほどの理由も勇気も気概もなかった。多分これからもそうして適当に就職して適当に生きていくんだらうと思う。

中学の同窓会をやろう、と言い出したのは鬼灯だった。こいつも居残り組みであるが、むしろここが好きで居座っている風がある。昔から自然と人の輪の中心に立つような奴で、未だに連絡もなし遠慮もなしで男の家に上がって来たりする。皆にはあたしが連絡しといたからさ。裕也、お前も来いよ。幼馴染とはいえ最近は疎遠になっていたにも関わらず、鬼灯燈花は昔とまるで変わりなく接してきた。成人式にはさ、流石に皆帰ってくるって言うからよ。次いつ逢えるかも分かんねえじゃん。あたしは思うわけよ。これじゃだめだっ、てさ。皆で一度会っとかなきゃな。せっかく一度は知り合ったんだからさ。皆じゃなきゃだめなんだよ。なあ裕也、お前も来るだらう？

鬼灯に言われて、僕は顔くしかなかった。昔からこいつには弱いのだ。小さい頃さんざんいじめられた記憶は未だに僕を猫の前のネズミにしていた。臆病は僕の爪と牙をきれいに短く削らせた。悪いやつではない。むしろ鬼灯はいいやつなのだ。小さい頃はじめて悪かった、と彼女は言った。中学に入った時だった。真新しい制服のスカートが揺れた。健康的で輝くような白い足がのぞいた。そして彼女は続けた。これからは仲良くやろう、と。昔は女ながらガキ大将だった彼女も、中学に上がる頃には立派な女の子になっていたのだった。その言葉に反して、その頃からだんだん疎遠になっていった。何でかは分からない。彼女は明るくみんなの中心にいたし、僕は隅の方で波風立てない空気のように過ごしていたので、僕から避けて行ったことは確かだったけれど。最初は気にかけてくれていた彼女も、学年が上がってクラスが変わってからは遠く向こうの人間になっていたのだ。何故かほっとしたことだけを覚えている。あの時の僕は多分、必死で安寧を欲していたんだらう。殻の中は暖かく、小さな世界には喧噪もなかった。僕は愛想笑いばかり上手くなり、その変わりに溝を深めた。無論似たような人間と少しは交友関係を持ったりもしたけれど、互いに興味を抱いてはいなかった。事実今も続いている友人はいない。人間は独りでは生きられないのだという言葉に、便宜上、という注釈が付けられた。離れて交わらず染まることもなくしていれば、自分でいられると思ったのだ。呪文のように僕は頭の中で反芻した。全ての他者を拒絶しろ、さもなくばお前はお前ではなくなる。

鬼灯と僕は対照的だった。活動的で明るく面倒見のいい彼女。消極的で根が暗く、人づきあいを避けていた僕。幼馴染とはいえ、僕らは別たれる運命だったんだらう。

そして、近づくことが運命められている人間もまた、いる。例え最終的に別れてしまうとした

って、その時の僕の物語は一人の女の子に収斂する。藤森綾佳。二年に進級し、鬼灯と疎遠になった僕の隣に座った女の子。

それ、三島？ 確か彼女の最初の言葉はこんな感じだった。そう、とだけ答えた気がする。ふうん、と彼女は言った。仮面の告白の方が私は好きだな。そっちの方がらしいもの。

潮騒よりはいいよ。

確か、そんなことを返したはずだった。いつもの如く本を読んでいた昼休みの、尋常ならざる闖入者。僕は初めて彼女を見た。栗色の髪は天然パーマというよりほかはなく、そのくせ垢ぬけた雰囲気はなくて、どことなく自分と同じ匂いがした。僕らの嗅覚は鋭い。同じ世界に住む者同士は、同じ空気を纏う者同士はかぎ分けられるのだ。何処となく怯えたような瞳も高得点だった。きっと彼女は不意に隣になった僕が、自分と同じ世界の住人だと気づいたのだろう。その洗練された嗅覚でもって。そうして気丈にも僕に話しかけた。声や態度が普通を装っていても、瞳は不安を湛えている……。普段は疑り深い、そう在ろうとしてきた僕の頭はすぐさまそんな物語を作り出した。あまりにも都合の良い妄想だった。それが真実であれ嘘であれ、要するに僕は何かんだ言ったところで一人の（不）健全な男子中学生だったのだろう。女の子に話しかけられた、嬉しい。もしかして俺に気があるのかも？ 呆れるほど単純な思考回路だ。犬だってもう少し高等なシナプスを持っているだろう。

そして困ったことに、僕の妄想は殆ど現実だった。彼女は目立つ方ではない。むしろ目立つことを嫌う。僕たちは休み時間になる度に、隣で本を読む異性の存在を感じた。そのうちに僕らは互いの本を貸し借りして、感想を言い合うようになっていた。せいぜい一ヶ月かそこらの話だ。僕は自然と彼女の姿を追うようになり、妙に目が合う回数が多いことに気づいた。

詰まる所、彼女と僕は似ていた。夏休みが終わるころには、クラスの誰にも知られることなく、窓際が一番目立たない隣り合った席には一組のカップルが誕生していた。授業中、僕らは何度か隠れて素早く小指を絡めた。羞恥と喜悦が入り混じって、僕らの指は汗ばんだ。時折僕らは筆談した。何てことはない些細な事を。昨日のテレビとか、新しく出た本とか。そしていつのことだったか、彼女が小さな丸みを帯びた字で端の方に何か書いた。今日、うちお母さん帰って来るの遅いんだ。

その日の夕方、僕らは初めてのキスをした。やけに小綺麗な彼女の部屋で、出されたレモンティーが温くなり始めた頃。ふとした沈黙の後、目を瞑る彼女に引き寄せられて。一度目は柔らかく、触れ合っただけ。二度目は少し長かった。合わさった唇からどちらのものとも知れないため息が漏れた。彼女の唇は僕の知らない味がして、微かに爽やかな香りが鼻腔を擦った。

彼女はいつもリップクリームを付けていた。すぐ乾燥しちゃうんだよね、ということらしかった。女子と男子は違うのだ。とにかく僕は僕らの相違点をそういう風に受け止めていた。

何の香り、これ。まだぼうっとした頭で僕は訊いた。ジャスミン、気に入ってるの。彼女は答えた。その時の僕は、ジャスミンというのが花の名前だということも、ジャスミンティーというものも存在することも知らなかった。ちょっとレモンみたいだ、と僕は言った。酸っぱくはないけれど、甘くもない。頬を染めたまま彼女は揃う様に言った。初めてのキスだから？

幸福だった。僕らは。閉じた世界は。雨の教室、誰もいない、君と二人きり……。周りの人間も

僕らに干渉してきたりはしなかった。恐らくは相当な噂の種だったのだろうけれど。いつしか僕らの関係は周知の事実となっており、教師までもが知っているようだった。時折何か聞いたような視線を感じた。実際に訊いてきた人間も何人かはいた。大抵僕は別に、と彼等をあしらった。隠れているつもりでも、伸びた影は所在を教える。

そして彼女は他人の視線を極度に嫌った。二年次最後の席替えでばらばらになった後、僕らの付き合いは日に日に減っていった。例え教室に二人きりでも、僕らは触れ合うことを止めた。毎日一緒に帰っていたのが三日に一回になり、その期間は一週間を経て一カ月近くまで長くなっていた。何てことはない。僕はいつも彼女の視線を感じていた。そして、僕が彼女の方を向けば彼女が目を逸らしてしまうということも。僕には彼女の葛藤が理解できなかった。女子と男子は違う。そのうち彼女も極度に恥ずかしがることはなくなるだろう。現に一緒に帰る日は、いつも彼女の家にならぬまで誰も帰ってこない日だった。

僕らの間の会話は減った。その代わり、彼女の家に行けばいつも、僕らは唇を触れ合わせた。手を握った。貴重なその時間はいつも飛ぶように過ぎ去って行った。彼女が僕の前でリップを塗る。それが別れの合図になっていた。別れ際最後のキスの合図。僕は黙って彼女に口付け、玄関で彼女の手を離し、手を振る彼女に曲がり角で一度だけ振り返って手を振り返した。

要するに、僕は何にも知らなかった。知ろうともしなかった。僕らの間の言い知れぬ溝は深くなり、愛情は飛び越える翼をいつしか僕らに与えなくなっていた。植物状態の人間が時折震えるような静けさで僕らの付き合いは続いた。実際、よく続いたものだと思う。ノートの切れ端で折った小さな手紙と一緒に帰る合図だった。そこには何も書かれていない。けどその日は、月に一度あるかないかのその日には、校門を出て一つ角を曲がったところで彼女が僕を待っているのだ。

けどその幸福は、あっさりと消え去った。

電車はゆっくりと減速していった。灰色のホームには人もまばらで、重たげに開いた扉からひゅう、と冷たい風が吹きこんだ。電車を降りる。ふう、と一つ息を吐くと、真っ白な靄となって電光掲示板のあたりに消えた。僕は再び手袋をつけた。

階段を上って改札を通る。脇のパン屋からいい匂いがする。コンビニの雑誌棚にはマフラーを付けた蓑虫がわらわら集まっている。ロータリーは針葉樹を等間隔に植えて、その間が妙に遠い。数台のタクシーが中央に並んでいる。ベンチには人影の一つもなく、通り過ぎる人も早足だ。時間はまだ早い。鬼灯もまだいない。僕は向かいの本屋に入ることにした。さっき着けた手袋をまた外す。本屋の中は気分が悪くなるほど暑苦しい。

雑誌の棚を流し見るが、目新しいものは何もない。マンガの新しいのも出ていない。何時もの通り小説の棚の前で足を止めた。新しく出た本にはたいして興味をひかれなかったが、こうして棚に並んでいる本を一つ一つ見ていく過程が楽しいのだ。大抵はそのまま何も買わずに帰るのだが、琴線に触れる題名の本があるとつい衝動買いしてしまう。つまり僕は本から離れることなんてできないのだ。たとえどんなに悲しい記憶が思い出されとしても、何を見つけてしまっても。僕らはたくさんの本を貸し借りした、互いに知らないお互いのことを知って行くように貪欲に。

彼女が薦めてくれただけでその本を好きになった。陳腐な恋愛の話だって、自分達の姿と重ねては、やっぱり一つのかげがえのない物語なんだと思ったものだ。そうして感動的な恋愛に憧れた。だけど僕らには、僕にも彼女にも、いろいろなものが足りなさ過ぎたんだ。小説の主人公のように我慢強くはなかった。彼等のように純粹ではなかった。心強くあることもできなかった。思い続けていくことだって、僕には無理だったのだ。僕らは小説の登場人物を落第した、ただただ寂しい筋書きだけを後に残して。本を返すまでの期間が長くなったのはいつのことだったろうか。会ってちゃんと手渡さずに、下駄箱にビニール袋にくるんで渡すようになったのはいつのことだったろうか。いつの間に視線を追いかけなくなったのだろうか。そしていつのまに、僕らは全ての接点を失ったのだろう。

一冊の本を手を取った。ぱらぱらとページを繰って行く。退廃的な恋愛の話らしかった。僕は本を本棚に戻した。物語られる恋愛に僕はもうそれほど興味を惹かれない。いつの間にか僕は恋愛について語る言葉を失くしてしまったのだ。あるのはただ惨めなまでに頭を掠める一つの名前への後悔だけ。今はもう残酷な思い出の、そのくせ柔らかな色合い。それでいて尚期待を捨てない浅はかな心。ああそう、たとえば今だって。

同窓会に彼女は来るだろうか？ 話すことは叶うだろうか？

来ても来なくても僕はもう二度と同窓会に出ようとは思わないだろうと思いながら、僕は本屋を後にした。

*

考える。例え藤森綾佳が今日の同窓会に来たとしても、いったい僕はどうするというんだろうか。僕は彼女に伝えられるような想いを持っているんだろうか。どんな顔をして相対すればいいというんだ。結局は捨てた男、彼女からしてみればそれだけでしかない人間が、彼女に向けてなんて声をかけるって？ それはあんまりにも残虐だ。僕だってそう思われるのは本意じゃないけれど、恐らく彼女からしたら裏切ったのは僕なんだ。確かにそうだ、僕は彼女を裏切った。想い続けることが出来なかった。信じることも出来なかった。待っていることも、迎えに行くことも出来なかった。少女じみた期待を抱き、失望し、君を困惑させ、結局は自分を守ることしかしなかった。一時は叶った想い、しかし離れ、いつしか想うことさえもやめた。そんな奴に会いたいと思うだろうか。

だけど、と都合よくこの頭は考える。

だけど彼女だって、何もしようとはしなかった。視線さえもくれなくなったのは彼女の方だ。おはようとかじゃあねとか、クラスメイトであればごく普通に交わすようなあいさつでさえ躊躇ったのは彼女だ。そうやって避けられていたら僕みたいな人間にはどうすることもできるはずがない。自らは近づかないのが美学であり、離れるものを追わないのが矜持だった僕のような人間には。それを自衛の手段と決めた僕には、僕を壊してまで君の後を追うことなんて許されない。もちろん、そんな勇気もないということだけど。

嘘だ、と記憶が告発した。この男は嘘をついています。許されなかったわけではありません。

そして、この男は彼女を迫りました。惨めに、不格好に、哀れなまでにこの男は藤森綾佳を求めたのです。それも最低なやり方で。

嗚呼、そうだ。他の誰をも欺けても、自分の記憶にまで白々しい虚偽を持って籠絡することはできまい。懺悔を許されるならば答えたい。僕はあの時どうしようもなく子供だったのだと。自分のことしか頭になく、彼女の気持ちなど考えているつもりでちっとも考慮していなかったのだ。僕は舞い上がっていた。たかだか十年ちょっとしか生きていない人間同士の間に生まれたもの珍しさに過度の信頼と期待をしていた。僕らは来てほしいと願う感情に恋と名づけ、求め合う感情には愛と名付けたのだ。そうするだけで僕らのつながりは永遠不変のものに思われた。決して消えない、間違っても壊れない、確かに二人だけに見える小指を繋ぐ赤い糸。なんて馬鹿らしい妄想だ。子供じみているにも程がある。ああ今ですら僕は知らない。愛とは何なのだ？ そこらに流れる陳腐な歌を無邪気に歌うことはもう出来ない。そして、そして彼女は？ 彼女は何かを感じ、何を思ったのだろうか。どんな物語を彼女は抱えていたのだろうか。

結局のところ僕はもう、彼女に愛情など抱いていないのかも知れなかった。あるのは不甲斐なかった自分への後悔だけで、つまり自分に都合の良いように謝りたいだけなのかもしれない。たとえ彼女が来たとしても、たとえ話をすることが出来たとしても、僕は結局彼女を傷つけるだけなのかもしれない。彼女を思いやった言葉をかけられるとは思えない。彼女の気持ちなんて未だに分からないのだから。色々な予想を巡らせては痛みを深くしたり悲しみを薄らいだり彼女の気持ちを理解した気になったりしたけれど、それは独りよがりではないのだ。

だけどそれでも、と傲慢なこの心は考える。

だけどそれでも、互いに傷を深めあうだけのことだとしても、僕が彼女を今以上に侮辱するだけだとしても、どうしても会いたくて、どうしても話がしたいのだ。そうでなければ同窓会なんかに出ようとは思わない。鬼灯に言われたのはきっかけだ。逆らおうとすればあいつは悟ってくれたろう。それは甘えた考えだろうが、あいつにそれが分からないはずもない。あいつは押しの強い女だが他人の気持ちを押し量ることは息を吸うようにできる奴だ。さもなければずっとリーダーシップを取り続けていくことなんてできないのだから。行かないと言えど訳を聞いたろう。だが訳を聞けばあいつは引き下がったろう。会って話さないとダメだと考え一度は説得を試みようとしても。

だからつまり、僕は一人の女の子だけが目的なのだ。会えたなら話もできよう。会えなければ諦めることが出来るんだと思う。忘れられるようになるだろうか。後悔が詰まったままでは思い出が重たく僕の頭を押しつぶしていく。僕はそれに耐えられない。楽になりたいのだ、結局は。蒙昧な空想よりも真実を、曖昧なままよりもいっそ嫌われた方が楽になるには違いない。むしろ嫌われていた方がいい。万に一つ、と僕は夢想する。万に一つ彼女がまだ僕のことを想っているとしたら？ そんなことはありえない、と厭世にくたびれた感情が言う。いやその可能性だって否定できないと記憶は告げる。理性は判断を下さない。傲慢に思い込みの激しい方が生きていくには楽なのかもしれない。何にせよ彼女が僕をまだ想っているとしたら僕はどうすべきなんだろう。今最早君のことなど愛してはいないと告げるのか。実は僕もなのだというのだろうか。

実際のところ僕は単にあきらめているだけなのかもしれない。後悔だけというのは強がり、

本当は彼女とまた笑い合い手を取り付き合い続けたいと思っているのだろうか。彼女にまだ私は君のことが好きだよとも言われたら、やはり僕は喜んで受け入れるだろう。それは可能性の低い甘すぎる期待の上での思惟にせよ、それを考える以上はどこかで願っているのだ。嘘みたいに幸福な結末とか、馬鹿みたいな僕の悩みとか、今この思考の積み重ねがそうなるようにとどこかで僕は。

いったい本当は何を考えているんだ、と僕の悟性は詰め寄った。さっきから右往左往、落ち込んだり乙女じみた空想をしたりお前は何がしたいんだ。まとまらない自らを迷わせる思考を重ねて何になるというんだ。僕はこう答えるしかない。分からない、分からないんだ。ただきつと、彼女に会えば会えなければ、心は折り合いを付けるだろう、と。

そこでふっと理性は影有る妄想を思い出させる。

彼女は今何をしているのだろうか、と僕は何度考えたことだろう。彼女について僕はパラレルな未来をいくつも仕立て上げた。そこには僕が颯爽と登場するものもあったし、ただ心を痛めるだけのものもあった。たとえば彼女の病気とか。或いは事故やその類の不幸な結末。つまりところ彼女という存在の喪失。病床にて決して来ない昔の恋人を想い続けた少女の死ならば小説にも十分だ。最後まで彼のことを想い、それでも会えない、そんな、妄想。

嗚呼、彼女は僕をもう痛みなく思い出せるようになっているのだろうか。笑って人に話せたりするのだろうか。次の恋をしたろうか。僕はまだ彼女を懐かしむだけの思い出には出来ない。そのくせ体が時を刻むごとに映像は曖昧になっていく。顔はもう危うい。大事なところから記憶は薄らぐ。淡い線で象られたイメージ。だけど心は痛みだす。ここから見える星空は姿を変えない。だけど宇宙は膨張を続ける……。

ああもう、とにかく空しい。空しすぎるのだ。何のために、と問うてみても、答えなんか返ってくるはずもない。自分で答えを見つけられるわけでもない。だから訊きたい。彼女に、藤森綾佳に、あの日々の意味は何だったのかと。君はどう思っているのかということ。

*

同窓会に彼女は現れなかった。予想はしていた。期待も。僕は隅の方で奇特にも僕を覚えていた何人かとどうでもいい話をした。同窓会には三十人以上の人間が集まっていた。だけどその中に彼女の姿はないのだ。彼女を覚えている者は？……いるかもしれない、僕のことを覚えていた人間が何人かいたように。華やかな日常の影を飾る風景の一つとして。彼等の物語からはじきに消えてゆく、セピア色の原料として。

「そういやさ、知ってるか、藤森っていたよな？」

鬼灯のいるテーブルで誰かがそんな話をし始めた。その名前に過敏な反応を示した自分の聴覚に呆れながら、それでも僕は耳を澄ませてその先を待った。

あー、何て言うんだっけ？ 下の名前。と別の誰かが話に乗る。綾佳だよ、藤森、綾佳。と鬼灯が口を挟んだ。そうそう確かそんな名前だった、なんていうやりとりの後で、実はさ、と最初に話し出した男（生憎僕の記憶には欠片ほども彼の名前も顔も刻まれていなかった）が語り出

した。

「うちの父親ってあいつの父親と会社の同期らしいんだよな。そんでさ、ちょっと前に訊いてきたわけ。一ヵ月くらい前だったかな？ ほら、ちょうど同窓会の話が鬼灯からまわってきたあたりだよ。藤森綾佳と同級生か、って」

彼の周りの人間は新しく提供された肴でめいめいにジョッキを傾けた。興味を持っているところを見ると、彼女のことを少しは覚えているらしい。人間の記憶は意外に強かだ。どうでもいい、今この瞬間まで思い出す事のないような記憶さえやはりどこかに溜めてある。悲しみなどは尚更で、思い通りに忘れられやしない。

「俺はあんまり覚えてないんだけどさ、なんとなく名前に聞き覚えがあって卒業アルバム開いたら載ってるわけ。たぶん話したことない気がするんだよな。写真見ても何も思い出せねえし。んでき、それがどうしたんだ、って聞いたわけよ。普段滅多に話しかけてこない親父が俺に話しかけてきたからさ」

鬼灯がグラスに半分以上あったお酒を一気に空けた。ちら、とこっちを見てすぐに視線を逸らしてしまう。ああ、やっぱりわかったか。その名前が出てくれば僕が反応するだなんてことは。視線を感じる必要もない。あいつなら簡単に分かるだろう。気にしてくれる必要なんてないのに。はらはらする必要がどこにあるんだ、どうせ大したことじゃないんだろう？ そう、そんなことは分かり切っている。だからはらはらしている必要なんてこれっぽっちもない。だけど何故か胸騒ぎは収まらない。何度か考えた彼女の行く末。いや、それは末路と言い換えてもいい。悲観的で自虐的な僕の頭は思考する、彼女の結末を。男が口を開きかける。その口から言葉が銃弾のように僕を穿つ強迫的な圧力を感じる。末路。言うな。お願いだ、言わないでくれ。予感はしていた。馬鹿な妄想だと思い込ませて何度涙を飲んだと思う？ だから止めてくれ、お願いだ、違っていてくれ。

しかし男は平然とその続きを口にした。

「あいつさ、なんか死んだらしいよ。家族葬でこないだ葬式あったんだってさ。お前ら知ってたか？」

ずどん、と心臓が跳ね上がった。いや知らねえな、と誰かが言った。俺も俺もと声が上がる。僕はそれどころじゃなかった。たいして彼女と仲のよくもなかった女子が、言ってくれれば私も行ったのに、などと言いだす。想像していたパラレルな未来の中でも最悪の部類に入る結末だ。会うことも、話すことも、何かを訊くことも謝ることももう許されないだなんて。

「おい、そんな暗い話すんなよ」

鬼灯がそいつに言った。周りの奴も同調する。お前な、最初の同窓会の席でそういう沈む話しなくたっていいだろうが。ちなみに事故らしいぜ、と揶揄するようにその男が付け足した。おい野口、いい加減にしろ。鬼灯が声を荒げた。お前人の不幸を笑って言えるような奴だったのかよ、いや悪い、一応言っておこうと思ってな。野口と呼ばれた男が言い訳した。僕はそいつが僕の方を一瞬覗き見したような気がした。それにほら、そこまで聞いたら死因とか気になる奴だっているだろう？

確かに、そうだ。そういう奴はいる。鬼灯がまだ何か野口にまくし立てていたがもう僕の耳に

は入らない。藤森が事故で死んだ。頭にあるのはそれだけだった。僕は何にも知らなかった。自分が進んで交友関係を広げようとしなかったことが今さら悔やまれた。しかし彼女の死を知っていたらどうしたというんだ？ 何の面下げて通夜や葬儀に行けるんだ。最後に同じクラスだったわけでもない、それで彼女の死に目に会わせて下さいと言うなんて滑稽だ。彼女の両親だって、一度同じクラスだっただけの男なんぞに出しゃばられてもいい思いはしないだろう。まして僕は彼女をさんざん悲しませたような奴だ。恨まれこそすれ、感謝されるとは思えない。藤森綾佳のことだから、両親に僕の話を話したりはしていないだろう。それに何より、彼女が眠る棺桶の前で彼女が微笑む遺影の前でどんな顔をすればいいかなんて僕にはさっぱり分かりそうにないのだ。

だけどそんなことよりも僕を戸惑わせたのは、彼女の死を知った今、僕の頬を何の雫も流れ落ちていないという事実の方だった。目元がじわりと熱くもならない。瞬きを二三度してみた。瞳はむしろ乾いていた。自分はこんなにも無感動な人間だったのか。いつからだ、どうして僕は、好きだった女の子の喪失にも心を潤ませないような奴になったのだ。

藤森綾佳、小さく名前を読んでみる。切なさは変わらず胸を締め付けるのに、彼女にもう会うことは絶対になかないのだと言うのにも関わらず、湧きあがるのは涙ではなく淋しさだった。言いやうのない寂しさ。その代わりに思い出したのは、あの日、中学最後の日、さよならとも言わずに付き合いが消えてしまった彼女と僕の間をきっぱり諦めようとした時のことだった。僕が彼女の後姿をちゃんと見た最後の日。そして彼女の影を追うことをやめてしまった日のことだ。

自然消滅なんてのはありふれた恋の結末で、だけど何も解決されないままに離れていくあのやりきれなさに僕は耐えることが出来なかった。それを中学生の僕は彼女へ一方的な手紙を出すことで解消しようとした。飾り気のないノートの端。筆談が始めのコミュニケーションだった僕らにはちょうどいい終わり方だと思ったのだ。あまりにも子供じみた独りよがり。手紙にはもちろん気持は込めた。精一杯の。だけどそれは強い愛情ではなかった。僕はもうあなたのことを諦めましたということを、綺麗な言葉で包み隠して切り捨てただけだった。僕はそれをそっと彼女の靴の中に入れた。卒業式の日のことだった。

僕が彼女を諦めた日。あの時の淋しさは今もまだ胸にある。愛情は薄れてしまった。いたわりの気持ちは、ない。それでも思い出は美しかった僕らの姿を再現する。僕はそれを何度も思い出す。彼女の声を、彼女の唇を。彼女の香りを。あの心地よい鼓動の高鳴りを。浅ましくも惨めにも、僕は彼女に固執したまま何にも出来ず藻のように海を漂い落ちているだけなのだ。

僕はただ孤独の慰みに、自分の大事なはずの思い出を売っているだけなのかもしれない。

鬼灯のテーブルはもう別の話をし始めている。誰ももう彼女のことなど忘れてしまった。眼の前にあったグラスを一気に空けた。僕はもう全てのことがどうでもよくなっていた。

*

分かれ道が来るごとに、僕らは手を振って別れを惜しんだ。じゃあね、すぐ今日会うけどな。

今回来れなかった奴らも呼んでまたやろうぜ。鬼灯はいちいちそんなことを言った。最初は三十人以上で連れだって歩いていたのに、ひとりまたひとりとそれぞれの家路について行った。僕は一言もしゃべらずに、形だけのさよならを繰り返した。

最後の集団と別れ、僕と鬼灯の二人だけになった。僕らは一番家が遠い。僕よりも鬼灯の方が少し歩かなければならないけれど。

結局飲み会の後は強引に鬼灯に連れられてカラオケに行ったのだった。徹夜明けの変に覚醒した頭に冬の寒さは刺さるようだ。明け方の畔道は暗く湿っている。冷たい空気に追われて僕も鬼灯も口を閉ざした。僕らは並んで歩きながら、互いに自分のポケットに手を突っ込み、マフラーの中に口までうずめた。鬼灯は喋らない。僕の方はそんな気も持ち合わせていない。

「あたしはさ、裕也のことが好きだったよ」

道半ばまで来たころ、俯いたまま唐突に、ぼつりと鬼灯が呟いた。僕は黙って次の言葉を待った。鬼灯は明け方の空を仰ぎ見た。暁はまだ遠い。オリオンが西の空に沈みかかる。

あたしらさ、小さい頃はずっと一緒にいただろ。鬼灯はぼつぼつ話し始めた。まあさ、いじめただけだって言われるのは分かってんだけどさ。振り向いて鬼灯の顔を見たかったけれど、影になって表情を覗くことはできなかった。鬼灯はこちらを見ない。なんていうかさ、あたしは思ってたわけよ。裕也はずっとあたしの傍にいるんだろうな、ってさ。

幼馴染ってそんなもんだらう？ 鬼灯は一瞬だけこちらを見やった。確かに、小さい頃の僕は鬼灯にからかわられていたけれど、それでも鬼灯と一緒にいるものだと思っていた。向こうの親にもよく言われたものだ。ねえ裕也君、うちのじゃじゃ馬娘嫁にもらってくれないかしら。最後にそんなことを言われたのはいったい何年前のことだったらうか。いつの間にか互いに家に行かなくなった。まあ、たまに鬼灯のお母さんが仕事で遅くなるような時は彼女がうちに来たりはしていたけれど。

だからさ、思ったんだ。鬼灯はまたこっちを見ない。あたしは何やってたんだらうなって。裕也と藤森綾佳が付き合いだした時に、あたしの役目はもうないのかな、裕也にはあたしが必要じゃないのかな、ってさ。

嫉妬、してたんだ。鬼灯は明るく言い放った。あんまりにもさっぱり言い捨てるのが、逆に彼女の方を見られなくした。泣いているのか聞こうかと思った。だけどそれは出来ない。

なんでこうなっちゃったんだらうねえ。彼女は明るいまま話を続けた。あたしだって考えちゃうよ。裕也があの子と出会わなかったら、いや、あたしと裕也が出会わなかったらなあ、とかさ。考えてもしょうがないことだってのは分かってるんだ。でも、そういうもんじゃないだらう？

考えちゃうよなあ。

何も答えられなかった。僕だって何度も考えた。藤森綾佳と出会わなければ、僕は痛みを抱えずにすんだんだらうか。

でもさ、結局同じことなんだよな。

鬼灯がこっちを見た。彼女の目尻に光るものはなかった。怖いほど素直な眼差しで、つられて見つめた僕は一瞬で視線から逃げ出した。

同じことなんだよ、裕也。鬼灯は強い口調で語り出す。強い眼差しで。結局さ、誰に会お

うと、出会わなかりょうと、同じことなんだ。お前は独りでも生きていけると思っているかもしれない。だけど現実、誰にも出会わず誰ともこうして隣を歩かずに生きてる奴なんていないんだよ。無理なんだ。あたしたちは傷付かずに生きていけない。触れ合わずに生きていけない。恋だって、しなくちゃ生きていけないんだよ。

たとえ叶わなくても、叶ったのに別れてしまうのでも、それは不可避で、必要で、無意味なものなんかじゃないんだ。

おい、こっち見ろよ。ぐいっと頬に手を伸ばしてきて鬼灯は無理やり僕の顔を向けさせた。食い入るようにじいっと見つめてくる。裕也。彼女は呟いた。裕也、分かってんだろ。分かってくれよ、裕也……。

鬼灯と僕の顔は今とても近かった。キスしたらこいつはなんて言うだろう、なんていう場違いな疑問が浮かび上がった。もし藤森綾佳とではなくこいつと付き合っていたら。藤森綾佳と別れた後、鬼灯燈花の眼差しに気付いていたら。僕はどうなっていたんだろうか。彼女との思い出にこんなに固執することなく、鬼灯と幸せになれたのだろうか。だけどそう簡単に、忘れることなんてできない。忘れないこともまたできない。忘れたくても記憶は窓の光と映り、覚えていたくてもいつしか遠き星の光となってしまう。星に手は届かない。星と知っていればこそ、僕らはそれを愛おしむのだ。

分かってるよ。分かってる。僕は鬼灯の手を払った。お前に言われなくたって、そんなこと十分知ってるよ。言葉の割に僕の語勢は冷めていた。そのくせ傲慢だった。何なんだよ。何が言いたいんだよ。お前が俺の事を好きだったってことは分かった。でもだからって俺と彼女のことに口出ししないでくれよ。

「いや、お前は全然分かってないね」

鬼灯は強い瞳で僕を見つめた。

「お前は何にも知らないんだ、裕也。あたしのことも、藤森綾佳のことも、何一つ」

どうということだ、反射的に口から零れた。お前にどうしてそんなことが分かる？ 言われる筋合いなんざない。

鬼灯はここにきて目を泳がせて躊躇の色を見せた。

「言えよ」

思わず語調が強くなる。相手が鬼灯ということもある。だけど僕は、自分がこんなにも冷静さを失っていることに、そのくせ激昂しつつもやはり自分の感情さえ斜めから冷たく見放せる自分に、軽い絶望を覚えそうな驚きを抱いた。彼女の死を知った時は涙のひと粒も出なかったくせに、自分が詰られたとしたらこの心は激昂する。

鬼灯は唇を噛みながらこちらを見る。

「あたしはさ、お前に隠してることがあるんだ。言わなきゃいけないことが、まだあるんだよ」

何だよ、と怒り気味な声で僕は続きを迫った。

「知ってたんだ。藤森綾佳が死んだこと」

え、と驚きが思わず音を上げた。

「通夜にも行ってきた。家族葬だっていうのに無理言ってさ。あの子にもいちど会っておきたか

ったんだ、あたしは。お前に何も言わなくて悪かった。反省してるよ。でも、裕也だけには教えたくなかったんだ」

どういう、ことだ。喉を絞ったような音がやっとのことで口から出ていく。

「だって、自分が好きな人が、他の人のことを想い続けてるなんて耐えられないだろ」

鬼灯の眼は潤んでいた。

「裕也は知らないかもしれないけど、三年の最後の方、あたしと藤森は仲が良かったんだ。まあ、あたしの方から近づいたんだけどな。クラスは違ったけど、あたしたちは二人で遊んだりもしたよ。あの子の家に行ったこともある」

暴かれていく僕の知らない事実。彼女たちの視点。僕はまだ何も言えない。

「最初はさ、軽い気持ちだったんだ。裕也が好きになった女の子ってのはどんな奴なのかな、ってさ。でも話していくうちに、だんだんあたしは惨めになっていってる気がしてた。裕也は意外に思うかもしれないけど、あたしはすごい気を使って生きてきたんだよ。クラスのためとか、それが当たり前だとか。あたしは自惚れてたんだ。正義漢気取ってさ、まああたしは女だけど、リーダーシップ発揮して、自分が先導すれば全部うまくやれると思ってた。心のどっかでな」

「そんなこと」

はない、鬼灯はいつだって正しかった、皆のためを思って行動する、いいことじゃないか、僕には絶対に出来ない芸当だ。……と言おうとして少しで止まってしまった。残りは腹の底に沈んでいく。鬼灯がこっちを見て首を横に振っていた。

「あの子はさ、裕也もだけど、何か芯があるんだよな。ふらふらしてて、全てのことから逃げていよう、それでいて何か強い信条みたいなものを持つてる。あたしにはそれがすっごく羨ましかった。他人に良い顔しないで生きてくのって相当なことだぜ。しかも女の子がさ。男のお前はまあいいよ、でも女の子の仲間意識ってのは相当なもんでさ、一度ハブかれると本当に大変なんだよ。あたしが綾佳と仲良くなっただけで友人減ったからな、あたし。まあその程度の仲だったってことなんだろうけど」

でもさ、大変だったのはそれからなんだよ。鬼灯は薄く微笑んだ。酷く悲しげに見えた。

「あたしと綾佳はかなり仲良くなった。名前呼び合う程度にさ。お前のことを考慮しても、あたしは綾佳のことを友人だと思ってたよ。そのうちあの子はお前の話をしてくれるようになった。まああたしもお前の話ばかりしたんだけどな」

そこで知ったんだ、裕也とあの子がほとんど別れたに等しい状態だ、てこと。

「綾佳はさ、自分が悪いんだってことをよく分かった。まあだからって裕也が悪くないかと言えば悪いとは思うけどな、あたしは。だけど私はそれを責められないから、ってさ。健気だったよ、あの子は。こんなことを言うとお前を苦しめるんだろうけど、あの子はずっとお前から話しかけてくれるのを待ってたんだ。見つめてれば一瞬だけでも目が合うから、とか言っちゃってさ。可愛いよな、ほんとに」

「でもさ、あたしはそれで分かっちゃったんだ。綾佳だって甘えてるって言えばそれまでだけど、あたしは何かしたっけなあって。幼馴染って関係に胡坐かいてただけじゃないか、ってさ。あたしはさ、綾佳の手伝いをすることにしたよ。綾佳には言わなかったけどな。だけどお前に直接

言うことも出来なかった。それが一番いいってことはよく分かってるんだ。でも、分かるだろ？

負けてるってわかってても、あたしの最後のプライドがそれを許さなかったんだ。三年の後半に、お前と綾佳が付き合ってたって噂がやたら流れただろ？」

僕は頷いた。一年以上話してもいない彼女との交際について何度か訊かれたのは確かに三年の後半になってからだった。お前って藤森綾佳と付き合ってたのか、と。僕はそれに笑って答えた。昔の話だよ。もういいかな？

「あれを流したのはあたしなんだ。そういう噂を流せば、お前もなんか行動してくれると思った。行動してほしいって思ったのは本当だよ。でも裏腹に、やっぱり何にもして欲しくないとも思ってたんだ。結局お前が動く気配は見えなかった。そうこうしているうちに高校受験が終わって卒業式が近付いてきた。綾佳は遠くの方の私立に受かった。ここから一番近い公立も受けたんだけど、受かったのはあたしだけだった。そしてお前。あたしは自分を恨んだよ。だってさ、嬉しかったんだよ。綾佳が落ちたことなんてどうでも良かった。受かったらいいねとは思ってたさ。友達だから。でも本当にそんなことどっかいつちゃったんだ。お前と腐れ縁が続くことの方が、あたしには何倍も大事なことだったんだ」

だから綾佳とは高校に入ってから疎遠になったよ。鬼灯は悲しそうに呟いた。

「でも、すぐにあたしは自分の醜さに気がついた。さっきも言ったろ、あたしは誰かのために行動することが正義で、正しくて格好良いことだと思ってたんだ。まあ今でも思っではいるけどな。だからその時は悩んだよ。恋ってやつがこんなにもあたしを変えていくななんて思ってた。考え方も感覚も全部変わっていつちまう。自分がそんなにも自己中心的な人間だとも思ってた。だから高校入った時にあたしはみんなを先導することを止めた。出来なかったって言うてもいい。あたしはみんなの中に混じった。楽だった。でも不思議だよな、それって全然楽しくないんだよ。毎日詰まらなかった。お前に会わせる顔もなかった。あたしは意図的にお前を避けた。なるべく視界に入らないようにした。そういう時だけ神様は優しいよな。結局あたしたちは、三年間同じクラスになることもなかった」

土手に来て鬼灯は座ろうぜ、と言った。僕は無言で鬼灯の傍に座った。鬼灯は体育座りをした。組んだ腕に顔を伏せる。僕は後ろ手で体を支えた。辺りはうっすら明るくなって来ていた。それでもまだ朝日は昇ってない。星も微かに天に見える。

「そのままでいいなんて思ってた。綾佳とも仲直りしたかったし、裕也とも昔みたいな仲に戻りたかった。でもそのまま時間は経って、いつの間にかもう成人式がすぐそばに近づいてた。あたしは何としてでも成人式の前に終わらせたかった。何でかって聞かれても答えらんないんだけどな」

だからわざわざこの日程にしたんだ、同窓会。成人式の前日に。皆も帰って来てるだろうってのも理由ではあったけど。鬼灯は組んだ腕の間から目線を覗かせた。それから光を反射しつつある川面に目をやった。

「一番にあたしは綾佳の家に行った。最初に仲直りしておきたかった。チャイムを押すと懐かしい声が出た。あたしは突っかかりながら名前を言った。すっごい緊張したよ。嫌われてても仕方がないっていうか、嫌われてると思ってたからさ。綾佳はびっくりしたみたいだったけど、あた

しを部屋に上げてくれた。両親とかはいないみたいだった」

綾佳は全然変わって無かったよ、鬼灯はまたこっちを見て言った。あの頃のまんま、ちょっと怯えるみたいに玄関開けてさ、慌ててお茶入れてきて、あたしはなんだか笑えたよ。

「ごめんって最初に言った。綾佳は何の事だかわかってないみたいだった。あたしは全部告白したよ。裕也のことがずっと好きだったってことも言った。あの子は黙って聞いていた。小動物が窺うような眼でさ。それで、同窓会の話もした。裕也もあたしが連れてくるから、綾佳にも来てくれて。あたし協力するからって。そしたらさ、あの子何て言ったと思う？」

鬼灯がこちらを窺った。頬にはやっぱり悲しげな微笑みが浮かんでいた。僕は何も言わなかった。思いつかなかった。鬼灯がまた前を見た。あの子はさ、彼女はまた話し始めた。

「もういいの、って言ったんだ。同窓会も行かないって。私はもう、大丈夫だからって」

僕は何を言えばいいんだろう。心はまだ悴んで何の振動もし出さない。思考回路まで麻痺したまま、僕は鬼灯の言葉を待った。そうすること以外、僕に出来ることはなかった。

「好きじゃなくなったのか、ってあたしは思わず訊いた。綾佳は首を振った。そうじゃないけど、ほんとはまだ好きなのかも知れないけど、もういいんだ、って。あたしは訳が分からなかった。だってそうだろう？ ずっと好きで、ずっと裕也のことを想ってて、疎遠になっても同じ学校に入りたいて頑張ってたんだぞ。そんな簡単に好きじゃなくなったり出来るわけないだろ。だから訊いたんだ、何でだよって。何でそんなこと言うんだよ、あたしのことなら気にすんなよって」

鬼灯は大きく息を吐いた。そうして同じくらい大きく息を吸い込む。何故か彼女が泣きそうな気がした。

「あの子さ、笑ったんだ。笑ったってというか、微笑んだ。それで言うんだよ。すっごい綺麗な顔してさ。本当にもういいんだ、って。立花君を好きになったことは、全然間違っただことでも無駄なことでもなかったって、思う。こうして思い出して、あの頃の気持ちが蘇る、それだけでいいんだ。忘れちゃうかもしれないけど、でも確かに、私は立花君のことが好きだったんだ、って。それだけでいいの、ってさ。まいっちゃうよなあ」

あたしは何も言えなかったよ。鬼灯は呟いた。叶わないよな、ホントに。あいつはホントに裕也のことが好きだったんだよ。

「それからすぐに綾佳が死んだ。あたしはどうしてもそれを裕也に言えなかった。薄情だよな。綾佳がそこまであたしに言ってくれたのに、あたしは結局何の協力も出来なかった」

ごめんな、と鬼灯は言った。何を言っているのか僕には分からない。正直頭の中は彼女のこと一杯だった。彼女の想い、彼女たちの想い。きっと分かったわけじゃない。だけどだからこそ僕は何も言いだせない。

「通夜に行ったとき、あたしはあの子の両親にあいさつした。中学の同級生だった鬼灯燈花です、今日は無理を言って参列させて頂いて真にありがとうございました、ってさ。そしたらあの子の母親が言うんだよ、あなたが鬼灯燈花さん、ってさ。娘がよく話してくれました、あなたのことだったんですね、今日は来てくださって本当にありがとうございました、って。お父さんもそう言ってくれた。あの子の友達になってくれてありがとう、本当にありがとう、って。泣き腫ら

した目えしてさ。あたしもまた泣けてきた。で、一応三人の涙が止まった頃、綾佳のお母さんが言ったんだ」

鬼灯がまたこっちを見た。

「それで、立花君という方もいらっしゃって下さったんですか、ってな。あたしは茫然としたよ。後悔した。自分が最低の間違いを犯したってことに。でもそんなのとは裏腹に、あたしはああ彼とは連絡が取れなくて、なんて嘘をついた。そうですか、ごめんなさいね、つい訊いてしまって。お母さんの方がすまなそうにしてたよ。綾佳が話してくれたのは、君と立花君のことだけだったから、申し訳ない、ってお父さんにも謝られた。謝ることないのにな。あたしの方なのにな、謝んなきゃいけないのは。よろしく言うておいてくださいって二人に言われたよ」

ホントにごめんな、馬鹿だったって、その時やっと痛感したよ。見ると鬼灯は静かに涙を零していた。無理やり腕でごしごし拭った。僕は今度も何をしていたのか分からなかった。

これ、裕也に。そう言って鬼灯はポケットから何か取り出した。見憶えのあるボールペンと手帳。僕があげて、彼女が気に入って使ってくれていたものだった。受け取る僕の手は震えていた。このペンで、僕らは何度も筆談した。この手帳を切り取って、僕らは密会を約束したのだ。四つ葉のクローバーが書かれた細めのペン、同じ柄の手帳。僕らの幸福、僕らの思い出、僕らの物語を紡いだ小さな大事な道具たち。

「それで、最後に伝言」

鬼灯が腫れた目でこっちをじっと見た。藤森綾佳から立花裕也に、伝えて欲しいって。ほんとは直接言わせたかったよ。頷いて僕は彼女の言葉を待った。彼女からの、彼女の言葉を。

よく聞けよ、一度しか言うてやらないからな。鬼灯は大きく深呼吸をした。

「私は、あなたのことが好きでした。どうか幸せになって下さい。立花君と付き合ったことは、私の大事な思い出です」

すう、と頬に冷たいものを感じた。急な自分の感情の爆発に僕は戸惑った。鬼灯が差し出したハンカチを黙って受け取る。涙は次から次へと溢れてきた。コーヒーでも買ってくるよ、と立ち上がる鬼灯を放って僕は呻くように泣き続けた。涙はちっとも止まらなかった。膝を抱いて顔を埋めた。泣くななんて何年振りだろう。そのしょっぱさで僕はまた悲しくなった。

言いたいことがいっぱいあったんだ、本当は。あの時は伝えられなかったことを、今なら伝えられると思っていた。好きだった、本当に、本当に。諦めていてもどこかで僕は君の影を追っていたんだ。会いたくて仕方なかった。君を待ち伏せて、何度一緒に帰ろうと思ったことだろう。何も出来なかった。何もしなかった。僕は君のことを分かっていなかった。僕には何か出来た筈だった。そしたら違っていたはずなんだ。

何もかもが僕を泣かせた。彼女と初めて話した日。僕は今鮮明に彼女とのことを思い出していた。緊張して泣きそうに見えた彼女の瞳、ちょっとだけ背伸びして気取った会話。ふわ、と漂ってきたシャンプーの香り。制服から覗く白い首筋、鎖骨が作った小さな窪み。記憶がこんなにも彼女を覚えていることに僕は驚いた。告白した日。眼鏡の奥で潤んだ瞳。好きだと言った彼女

の声は小さく震えていた。耳元で自分の鼓動がどんなにうるさく跳ねていても、確かに聞こえた彼女の声。初めてキスした日。ジャスミン。やわらかに湿っていた唇。

綾佳、とまた名前を呼んだ。覚えていられるだろうか。忘れてしまう、分かっている、覚えてはられない。悲しくたって、幸せだって、僕は彼女を忘れていく。

だけど今の僕にはもう、別の予感がし始めていた。

*

鬼灯が缶コーヒーを買ってきた時、僕は土手に寝転がって朝日を見ていた。涙はもう止まっていた。

「朝だな、もう」

僕は黙って彼女からホットコーヒーを受け取った。あちち、と手の上を跳ねまわらせてから、僕は久しぶりに、ありがと、と言った。少しだけ鬼灯が笑った。彼女は僕の隣に僕と同じように寝転んだ。

成人式だな、今日。だな。また沈黙。彼女の視線を何度か感じる。僕は黙って川面に映る朝日を見ている。

「行くのか、成人式」

起き上がって鬼灯が訊いてきた。その瞬間に手が触れた。遠慮して僕が手をひっこめると、照れんなよ、と鬼灯が笑った。

「で？」

あたしは強制しないよ、と鬼灯は付け足した。裕也の好きなようにすればいいさ。あたしらはもう、大人なんだからな。

「あのさ、」

鬼灯の方を見る。微笑んだ口元にコーヒーが少し残っている。いつまでも男みたいなやつだ。

「その、藤森の墓に連れてってくれよ」

驚いて一瞬後、ああいいさ、と鬼灯は頷いた。三人で成人式だ、日本酒でも買ってくか。鬼灯は独りで盛り上がっている。見ているだけでついこっちまで笑ってしまう。

「あ、お前今鼻で笑ったろ」

ぐっと鬼灯が詰め寄ってくる。してないよ。嘘だ。そんな他愛もないやりとり。してないって。でも僕は内心確かに笑っていた。鼻で鬼灯を笑った訳じゃない。楽しくて笑ったわけでもない。今ここにいない藤森綾佳の横顔が何故かふっと思い出されて、ちょっと寂しさが湧きあがっただけだ。ふう、と溜息を一つ吐く。寂しくても僕らは笑える。

「まあいいか、裕也がやっとならな」

鬼灯は土手を駆け上がっていく。おい早く来いよ、などと言いながら。僕はポケットに手を突っ込んで彼女の後を歩いていく。ちんたらすんな、早くしろ、という彼女の檄は聞こえていないことにした。あいつは昔からせっかちなのだ。

僕らはもう子供じゃない。子供のままではいけない。温かな思い出の中に浸って生きていく

なんてことは出来ないのだ。僕らは大人になってゆく。僕らは忘れる、全ての事を。悲しみも幸福も絶望も淋しさも、いつかは記憶の星屑と散るだろう。

いつかきっと、忘れられる日が来るのだと思う。いつまでも綺麗なままで覚えていくことは叶わない。だけどその時、その淋しさに、僕は微笑みを返せるだろう。

Childhoods end.

近付けたのは君の方

僕たちは同じ形じゃない。

僕のほうが心持ち背が低くて、君の方がすらりとしている。僕の髪の毛は茶っこい天然パーマだけど、君のは黒くてさらさらだ。僕の精神の半分は外国のミステリーやらSFやらで、君の半分は日本文学。選ぶのはレモンティーとミルクティー。いくら似ているような気がしても、探せば探すほど、小さなずればかりが見つかってしまう。

僕たちは同じ形じゃない。

相補的でもなくて、真夜中に撮った写真みたいにぶれている。そのくせどこか似た部分があるのも事実だ。

だから惹かれ、そして多分、もはや疲れたんだと思う。

四年にわたる同棲生活は、僕らのちがいを認識させるには十分すぎた。二十二歳の別れ。古い曲だと笑っていた頃の僕らとはもう違う。

掃除、洗濯、ちいさな生活の習慣。合わせていけることもいくつかはあった。食事中にテレビは見ない、とかね。だけど二十年近くの個人のリズムをすり合わせていくことは思った以上に困難だった。爪の端の小さな傷だって、気になれば寝られなくさせるには十分だ。

偶然が僕らを近づけ、孤独な男女は良い友人であることをすぐにやめた。眼に見えない信頼よりも、確固たる体の繋がりを作ってしまう方が安心できた。好きと言ってキスをすれば、愛とやらが生まれてくると思っていたのだ。

「同棲してる意味がなくなっちゃう」。

要するに、そういうことだ。

君が言った科白をゆっくり頭の中で反芻しながら、僕はそんな風に自分を納得させようとしていた。

*

吉祥寺のカフェを指定したのは君だった。六時半。忙しいとばかり言っていた君にしては早い時間だなと呑気に考えた僕は、それでもどこか予感めいたものを持っていた。いや、確信だった。始まりの地は終わりにこそふさわしい。よく通った筈のこの店も、記憶の中にある店員の顔を見つけれない。

約束の十分前に着いてしまうと、僕は昔と同じようにエスプレッソを頼んだ。僕はコートを脱いでマフラーを畳んだ。程なくして木目調のテーブルに置かれたカップに一口つけ、僕は表の通りの方に目をやった。ここからは外がよく見える。窓際の席ならどこでもいいと言ったのも君だ。見ているぼくは見られている。僕はその杞憂が好きじゃない。

いつかとまったく変わらない苦々しいエスプレッソの残りを僕は一気に流し込んだ。君が来るまであと二十分はかかるだろう。君はそういう人間だった。そして、僕がこうして十分前に来る人間だということも十分承知しているはずだった。僕はそれを知っている。それくらいは、まだ

。君は今日もいつもみたいに、曲がり角のあたりから小走りになってやってくるのだ。ごめんね、待った？ ううん、大して待ってないよ。多分今日も僕らの間ではそんなやりとりが交わされることだろう。

だけどそれも今日でしまいだった。僕たちのずれは広がり続け、収拾はつかなくなり、交わった二直線は離れてゆく。時間の問題だった。いや、もはや遅すぎたような気さえしてくる。

どうにもならなかった。互いに仕事の時間が正反対で、僕たちは入れ替わりに寝に帰った。出ていく時に君と会うのはまれだった。たいていの場合、僕たちは週に何度かしか顔を合わせる事がなかった。お疲れ。いってらっしゃい。ごみ出してきて。時には無意味な喧嘩。いったい何のために同棲したんだ。そういうズレを、どうにかしたかったんじゃないか。

二人一緒に寝ればいよと一組しか買わなかった布団に二つの身体が横たわっていることはまれだった。たいてい僕はタオルケット一枚で、Tシャツのまま泥のように眠った。君はどんな風にあの布団で寝ていたんだろうね。よそいき用の香水の香りが残っているたびに、僕は不思議な憤りに駆られたものだった。君が僕の前でおしゃれなんかしていたのはずいぶん昔のころのように思われた。それは無様な感情に思われた。僕は僕で君の前ではだらしのない格好ばかりしているくせに。

君はまだ来ない。時計の針は六時四十五分を回った。

僕は二杯めのコーヒーを注文した。今度は甘めのカプチーノ。極端に苦いエスプレッソの後にこれだなんて変な趣味だといわれるかもしれないけど、僕は甘いものは最後にしたいのだ。紅茶にも砂糖を二杯は入れる。気まぐれで作るココアなんか、砂糖とココアを一対一で温めたミルクに入れるほどである。今度も僕はもともと甘いカプチーノに一本分の砂糖をかき回して口をつけた。流石に少し甘さがくどい。けどいいのだ。君になんと言われようと、飲み物くらい好きなように飲む。

窓の外を歩いているのはやはりカップルが多かった。制服を着た高校生のカップルが一組腕を組んで歩いている。あれはもう、腕を組むというより彼氏に寄りかかっているような感じだ。彼氏の方はさぞかし辛かろう、そしてその幸せは儂い。

仕事帰りのサラリーマンが増えてきた。飲食店はどこも客引きに忙しそうだった。この店はあまりそういうことをしない。そんなことをしなくてもあぶれた客が入ってくるものだ。そしてこの店のコーヒーは美味しい。いい豆を使っているんだろう。

そもそも、どうして君は家でなくてわざわざこの店を選んだのだろうか。半年以上来ていなかったこの店に。

バイトの店員は変わっても、変わらないコーヒーの香りが、少しだけ僕を昔に押し戻した。

*

地方からわざわざ東京へ出てきたのに深い理由はなかった。東北の山間の村で幼少期を過ごした僕は、大都会というものに中身のない憧れを抱いていたのだ。中身がないことは重々承知していたが、もうこの田舎にはうんざりしていたのだ。大学は東京にしようと思うのは、この辺の若

者なら誰でもかかる病気みたいなものだ。大抵の者はそのうち治るか挫折する。

しかし中には頑固な奴もいる。僕と楠木がそうだった。楠木は幼馴染みたいな奴だ。隣の家、といってもばかに広い田圃を隔てた遠くの方だけど、に住んでいる奴は、あの田舎において僕の唯一気のおけない友人だった。都会の方に父親が出稼ぎしているのだから、奴は幾度が一人で東京に行ったことがあった。そんな人間はこの田舎には殆どいなかったから、同い年のくせに言動がずいぶん大人びてみえたのを覚えている。

「俺はさ、こんな所で埋もれていい奴じゃないと思うんだ」

ど田舎のくせに楠木が話すのは標準語だった。とはいえ多少は方言も混ざっていた気がする。しかし重要なのはそこではなかった。何にしろ都会っぽさだ。夢物語だって都会でなら言っている気がした。もちろん、都会っぽいだけなんだけど。

「やっぱ、東京に出なきゃダメだよな、俺もお前も」

僕は彼の前では極力標準語で話していた。ドラマやらから得た怪しい知識でも、僕たちが他の田舎者どもとは違うのだと思うには十分だったのだ。だからこれは一種の遊びだった。無論、そのときの僕と奴は自嘲気味な真剣さをもっていただけだ。

それから僕と奴は夢物語を真剣に議論してみたりした。ネットで大学を調べ、東京で独り暮らしするならどこにするとか、どんなところで働いて、どんな女の子と付き合って（まあ、年頃の男の子なんだから仕方がない）、何になるのか、とか。

「東京に住むなら中央線沿線だよな。山手線なんて素人だ」

僕は知りもしないのに吉祥寺付近が絶対にいいと言い張った。とりあえず駅名だけでおしゃれな感じがしているし、高いたろうがたぶん鉄板だろう、という程度の理由だったけど。

奴はふん、と鼻で笑った。眼鏡の奥の目は僕を見下していた。

「馬鹿だなお前は。中央線なんてしょっちゅう止まってるだろ。これだから行った事のない奴は困る」

それから奴は本当かどうかなんてまったく分からない蘊蓄を得意そうに吹聴するのだ。僕は奴の自尊心を気遣った。

実際、今振り返ってみれば、中央線がしょっちゅう止まる以外の彼の言っていたことはだいたいが外れていた。でもそれがかまわなかったのだ。子供の頃の僕らに必要なのは真実ではなかった。夢と言えども聞こえはいいけれど、ただ暇な時間の慰みに適当な落書きを書くようなものだった。或いは砂場に出来た山。真実を知る大人たちはそれをお城に見ることはできない。

奴はどうしているんだろうか。僕は急に彼のことが気になった。東京へ出ていくと言って置いて、奴は僕を送りにも来なかった。奴の父親はリストラされて戻って来ていた。東京に行かせられるだけの経済力がないのは明白だった。確か奴は地元の企業に駆け込み内定をもらったのではなかったっけ。

もう何年も帰っていない故郷の風景は、もはや僕には馴染まないほどに変化してしまっているに違いない。

ぱたぱた、と彼女が駆け足でカフェに入ってきたのは案の定約束の時間を十五分過ぎた後だった。

「ごめんね、待った？」

ううん、大して待ってないよ。そう返して僕は彼女のためにウェイトレスを呼びとめた。すみません、追加で注文を。コートを脱いでいる彼女をそのままに、モカを一つ、砂糖は要りません、と僕は注文を終えてしまった。

「覚えてたの」

手袋を外してやっと座った彼女が言った。化粧した顔を見るのは久しぶりだった。僕はそれには答えずに、とりあえず何か頼もうか、と彼女にメニューを差し出した。開きもせずじっと表紙を見つめると、彼女は僕の方へメニューを押し返した。

「何が美味しいんだっけ、ここ。最後に来たの半年前だっけ。もう結構な時間来てないから忘れちゃった」

僕は黙ってメニューを元に戻す。店員がモカを持ってくるのに乗じて僕はクレソンとローリエのサラダとパニーニを一つずつ追加で注文した。

「そうそう、それだったわね。最初に頼んだのは」

彼女は何故か少し不機嫌そうだった。何で覚えているのかしらね、そんなことをふと零した。零れたと言った方がいいのかもしれない。

「大抵これだったからね」

僕は曖昧に聞き流した。そうだったかしら、と彼女が呟いた。

「今日は珍しく早く終わったの？」

とりあえず僕は当たり障りのないところから話を始めた。

「そう、珍しくね。大きな仕事が丁度終わったとこ。次の仕事ももう控えてるんだけどね。小休止ってところかしら」

「仕事があるならいいんじゃないか。うちなんか雑用もないヒマな時間がやけに増えたよ。楽でいいんだけどね」

不況って嫌なものね、と彼女は溜息とともに吐き出した。

「うちはほら、そうやって危ない企業とかを上手いこと軌道に乗せるお手伝いをするのが仕事だから。もうアップアップよ」

「都心のターミナル駅にトイレ一個、一回百円ってとこか」

そんな感じよ、と言って彼女はモカに口をつけた。すごいわよね、人間って。どんな所にでもお金とれる隙間を見つけるんだからあきれられるわ。分かっているのに就職しておいて言うのもなんだけどね。一口飲むと矢継ぎ早に彼女は話を続けていく。

「そのくせ殆ど儲けはなし、と。自分の会社の救済案でも任されないかとひやひやものだわ」

「そうなの？」

「もちろん入ってまだ一年もたってない私がそんな大きな仕事を任されるわけないんだけどね」

「笑えないね、それは」

「はは、ほんと笑えないわよ」

彼女は無理やり笑って見せた。僕はそれに笑えなかった。失敗だったと悟ったのか、彼女はそれきり黙ってしまった。そうしてコーヒーを飲む。僕も彼女にならった。両手でカップを抱えたまま、彼女ははずみをつけるように大きく息を吐いた。

「あのね」

本題が来た、と僕は思った。彼女は眼を上げない。何を話されるのかは見当がついている。僕はカプチーノの入ったカップをソーサーに置いた。ちょうどそこへやってきた店員がサラダとパニーニを置くのを待って、彼女は再び口を開いた。

「話があるんだけど」

だろうね、と僕は小さくつぶやいた。彼女に聞こえる程度に。

「僕も話があるんだ。あ、サラダ取るよ」

ありがとう、と彼女は微妙な笑みで返した。確かにわざとらしすぎた気もする。僕は自分の言った事の責任を取って、サラダを小分けにした。パニーニは？ 切った方がいい？ 先に半分食べて、と彼女はさっきの表情のまま答えた。

「私たちのことなんだけど」

「奇遇だね。僕もちょうど僕たちのことを話したかった」

そう、と彼女は大した反応もなくただ返事をした。もう何も言う必要はない気がした。僕らはお互いが疲れているのをよく知っていたし、お互いにお互いの疲労をどうにかすることはできないともよく分かっていた。分かりあえるという点でなら、僕らはまさに恋人の中の恋人だった。僕らはもう、僕らでいられないことを十分すぎるほどに分かり切っていた。

「あんまり家に帰れないと思うのよ、これからも」

逆に僕は首切られて暇になりそうだよ、と喉まで出かかったけれど、それを言ったら余りにもからかい調子になってしまいそうだったのでやめた。その代わりにのコーヒーで喉を潤す。

「とっても言いにくいんだけど、その、私たちが同棲している意味とかがなくなっちゃいそうなのよ」

彼女は慎重に言葉を選びながら、しょうがないよね、そういうこともあるよ、というような軽い別れを目指していた。

「貴方に家事をやってもらうのも変でしょう？」

もしまだ強い愛情があったなら、僕はここでNOと答えたらどうか？ 一口齧ったパニーニは全然美味しいと感じない。焼けたチーズ、ベーコン、そして数種類の野菜。嫌いなものなんて一つも入っていない。かなりの好物だ。だからいつもこればかり頼んでいた。君にあきれられる程に。

「だからね、話っていうのは、」

「いいよ、言わなくても」

分かり切っていることを、わざわざ言葉にする必要はない。無造作にパニーニを置いて、僕はぶっきらぼうに彼女の科白を遮った。え、と彼女は驚きを口にした。

「僕もちょうどそう思っていたところさ。残っているのは事務的な問題だよ。家具とか電化製品

とか、どちらが住んでどちらが出ていくのか、そういうこと」

強い口調に彼女は少したじろいだ。両手で抱えたままだったコーヒーを一口飲み、目線をコーヒーに向けたまま、彼女はためらいを口にした。

「そう、ね。そうだけど」

「あんまり感傷的なのは好きじゃないな。君もだろう？ 泣きそうになるくらい悲しいなら、別れなければいい。けどもう僕らはそうじゃない。別れるって決まっているのに悲しようにするのはやめてくれ」

カップに残っていた最後の一口を僕は胃に流し込む。僕は彼女の逡巡に付き合っている気はもうなかった。一緒に考えることも、共に悩むこともやめると決めたならば最後くらいきっぱりと別れるつもりだった。

「冷たいのね」

「そうだね」

「私、貴方のそういうところだけは好きになれなかった」

「そう」

「いつもそう。貴方はそうやって冷静で、私はそこにすごく惹かれたし、何度も助けられて安心したけど、そうなれないと分かってからは辛かった。私にその冷酷さが向けられてからはもっとそう」

彼女はカップを置いた。タートルネックの上につぞやあげたネックレスが掛かっていたのに僕は今になって気づいた。

「何だったのかしらね、この四年半って。大学に入って、貴方に出会って、付きあって、同棲して、喧嘩したり仲直りしたりして、就職活動して、卒業して、就職して……貴方はいつもそうやって冷静だった。私が悩んでいても」

そんなことないよ、と僕は言わなかった。

「だからね、そういうこと。嫌いになったわけじゃないの。今でも好きよ。愛しているかは分からないけれど」

僕もだよ、僕も、そうさ。僕はまっすぐ彼女を見つめた。彼女はまだ多くの感傷の種を燻らせていた。最後にそれを共有するのが貴方の努めよ、それで綺麗に別れられるわ。見つめた彼女の光彩はそんな色を映していた。

「私たち、子供だったのね。友達としてならとってもいい関係を築けたと思うんだけど」

「そうだね」

僕らは確かに子供だった。寂しかった。良い友達として過ごすよりも、恋人として愛してしまう方が簡単だったんだ。友達も少ない僕らは、小さく強固な結びつきを何よりも求めていた。希求する声は共鳴し、僕らは互いを見つけてしまった。その時の僕らには互いがものすごく魅力的な異性に見えたのだ。僕の理想とする女性のアイコンは彼女の影だったように思われた。僕はやっと出会えたと思い、彼女もまた同じく、僕らは惹かれた。そして僕らは、そのままでいることができなくなってしまったのだ。所詮はごっこ遊びのようなもの、一時の夢はすぐ覚める。

「後悔してる？」

彼女がまっすぐ僕を見つめた。無意識なのか右手でネックレスを触った。僕はとても居心地が悪い気がしていた。

「してないよ」

「私もよ」

空いていた左手を彼女が差し出してくるのを、僕は無言で見つめていた。

「手も冷たいわ」

「そうだね」

彼女の左手に握られた僕の両手に彼女はまた右手を添えた。

「いつもは貴方の方が暖かかった」

「そうだったっけ」

「そうよ」

両手で包んで彼女は僕の手をさすった。

「私が出て行くわ」

「そう」

「実を言うと、もう部屋も見てあるの」

「知らなかったな」

「言わなかったわ」

僕の手を離し、彼女は半分になったパニーニを口へ持っていく。僕が齧った跡から彼女は口にしていく。ゆっくりと咀嚼し、ごくりと喉を嚥らせて嚥下する。彼女は丁寧にものを食べる。僕にとっては冗長な程に。だからいつも僕が先に食べ終わっていた。或いは先に食べた。こうして二人で分ける時は。

「こうして分けて食べるのも最後かもね」

「そうだね」

淡白に答えて、カップを持ち上げてから、ああさっき飲み切ってしまったのだと気付いて僕はすぐにカップを下ろした。

「おいしいけど、もう冷たい」

彼女は両手で抱えるようにして、小さな口でパンを齧っていく。伏せた眼は長くくるりと上げられた睫毛に邪魔されてこちらからは窺えない。

「家具とか、電気製品はどうする？」

「今あるのはいらない」

「そう」

僕の質問に彼女は抑揚無く答えた。そういうものか、そうだろうな。口に出さずに考える。四年半も暮らした家具なんかを別れた後まで持っていたら、確かに事ある毎に否応なく思い出してしまいそうだ。僕だってそれに耐えられるだろうか。

「少しは出そうか？」

珍しく、と自分で思った。僕の口から珍しく優しげな言葉が飛び出てきた。自然な成り行きのもりだったけれど。

「ホントはそうしてくれると助かるんだけど、いらない」

「そう？」

「貴方、だって急に優しくなった。別れ話が出たとたんに優しくなるなんて卑怯だわ。そういうつもりじゃないんでしょうけど、わざわざ傷つけようとしなくて」

見透かされている。彼女はそんなに甘い人間ではなかった。僕はやっぱり彼女のことを分かっていたいなかったらしい。彼女はじっとこっちを見つめていた。今さら私に優しくするつもり？

「ごめん」

「いいのよ。たぶん私も似たような事を言ったと思うわ」

「逆だったら？」

逆だったらね、と彼女は静かに答えた。ふっと寂しそうに目を落とす。寂しそう、確かにそうだ、だが僕らは離れていく。

「始めはね、なんて似ているんだろう、って思った」

ぽつりと彼女が話し出した。

「似てるって、僕と君が？」

「そう。性格とか、好みとか、境遇とか、考え方とかも」

「そうかな」

「そうよ」

コーヒーはとっくの昔になくなってしまったのでお冷に口を付ける。ふと時計を見るともう七時を回っていた。するとこのお冷は一時間も前から置きっぱなしになっていたことになる。汗をかいたグラスは冷たい。

「そうかもしれない」

そうよ、と言って彼女も同じようにグラスに、いや紙ナプキンでグラスについた水滴をふき取ってから手をかけた。

「そうやって似ているところを見つけ合って、私は本当にうれしかった。こんなに似ているんだったら、運命だって言っているのかもしれない、そんなことを考えるくらい」

「それは言いすぎだろう」

「今はね。でもその時は違った。恋は盲目って奴ね」

「若気の至りとも言うね」

若いて怖いわ、何も怖くないのね。彼女は急に年老いめいた言い方をした。

「ゴム越しではあったけどね」

「冗談ならもう少し面白い顔で言ってくれない？」

「子供が出来るのは怖かった、っていう意味だったんだけど」

ほんの軽口のみつもりで言ったのに、彼女はしかめっつらをした。確かにほんのではなかったような気がしてきた。

「そういう所も、ユーモアだって思っていたのにね」

はあ、と大きく息を吐く。しかめっつらはすぐに直り、しかしてそこに今度は諦めの色が浮かび上がっている。そう、諦めだ。僕らは、僕と君は、互いについての全てを諦めるのだ。

カラン、という音がして入ってきたカップルを何とはなしに互いに目で追ってしまう。大学生ぐらいのカップルは、男の方はすらりとした長身で、女の方がいかにもなかわいらしい華奢な体つきだった。そのくせこの真冬にミニスカートから生足を覗かせ、タートルネックのセーターが不必要なほどに胸のラインを強調している。ふわふわした白のマフラーを巻くでもなく首にかけて、確かに可愛らしいが寒々しい。彼氏の方は地味な風でいてこちゃこちゃした装飾品をつけている。洗いざらしのジーパンと高そうなスニーカー。なんともカップルらしいカップルだった。それは遊園地の張りぼてに似ている。

「なんだかああいうのも白々しいわね」

彼女が彼等を見つめながらふっと感想を零した。

「そうだね」

「いかにも若いカップルって感じで」

「そうだね」

「でも、そんな風に見られてたのよね、私たちも」

「今もまだ、多分ね」

彼女がこちらを向き直った。そうしてそれが癖であるかのようにネックレスをいじる。ふと僕は店内に流れていたBGMの存在を思い出す。いつからピアノソナタが流れていたんだらうか。入った時はもっと軽い調子のジャズだったはずなのに。

店員がこちらの視線に気がついた。彼を見ていたわけではなかったけれど、確かに客が遠くへ目をやっていたら店員を呼んでいるように見えるかもしれない。注文ですか、と彼が言うので僕はもう一杯、今度はブレンドを注文した。彼女もそれに倣った。ブレンド二つですね、確認する彼に僕は砂糖とミルクを多めに持ってきてくれるように頼んだ。畏まりました、とお辞儀をして去っていく。私の分をあげたのに、と彼女が責めるような眼差しで言った。足りないんだよ、もっと甘いのが好きなんだ。眼を合わせずに僕は答えた。そう、とだけ彼女は返す。

会話の無い時間が妙に窮屈に感じられた。もっといえば退屈だった。居心地は更に悪かった。追加注文をした自分を少し悔やみはじめた時、店員が爽やかな笑顔でブレンドを二つ持ってきた。彼女の所に置かれた砂糖とミルクを、彼女は黙って僕の方へ差し出した。

「ありがとう」

僕は素直に礼を言った。都合三個分の砂糖とミルクがブレンドに追加で混ぜられる。

「さっきのカプチーノだってどうせ甘くしてたんでしょ？」

彼女が少しだけ微笑んで訊いてきた。

「そうだよ」

「だんだん甘くしていくのってくどくない？」

「くどいよ。でも僕はこれが好きなんだ」

そう、とそれきり彼女は黙って自分のコーヒーに口を付ける。女の方がブラックで、男の方が殆どコーヒー牛乳じゃ何とも恰好がつかない。それもこんな話をしている時に。

「いつごろ出ていくつもり？」

唐突かも知れない、と言ってから僕は思い至った。彼女は少しだけ驚いた顔をした。それもす

ぐに何時もの表情に戻る。しなければならない話のために、しなくてもいい話をしていただけなのだから。

「うん、来月に入る頃には」

彼女は指折り日にちを数えた。あと八日くらいね、と僕の方を見て言った。

「そう。近いね、結構」

そうでもないわ、やることはいっぱいよ、と彼女は言った。

「最初はね、黙って出ていくつもりだったの」

彼女がまたもやしなくてもいい話をしだした。それでも僕は黙って先を促した。

「貴方が仕事に行ってる間にこっそり荷物を減らして行って、何にも告げずに出ていこう、って」

ふふ、と何故か彼女は笑った。やっぱり女心は分かりそうにない。矛盾ばかり、推し量ろうにも知らないファクターが多すぎる。そもそも人付き合いが得意な方じゃないんだ。それが四年以上も続いたことに驚くべきか。

「でもやっぱり出来なかった。ちゃんと話をしようと思ったの。まあ、現実そんな風に黙って出ていくこともできないしね」

「そうだね」

「だからこうして、ここで会おうって言ったのよ。始まりはここだったからやっぱり終わりも、って」

ああ、確かにそういう感性はどうしたって似ていた。僕は急に黙って泣きたい気分になってきた。悲しいかどうかはよく分からなかった。だけど強めのお酒でもひっかけて、そのまま寝てしまいたい気持ちだった。これを悲しみと呼ぶんだっただろうか？ 長く緩やかな下降線を描いていた蜜月は、そういう感情の連携を鈍くさせるには十分だったらしい。

あのね、と前置いて彼女は次の話をし始めた。

「手紙を書いても、いい？」

驚いて僕は下げていた目線を彼女に戻した。

「別れるのに、こんなことを言うのもおかしいとは思うんだけど、やっぱり大切な人なの、貴方は。だから恋人としては終わりにしようと思うけど、繋がりだけは消したくないの」

彼女は僕に窺うような眼を向けた。

「何だかんだいってもこの四年間一番近くにいたのは貴方だし、相談とかも乗って欲しい」

「さっきは冷たいとか言ったくせに？」

「うん、それでも」

だめかな、と彼女は言った。だめだよ、と僕は言おうとした。だってそうだろう。これから別れるっていうのに、何でそんな風にして繋がりを持ち続けなければならないんだ。愛し愛されのロールプレイングは終わり、これから別々に生きていくと決心した二人の人間が、どうして手紙のやりとりなんてするだろう。まだ微かに残っているかもしれない後ろ髪引かれる想いをそれでうまいこと片づけられるだろうか。感傷や喪失感をゆっくりと夕日が沈むように終わらせられるだろうか。

否定する材料はいっぱいあった。僕がここでいやだと言えば彼女も諦めてくれるだろう。そして他に頼れる人間を見つけることだってできるだろう。もしもここで断らなければ、僕らの関係は紙切れ一枚でずるずる続き、互いの道にも路傍の石となってしまうかもしれないのだ。別に僕は直ぐにでも他の女性と付き合ったりしようとは思わない。彼女もおそらくそうだろう。この別れの陰に他の男がいたりはしないはずだ。それがただの過信だとしたって、そしたらこんな風に手紙がどうのと言ってくるわけがないのだから。だけどだからなおさら、僕は断るべきだったのだ。

「いいよ、すぐに返事を出せるかどうかは分からないけど」

だけどそんな僕の心情とは裏腹に口は勝手に言葉を紡いだ。それが本心かどうかはわからない。それを今すぐに確信できるほど僕は冷静にはなれない。女々しい感情が女々しくも感情的に口をついたのかもしれない。けど言った途端に僕は妙に納得してしまった。要するに僕はそんな人間なのだ。それ以上に何か言うことは今の僕には出来そうになかった。

ありがとう、と彼女は言った。久しぶりに見た穏やかな笑顔だった。それはたとえば二人で朝を迎えた時なんかはコーヒーを持ってきた君が映していた表情と同じだった。付き合い始めの頃、夜半に盗み見た君の寝顔に少し似ていた。ああそうか、と僕は思った。僕はこの笑顔が好きだったのだ。僕と共に歩み、僕が与えることのできるこの幸福が。

「そろそろ出ましようか」

君はそのままの笑顔で言った。僕は頷いた。君は自分のコーヒー代を僕に手渡した。

カフェを出ると彼女は言った。

「たまには一緒に帰りましょ」

最後に、とは言わなかった。僕らは冬の夜の中へ身を滑らせ、泳ぐように雑踏を進んでいった。両手をコートポケットに突っ込んだまま、僕はなぜかとても息苦しかった。

電車を待っている間、ベンチで座って僕らは何故か見つめ合った。不思議だった。これから別れようっていうのに、どうしてこんなにも息が枯れるんだろう。中学生じゃあるまいし。

最後に、と言ったのは君だった。眼を瞑ったのも君。音もなくそっと舞い落ちる花びらが、偶然触れ合うみたいに。

そうして八日後、彼女は宣言通り家を出て行った。

*

僕らが別れて三年が経ち、彼女との手紙のやり取りも習慣になってきたころ、プライベート用の携帯電話に見覚えのある電話番号から着信が入っていた。覚えているような番号は、ふつう自宅と実家くらいしかない。けどその番号はそのどちらとも合致しなかった。そもそも9ケタだ。つまり携帯電話の番号だった。どこで見かけたんだろう、と思案するうちに、ああそうか、彼女の携帯の番号か、と行き当たった。

「もしもし、びっくりした？」

唸るバイブレータを止めて電話に出るとこちらが話し出すひまもなく受話器から彼女の声が

した。

「今ヒマかしら？ それとも迷惑？」

「ヒマじゃない。もしもしと言うヒマもないのは迷惑だ」

あはは、全然変わらないのね、と電話越しに彼女は笑った。アルコールでも入れているんだろうか。

「あのね、ちょっと話さない？」

あんまりにも明るい声で彼女が尋ねた。

「良いけど、何か話すことがあるの、電話は約束違反じゃなかったっけ？」

「いいじゃない、減るもんでなしに」

「お金は減るよ、目に見えて」

「うるさいわよ、ばか」

どうやら相当に上機嫌らしい。これはやばいな、と僕は身構えた。普段彼女はそんなに機嫌を良さそうにはしていない。この三年間で彼女に劇的な変化がなかったとしたら、何も入っていないんじゃないかというほどの彼女の上機嫌さはどちらかと言えば面倒な相手の部類に入るのだ。

「何、新しい恋人でも出来た？」

「そういうことを聞くのは意地が悪いと思うな」

試しに軽くジャブを放ってみると軽くいなされてしまった。

「重要だろ、そういうこと。立ち位置を知りたいんだよ。会社とかでもさ、それってすごく必要なことだよ」

もう三年も経ったんだしさ。恋人の一人や二人いたって全然驚かないよ。噛み締めるように僕は言った。

「でもここは会社じゃない。貴方と私は部下と上司でもなければ数少ない役員の椅子を狙っているライバルでもない。それに私は何人も恋人を抱えるような女の子だったかしら？」

そういう意味で言ったんじゃないんだけど。どうもこれは本当に面倒な部類に入ってきたらしい。長くなるかもしれなかった。諦めて僕は冷蔵庫から麦茶のボトルを取り出した。片手間にコップに注ぎながら、何を言おうかと考える。

「今は電話よ。電気信号に立ち位置がそんなに重要かしら？」

彼女は相当以上にからんできた気分らしい。

「確かに君はそういうことをするような女の子ではないけれど、この三年の間に恋人がいたのかどうか僕は知らない。それに電気信号にだって立ち位置は重要だよ。電話の中が砂漠の砂嵐じゃ声なんて届きそうにないし」

遠いから？ と彼女が訊いてきたのでそうだよ僕と君は遠いからねと僕は答えた。近ければ聞こえるのに、と言った直ぐ後に、ごめん、と彼女は付け足した。それきり黙りこんでしまう。

沈黙に耐えかねて、お酒呑んでるの、と訊いてみたら、うるさいばか、貴方のせいよと結構な（しかも無分別な）文句が返ってきた。どうも本当に出来あがっているらしい。

「それで、何かあったんじゃないの？」

「何で？」

「何でって、急に電話かけてくるから」

そうかしら、別にいいじゃない、あ、でもね、と彼女はやっと本題に入った。

「あれからお母さんがやけにお見合い写真持ってくるのよ。この三年間、何十枚も。今日もどっかの会社の有望株だかの写真持ってきてさ、しかも十歳上の」

それで、と僕は続きを促した。どうやら本題ではなかったらしい。ただの世間話なら他でやってくれとも思ったが、今の状態の彼女には言えない。

「ああいう写真ってみんなおんなじ顔に見えるのね。妙に爽やかそうに笑っちゃってさ、キラーンって。きらーん」

「閉じ切ってない唇から白い歯が覗くわけだ」

「そう、そうなのよ。どいつもこいつもうっすく笑っちゃってさ。馬鹿みたい」

ははは。僕はおざなりの相槌を打った。

「なんかね、振られて傷心の娘を癒すのは新しい男しかいない、って思ってるみたいよ、うちの親」

ほんとばっかみたいよね、彼女は笑った。もう三年も経ってるのにね。いい加減嫌になってくるわ、うちの親にも。

「そもそもこっちが振られたようなものだしね」

「そうよ。でもこっちが振ったわけでもない」

微妙だね、と僕も笑って言った。自分達のことなのに、なんだか友人から訊いたその友人のそのまた友人のカップルの話でもしているみたいだった。

「最近さ、変な意味じゃないのよ？ 何だかやたら貴方のことばかり考えてるわ。そういう時間が増えてきたの」

急にしおらしくなった彼女がそんなことを言い出した。

「今なにしてるのかなーとか、私たちにあったこととか、色々。付き合ってたころよりも、ずっと。変な話よね」

僕は黙って次の言葉を待った。

「もう三年も経ったのよね」

彼女は自分に言い聞かせるように強く言った。

「あと一年で、付き合ってた時間と同じくらいになるのか」

そうだね。早いね。確かに考えてみればそれはずいぶん遠い昔のこのように思われた。

私ももう二十九か、彼女がぽつりと呟くので、三十路の壁もすぐそこだね、と僕は冗談で返しておいた。また結構な文句が返ってくるかと思いきや、三十か、と案外真面目な答えが返ってきた。

「初めて会ったのは、十年前、七月の終わり」

また確認するように彼女が言った。昔語り。僕はそれに付き合うことにする。何故だかはわからない。だけど一つ正直に胸の内を晒せば、彼女と同じように僕も彼女のことを考える時間がこの頃増えていた、ということだ。

「そうだね。吉祥寺のカフェ、空いてる席がなかった」

「貴方がコーヒーを片手にレポートを書いていた」

「『現代社会の問題点と展望』。あれは面倒くさかった」

「私は一言断って貴方のテーブルに相席した」

「僕はそれに首の動き一つで答えた」

「私も自分の課題をやり始めた」

「『現代における価値の基準とその恣意性』だったっけ？」

彼女の方が題名にテーマが明確に記されてた。しかも結構な鋭角だった。僕はそれで彼女のことが気にかかったんだっけ。

「私たちはお互いのレポートに興味を持った」

「それからたまたま同じシャープペンを使った」

「貴方が私に声をかけた」

「そうだったっけ？」

「そうよ。覚えてないの？」

それ現代社会論Bのレポートですか、って。貴方が訊いてきたんじゃない。彼女の声はどこか楽しげだった。

「恥ずかしいな」

「でもそこから、私たちの付き合いは始まった」

確かに。そうでもなければ君と僕が話すことはなかった。

「僕たちは同じ学部の一年生だと分かった」

「お互い名前を教えた」

「そのまま流れで一緒に夕飯を食べた」

それも貴方から誘ってきたのよ。君はからかうようでもなく続けた。クレソンとローリエのサラダとパニーニ。またずいぶんあれを食べてないわ。貴方は？ 訊かれたので僕は答えた。僕もだよ。三年前に君と行ったのが最後だ。

「僕らは意気投合した」

「バーに誘ったのも貴方」

「ついてきたのは君。この後予定は、て訊いただけ」

「ちょうど飲みたい気分だったのよ。レポートも終わったし」

「だからってあそこまで酔わなくたっていいと思うけど」

「でも貴方は酔った私を家まで連れて帰ってくれた」

「それも紳士的に」

「そうね、紳士的過ぎて男前ではなかったわ」

「誘うそぶりもしなかつたくせに」

「女の子は軽々とそんなことしないわよ」

そもそもゲロの世話をした直後その相手にそんな気分なんてなれないけどね。もちろんそんなことは言わない。

「二人とも、地方から出てきて友達がいなかった」

「いつしか君がうちで寝泊まりするようになった」

クリスマスの前のことよ。天皇誕生日。十二月二十三日。君はすぐさま日付を答えた。

「二日間我慢して、セックスした」

「キスは我慢できなかつたくせに」

君もだろ、とからかえば、そうよ、と静かに答えられた。

「近付けたのは貴方の方よ」

「口付けたのは君の方だよ」

ふふ、と電話越しに君は笑った。

「今考えれば私たち、たった半年で同棲したのね」

「そして四年半で別れた」

「四年半って長かったのかしら」

どうだろう。その時はずいぶん長いと感じた気がする。学生の時の四年半は長い。大学に入って、レポートやらテストやらの忙しさを初めて身に染みた七月に付き合っ、就職して一年めの冬に別れた。僕らはその間に社会学のレポートをやったり卒業論文を書いたりしたわけだ。思えばそんなに学んだらうか。この八年あまり、僕はだして何もしていない。もちろん無事に卒業して、就職もしたし、部署が変わった今は前より稼ぎもいい。だけど果して賢くなっただらうか。

「ねえ、黙らないでよ」

君が泣きそうな声をした。え、ごめん。反射的に僕は謝る。

「謝らなくてもいいけど」

「そうだね。うん、やっぱり長かったんだらうね。その時はそんな風に思わなかったけど」

そして別れを決めたときも、長かったなんて思わなかった。過ぎ去ってしまった出来事の連綿に、僕は閑静な寂しさを感じただけだったのだ。そしてその寂しさとこの三年間共にした。

やっぱりそうだよ、長かったよね。君が電話越しで頷く気配が伝わってくる。

「後悔してる？」

いつかと同じ質問を、君がした。僕は少したじろいだ。

「なんて答えたんだっけ、あの時は」

「してないよって言ったわ、貴方は」

君はすぐさま答えた。心の中でだけ問いかけるつもりだったのに、声に出してしまっていたらしい。よく覚えているものだ。

「そうだった。何となく居心地は悪かったけど、確かに後悔してないって答えた」

「居心地悪いってどういう意味よ」

思った事をそっくりそのまま言っただけなのに、すかさず君は突っ込みをいれた。ネックレスだよ、あのとき君がしていたやつ。一口麦茶を飲んでから僕は返した。

「ネックレス？」

「いつか僕が君にあげたやつ。君がそれを触りながら訊くもんだから、何となく居心地が悪い気がしたんだ」

「銀色の、すごくシンプルなやつ？」

そうそう、それだよ。銀の細かい鎖と、艶のある黒い、えーっと、マッチ棒みたいな飾りの。

「マッチ棒って言い方はないんじゃない？」

「他に何も思いつかなくて。伝わればいいんだよ」

そうかもしれないけど。君が詰め寄るように言った。

「結構気に入ってたんだから。スーツにも合うし、シンプルだし、ゴテゴテしてないし、目立たない割に綺麗だし」

「自分が気に入ったやつをあげただけだよ」

そうなの、と君が訊いたので、そうだよ、と僕は答えた。

「そっか、貴方が気に入ったやつだったんだ」

最後に貰ったプレゼントだったわね。四年めの付き合った記念日に。何故か君の声が責めているように僕には聞こえた。

「そうだった。それが最後だったっけ」

「そうよ。就職したばかりでどこかで食事とかも出来なかったけど、帰ったら机の上に置いてあったわ」

「そうだった。結局それが最後になっちゃったんだね」

たまたま見つけたんだ、出先の会社の傍で。それほど高価なものでもなかった。ふと四年前の今日に付き合ったことを思い出しただけのこと。それで何かが変わるかと思ったのだ。

「あのね、そのネックレスなんだけど」

何、と僕は促した。彼女はゆっくり一呼吸おいた。

「その、実はまだ持ってるって言ったら驚く？」

驚いた。思考が停止して僕は上手く次の言葉を繋げられない。別れた男の最後のプレゼントをまだ持っているって？

「そんな薄情じゃないわよ。プレゼントくらい大事にするわ。いつか貰った安物の指輪だって、そりゃ付けたりはしないけど」

「そう、なんだ。いや嬉しいよ、大事にして貰えるなら」

結局のところ出てきたのはそんな間抜けな相槌だけだった。うまく君の心理を読み取って整理しようと努めているのに、むしろ積極的に散らかっていく。そういえばあの指輪はどこに閉ったっけ。失くして怒られたまま所在不明になってしまった。思い立って立ち上がる。探してみるのもいいかもしれない。

保険証やら診察券やらが入っている棚を物色し始めた所で電話の向こうで君が緊張しているようにすうっと深く呼吸した。

「ねえ、ほんとは今もペンダント付けてるって言ったら？」

「もう驚かないよ。予想の範疇だ」

ひっくり返したり放り出したり何かとがさがさとやりながら僕は話半分で返答した。詰まんないの。そういう所がサービス精神に欠けるのよね。君は心底呆れたような声を出した。

「営業に回されてからは仕事でサービスしてばかりなんだからいいだろう。それにリップサービ

ス嫌いじゃなかった？」

「大げさでいいから驚いて欲しいのよ、女の子は」

女の子って歳でもないだろう、という軽口が浮かんだけれど、それを口にするのは憚った。君は得意げに言葉が続ける。僕は聞きながら戸棚を探る。どこかに閉ってあったはずだった。

「だいたい貴方は分かってないわよ、女心ってやつが。もうちょっとこう、素直に気持ちを言うとかさ。冷たいのもいいんだけどたまにはあったかくしてくれないと寄ってこないわよ？」

「うん、そうだろうね。でも苦手なんだよ、そういうの」

「なにそれ、反応薄い」

「何せそれが理由で女の子に振られたからね」

あ、と君は零した。ごめん、と居心地悪そうに君は続ける。いいよ、と僕は言った。本当に気にしていなかった、むしろ意地の悪い冗談程度のつもりだった。探している右手は食器戸棚へ移って行った。上から覗きこんだり奥の方の深いお皿を出してみたりするうちに、ふと普段使わない皿の中に銀に光る輪っかを見つけた。あった、と心中一人零して僕はそれを取り出す。

でも、と君が言った。やっぱり緊張している声だった。何、と僕は平静を装った。唾が絡んで上手く言葉にならなかった。喉が乾いていることに気づかされて僕は軽いショックを覚えた。残っていた麦茶を一気に飲み干す。

「でもね、今考えると、貴方の冷たさも、本当は私、心地よかったんだわ。あの時は、それを責めたけど」

君は一語一語、ゆっくり言葉を紡いでいた。

「貴方は基本的に冷たかった。馴れ合いが嫌いなのは分かっていたけど、私はそれが少し辛かった」

「でもそれを貴方には言えなかった。だって私があんまりに熱くなったときに、貴方の冷たさはそれを気付かせてくれたから」

「隣に座っていた時とか、同じ部屋にしながら二人がそれぞれ別のことをしている時とか、貴方がほとんど話しかけてくれないのが不満だった」

君はそこで一呼吸置いた。

「でも今は違う風に思えるの。そういうのって幸せだったんだなって。そうやってお互いが、無理なく自然にいられるようになればよかったのよ。無理しなくてずっとくっついていなくたっていいんだわ。そんなことをしなくても、伝わるものも、確かなこともいくらだってある」

「あの時の私にはそれに気づける余裕がなかった。忙しいっていうのは本当に心を失くすことなのね。そういうのとか、うまくいかない仕事とかにイライラして」

僕は無言で君の言葉を聞いている。その耳で同時に外の静かな騒がしさを意識する。車道に面したアパートの二階からは、外界の喧噪がよく聞こえる。と言っても閑静な住宅地、聞こえてくるのは自動車が走る音くらいなものだけだ。

何か言わないの、と無言のままの僕を不審がって君は訊いた。

「あのさ、指輪まだ持ってるって言ったよね？」

そうだけだ。君は不思議そうに言った。

「見つけたんだ、今。食器戸棚の中にあった」

え、と電話越しに君が驚きの声を上げた。

「言われてさ、探してたんだよ、今。失くしたかと思ってたよ。それで一回喧嘩もしたしね。それが最後の喧嘩だったっけ」

息をのむ音が聞こえた。続いて唾をのむ音がして、それから君の強い口調が電話から耳朶を揺らした。

「外、出て。今すぐ」

何だよ、急にという僕の疑問をよそにして、いいから早く、と言って電話は切れてしまった。仕方なしに僕は部屋を出て階段を降りる。持っていたままの指輪を階段の途中で何となく、意味も考えも何にもなしに嵌めたのは、後になって考えてみればやっぱりどこかで期待を抱いていたのかもしれない。

*

アパートの前に止まった車を見つけて唾然とした。見憶えのあるミニバンの隣には、やっぱり見憶えのある影が立っていて、その人影は僕を見つけると嬉しそうに手を振ってきた。

「家出してきたの。荷物は全部車に積んであるわ」

ばし、とボンネットを平手でたたく。いやそこはトランクを叩くべきだろう、と突っ込めとでも言うんだろうか。

「車で来たのか、危ないな。呑んでるっていうのに？」

「ちょうどお酒が飲みたい気分だったのよ」

君の顔は見事に上気して赤かった。ちょっと頬に朱が射すくらいならまあ可愛くて威力も相当なはずなのに、これじゃただの迷惑な酔っぱらいだ。

「だからってそんなに酔っぱらわなくてもいいと思うけど」

「安心して。貴方の家の前まで来てから呑みはじめたのよ。素面じゃ電話する勇気なんて出ないと思ったから」

君はごろんと体を車体に預けた。背が伸びたのかと思ってふと足元を見れば高めのヒールを履いている。それで運転してきたってことか。これだから女ってやつは分からない。

「どのくらい前から？」

二、三時間前からかな、と君は後部座席を指差した。空になったお酒の缶が二十ばかり無造作に放り投げられている。

「こんなところに車を止めて酒盛りか。こんなに飲んで大丈夫なのか？ 三十の女は怖いな」

「怖いんじゃないくて、寂しくなったのよ。会いたくなかったの、無性に。貴方はそうじゃなかった？」

君はふらふらと危なげに千鳥足で寄ってきた。あ、と言って案の定転びそうになったのを、僕はつつい抱きとめてしまう。くすっと頬を綻ばせて、そのまま君は抱きついてくる。

「別に。会いたくなかったわけじゃない。会わないようにしようって約束したから会おうと思わ

なかった、それだけ」

「会いたかった？」

「まあ、会いたかったよ」

それが少し不満だったらしい。君はむくれた顔でこっちを見る。これがせめてジト目なら分かるけど三十にもなってそんな顔されても、と言ったら流石に怒られそうだった。

「ねえ、この三年間ちょっとは寂しかった？」

きゅっ、と握る君の手に力が入った。君は僕の胸に顔を埋めている。表情は見えない。女の方が限度を超えてお酒臭いことを除けば、なかなか絵になるシュチュエーションだ。

「連絡もなしに突然訪ねて来る程ではなかったよ」

「でもそんな三十路の女を受け入れる程には寂しかった、と」

君が上を向いた。何のせいかは知らないが、瞳は少し潤みを帯びて、少しの光をきれいに反射していた。

ふと最後の日を思い出した。最後と言った日。そう言いながら、いつもなら絶対に人前でそういうことはしなかったのに口付けた日。別れを決めた日。君の眼は潤んで街灯を揺らしていた。今と同じように。あの時僕は、何か抗し難いものに背中を押されて思わず触れてしまったんだっけ。

「根に持つね。僕だって同じだよ、もう三十だ」

「素直に寂しかったって言えばいいのに、こんなときくらい」

叶わないな、と思う。こんな風に突然来たり、こういうことを僕は言ったりできないだろう。感情を率直に表せない。

「まあね。僕は美夜みたいに行動派じゃないからね」

「そういうのが孝浩の悪いところだってさっき言ったのに」

ああそうか、と僕は納得した。僕らはあの頃の僕らとは違う。僕も君も、自分では気付けないくらいに小さくはあるけれど、四年半の月日を共に過ごして破局したあの頃の僕らとは違っていたのだ。良い変化なのかどうかはよく分からなかった。別れがもたらした僕の思惟は、多分諦めの色が強く、子供じみた夢見心地の日々を終わらせて、僕は現実逃避のために現実的に行動するようになったのだろう。君はそのままに傷を受け入れ、いつしかそれを愛でるようにまでなっていた。そして僕らは何度か事務的な連絡を手紙で済ませているうちに、その一葉の繋がりを心待ちにするようになっていたのだ。僕らは僕らの責において別れ、それがそのまま今日を迎えさせた。別れてから一度も僕は他の女性に目がいかなかった。そう、同じだったんだ。君が最近僕のことばかりを考えるように、僕だってたった一人の女の子のことしか考えられなかったんだ。くく、と僕は笑いを殺した。それは少し自嘲気味でいた。何てことだ、馬鹿みたいじゃないか。そうして少し考える。一度別れてみることは、こうして二人とも変わるために必要だったのだと思う。いやむしろ諦める為か。抱きしめた君の温もりが悟らせる。全ては必要だったのだ。こうやって今、お互いの変化に気づけるようになるために。そしてお互いがなんだかんだいって結局は、この七年間ずっと思っていたんだということに気付くために。元の鞘に収まっただけのこと。ならきっとこうなる運命だったんだろう。僕はそれを諦観して受け入れる。自分から再び

近づいてきた君を、少しだけ羨ましく思いながら。

部屋まで連れてって、と君は言った。流石にお姫様だっこはできない。肩を貸そうと腕を取ったら君が背中におぶさってきた。僕は黙って君を担ぎあげて部屋まで運ぶ。久しぶりの君の重みは温かくて心地好い。君はとても機嫌がいい。玄関に入って君を離れたところで君はふらふらと倒れこんでこう言った。

「久しぶりに孝浩の布団で寝たいわね」

そう言って君は布団の傍に胡坐をかいた僕を見つめる。上半身だけを起こして腕を絡ませてくる。器用なことだ。僕は右手を君の背中に回して支える。呑気なほどに体重をかけてくる。息が酒臭いせいで雰囲気ぐち壊した。などと思いつつも、赤い頬をさせて目を瞑った君に、また僕から口付けた。

終

絶望論 I

君の絶望が 僕の糧になる
逃げ道を失くして
「迷い込んだはず それなのに何故
壁しかないの？」
君が眠っている間に僕が
入り口も出口も塞いでしまった

物音に気付かず 無防備に眠るから
こんなことになるんだ
ここには二人 それしかいない
絶望したかい？
光も闇も無いよ あるのは君と僕
そして全てをさえぎる壁だけ

生きて[生きて]ゆくには
余りにも足りなさ過ぎる

大丈夫 それでも
僕は空腹を感じないだろう
君が絶望する限り
満たされて いるから

君の絶望が 僕の糧になる
さあもうここには 僕しかいない
僕を見るしかない 僕といるしかない
絶望したかい？

君の望みを 全て絶って
君が僕だけを 望むように

君の声が消えて
僕はとうとう独りになる
雨さえ降ってくれなくて
だから僕は涙さえ流せない

悲劇 ……嗚呼！
叫ぶことで逃れられるなら
この喉を切り裂いて慟哭するのに

絶望が それを許さない

不条理

この世のどこにも情け容赦はなくて
あるのはあたしを苦しめる不条理だけ
運命が宿命が定められたあたしの命が
弄ばれる 世界と時間のオモチャ

あたしがこんなにも涙を流して
空を裂くほどの叫びを上げて
雨ひとつ降らせてくれない
あたしは自分で隠さなきゃならない

この世界………嗚呼、不条理なこの世界
あたしはあたしはあたしはこの世界を
どうやって涙の海を越えてゆけばいいの？

持っているのはこの意思と身体だけ
使えるのは二本の腕と一組の脚
それだけじゃ あまりにも少なすぎる

幸福論 II

この身に起こる 全ての出来事が
あたしを創ってゆく
全ての不幸も 全ての絶望も
あたしには必要だった

輪郭だけのあたしの鋳型に
色んなものを詰め込んで
熱い炎で焼かれた
それがこのあたし

君の裏切りも 一人流す涙も
あたしには必要だった
だから悲しみも苦しみも
"幸福"なのだと

ぼろぼろになった服 傷だらけの魂
そうそれが今のあたし
そういう全ての経験が
あたしを導いてゆく "幸福"……

メタファーイン
グロテスク

嫌よ、そんなの。
あたしの好みじゃないわ。
底の見える湖に浮かべた
睡蓮なんていうものは。

あたしが欲しいのは
そんなキレイなものじゃなくて
コールタールで煮詰めた百合の様な
そういう類のものなのよ。

そんなのどこにもない？

いいえ。ちゃんとあるわ。
分からない？ そう、なら
何処へなり探して彷徨いなさい。

もしあなたがあたしにそれを
持ってきてくれるんなら、さ
あたしは血を吸った真っ赤なバラを
あなたに刺してあげるから。

磔にされた花嫁はヴェールの裏で呟く

純白のドレスについた染みをあたしは全く省みない
だってなんでこんな目にあうかわかってしまったから
綺麗なままで生きていくのはどうやったって無理なこと
だったらあたしはこの手を染めて紅にそしていつしか黒く
掴んだものが汚れないように手袋だけは持ってゆくつもり

地動説

太陽が地球を回っているって
昔の人は信じてた
今は地球が太陽を回っているってさ
科学ってやつがそう言ったらしい

例えば酔狂な神様が
君の周りに絵を書いた
その絵は刻々変わってゆく
それを現実と呼ぶのかい？

世界の裏側で
生命が消えても生まれても
君はそれを知ることなんてないじゃないか

君の目はレンズ
映るのは虚像でしかない
君の手が触れたものだって
真実だなんて確証はない

人ごみですれ違った
灰色のコートの背中

回る 回る
人ごみですれ違った
肩と肩が触れた
灰色のコートの背中

揺れる 揺れる
ため息を知らず零した
思い出が色づく
鮮やかに脳裏に映る

揺れないで 揺れないで
どうして今更
やめたのに やめたのに
想うことなんて 嗚呼…

巡る 巡る
想いは蘇る
繰り返してどうして
揺れてしまう 嗚呼…

青の花！

あたしが足を進めると
水平線は一步引く
あたしが空に目をやると

太陽ばかりが目に入る

ああ この星は球だから
どんなにこの目を凝らしても
自分の背中など見えない
一本の線が引かれるだけで

あの星と星の間には
何千と言う星々が
あたしの見えない遠くの方で
あたしに見えない光を放つ

多分 あたしには見えない遠くに
青と青を分ける一本の線の向こうに
見たこともない 青い花が
誰の目も触れず 咲いているのだと思う

イノセントシーヴァ

この部屋は隙間も無くて
叫ぶ声は虚しく響く
どうしてあたしはこんなところに
気付いたらこんなことに

あたしの足には鎖が繋がれ
重くあたしを束縛する
光を入れる小窓が一つあって
だけどあたしの目は其処に届かない

夜になって光が何処にも無くて
目を閉じているのか開いているのか
夢も見ずに闇の中浮かんでいる
あたしは 何故――？

何故ここにいるのかなど知らない

何故息をするかなんて尚更分からない
問いただしてみても答えは返らない
どれにも どこからも

あたしは呼吸をして意識を保つ
あたしは意識を保つてものを思う
出られるなんて考えもしない
小さな窓から

光が闇色を四角く切り取って
埃が舞っているのがあたしにも見える
声の上げ方なんて忘れてしまった
あたしは 誰――？

誰があたしなのかわからない
誰があたしをここに入れたか知らない
答える誰かはどこにもいなくて
忘れてく 闇の中 白く染まる

雨が降れば

雨が降れば
あなたは来てくれないのでしょうか
わたしは幾多の雫の中へ
自分の涙を隠します

雨が降れば
わたしは泣くことを許されます
あなたの与り知らぬところで
自分で涙を拭きます

雨が降れば
わたしは何処へも出かけずに
あなたのいない寂しさと
自分の弱さを噛み締めます

そしてわたしは願います
あなたが雨に濡れないように
あなたが涙を流さぬように
祈ることが愛だと言って欲しいのです

紅

透明な光の中で
心が洗われるのを恐れている
あたしの憎悪も絶望も
すべて暴かれてしまうのか

青を覆う黒の中で
心が消えるのを恐れている
あたしの記憶も願望も
すべて消え去ってしまうのか

紅が
東と西から
あたしに向かって同時に迫り
逃げ込んだ闇の中で
逃げ道を失くして

生きている夢を見る

生きている夢を見る
目覚めたら朝が飴色に染まる
生きている夢を見る
目覚めたらまつ毛に涙の一滴

生きている夢を見る

考えている夢を見る
誰かと会った夢を見る
言葉を交わした 思い出せない

死んでゆく夢を見る
喉の奥で言葉が絡む
死んでゆく夢を見る
息絶える前に生を夢見る

息絶える前
このアタマが
綺麗な朝日を夢に見せる
終りの夜からその目をそらし

夢に夢見る夢を夢見る
収束の一瞬を無限に拡散
息絶える前 意識絶える前
夢見た生を夢に見せる

生きている夢を見る
生きている夢を見る
生きている
生きている

夢を
生きて
見る
夢

青の花 II

君が漂う空は
果てなく遠い
変わらない青と
雲の向こう

暗闇に浮かぶ青の花咲かす
君はそこへ向かおうとしたんだろう？
恐れることなく

この水平線の先
境界の向こうで
誰にも知られることなく
ロマンの花は闇に浮かぶ
君はそれを見に行ったんだよね
疑うことなく

だから僕は
果てに行く君に
綺麗な詩を捧げよう
この惑星から飛び出してしまった君に

だから僕は
地上で青を咲かせよう
麗なロマンの花を詠おう
そうすれば君からも見えるだろう？

幸福論 I

きらきらと 輝きは
思い出ばかりを映すけど
ゆらゆらと 夢のまに
未来を見せてはくれません

ふらふらと 誘われて
あなたのもとへと往くけれど
ざわざわと この心
想いを伝えてくれません

雨の日は しとしとと
想いばかりを募らせて

会いたいなんて 夢をみて
電話もできない弱虫です

うるんだ瞳で見つめても
あなたは気づいてくれません
知っています 気づいています
自分が会いたいときにだけ
私に会ってくれること

それでも そのときだけでも
名前を呼んでくれるなら
私はあなたから離れられないのです
そんな感情なんて そういう愛情なんて
あなたにはわからないのでしょうかね

侵食サンクチュアリ

あなたの手はとてもあたたかくて
でも本当はどこか冷たい
それは刺すようなわけではなくて
むしろ包むような だけど優しくない

あたしはそれをわかっていて
それでもその手に触れようとする
あなたはそれを極度に嫌って
あたしの手を重ねさせてくれない

だから あたしは
あなたが知らない
あなたの意識のない
この夢の間
あなたに 触れる

いつしか愛しさを覚えるようになって
いいえ 麻薬のようにあたしを侵して

あなたが静かに死ぬたびに
あたしはあなたの手に触れる

そう あなたは
一日一度の眠り
静かなる死の間
あたしに 侵される

温かくて でも本当は
冷たくて それでも
貫くようではない
そんな風にあたしを磔にはしない
その代わり包むように
逃げられなくするだけ

花咲くように星は散る

私たちは
移ろい易い電位のようなものじゃないか
その差が生んだ感情が
無数の電子をやりとりするのだ

惑星たち

緑色の嵐が
窓の外で荒れている
そんな五月のある日に僕は
ぼうっと世界を聞いている

どうやら嵐は
冥王星のちょっとした不機嫌から
木星のオーロラを連れて
雹を舞わせているらしい
僕はふと
宇宙人との交信を試みる
電波は嵐など知らないのだ

やあ そっちはどうだい？
こっちでは地球が
怒られて泣いているよ

返事はなかなか帰ってこない
雲に邪魔された太陽が
デリンジャーな嵐を吹かしているらしい

バラに添えて

無骨に写實的に
描かれているバラを見て
詩人が何か思いに耽る
色遣いがこう、印象的ですね……

小さな王子様は
たった一本のバラを見つめ
ガラスばかりに触ろうとする
君にはやっぱり棘があるんだね……

道端に咲いた
野薔薇を手折って
青年が密かに祈りを捧げる
君にこの想いが届くのだろうか……

そしてバラは
麦藁帽子をかぶった女の子に
悠久の恋の歌を聴かせるのだ
かえるになった王子様がね……

奈落の底で天頂を見上げる
幼子に捧ぐサイアイの詩

踊る夏の雨は煌いた夜に降り注ぐ
子羊は木影に隠れ目を瞑り縮こむ
天上へ昇る雷は空を紫に切り裂く
落ちてくる雨粒 落ちそうな灰色

黒に染まる雲が日の光を消して天蓋の頂点は闇
落ちる音落ちる音切り裂いて穿ち抜いて夏の木々の葉は散る
緑の帳が下りて緑の雨が荒れて緑の風吹きさす

聞こえない動けない見られないのに何故か

——君がさよならを言った気がした。

光線の行進

無感動なsin波が
規則的に行進する
僕は宇宙の光たちに
抒情的な夢をみる

夏の真夜中に
シリウスだって？
それは君 きっと水星が
太陽の光でも反射したんだろう

靴ひもが切れた
替えなんて持っているもんか

光と時間が
時速一時間くらいで
怠惰に交信している

どこまでいくんだい？
どこまでいくんだい？
どこまでいくんだい？
どこまで……

吸い込まれるように
落ちてゆきながら
僕が目を開けたら
望遠鏡が闇ばかり収めていた

春の雨

遥かな電子の旅行が
僅かな電位の差を生んで
微かに生まれた感情が
確かに君の言葉になる

絹糸のように雨が降る
柔針のように雨が降る
水滴は僕に濡れそぼる
刺すのでもなく包むのでもなく

さよならと 揺れた空が
暗く翳って雨降らし
君の元 僕の元
冷たい冷たい温かさ

血を流す肌を
舐めるように
張り付いたシャツを
乾かす空気は

ごめんねと 揺れた

夕闇、茜色

寄りかかって
頬を寄せる
冷たく冷たい
さっきまで君が凭れていた壁

口をつけて
温い甘味
後味は苦すぎる
出しすぎたジャスミンティー

斜陽と
窓と
茜色から逃げて
壁の陰の中で

次いつ逢うと
言わなかった
君と私が同時に悲しい

恋の終わりの始まりに

からんという音が
やけに響いた
汗をかいたグラス
気だるい喫茶店

窓の外ばかり見て
ひまわりの向こうの車道
日傘をさした人が
やけに羨ましい

ああやって 光を
柔らかく受け止められたら

秒針の
かちとかちの間が
無性に退屈で仕方ない
私の知らない人の本
君はひたすら文字を辿る

手持無沙汰に ストローを
こねくりまわしてみるけれど

どうしてだろう
人前でキスをするのは平気なのに
二人きりになると手を放したくなる

合鍵

大きめの鞆を買いました
安売りの処分品です
少しぼけた色が
なんだかちょうどいいと思ったから

別に
この日のために
私の物を置かなかったわけではありません

束縛したくなかった
依存も
愛することさえ
したくありませんでした

合鍵はポストに入れておきます

左手

終りなんだなって
思いました
あの日
あなたが
歩いているのを見た時に

薄く笑って
私は

泣きもしない自分に腹を立てました

あなたは

きれいな

睡蓮のようで

カフェオレを

右手に下げて

左手の先は

見たくありません

なおさら 薬指なんて。

雲ひとつない澄んだ空

恋多かりし夏草の

裸足に少し擦って

触れないように触れてきて

そのくせすぐにさようなら

風が冷たくなる頃に

朝方晴れた西の空

そろそろ毛布が欲しい頃

誰でもいいわけなんかない

長袖

深まる

紅と茶色のニュアンス

空には手が届かないと知ったから

紅茶ばかりを啜っては

知っていて尚眺めやる

雲ひとつない澄んだ空

焦って舌を 火傷する

小品集（２）

<http://p.booklog.jp/book/68868>

著者 : yukumemi

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yukumemi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68868>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68868>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ